

若江遺跡第44次発掘調査報告

1993・9

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市内に所在する埋蔵文化財包蔵地は百数十ヶ所を数え、包蔵地での土木・建築工事は毎年増加の一途をたどっております。工事に先だって緊急発掘調査も急増している状況にあります。また、本市域では下水道管整備は急務であり、西地区から中地区へと普及しつつあります。

今回、中地区の若江遺跡において下水道管理設工事が実施されることになり、これに先だって発掘調査をする運びとなりました。当遺跡は昭和47年に若江小学校校舎増築工事に伴って第1次調査が実施され、今回で第44次を数えます。当遺跡は弥生時代から近世の集落、若江寺、若江郡衙、若江城を包括した複合遺跡であることが今日までの調査で判明しています。本調査地は幅約1.5mと細長いものでしたが若江城の東堀や多量の遺物が発見され、当遺跡を考える上で貴重な資料を得ることができました。しかし、今回の調査は当遺跡の一端を見たにすぎず、今後の発掘調査によってその全貌の解明に努力していきたいと思います。

最後に、調査および報告書作成にあたって御協力・御指導をいただいた方々に厚くお礼申し上げるとともに、本書が歴史研究をはじめ、広く活用されることを心から願うものであります。

平成5年9月

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 新庄 孝臣

例 言

1. 本書は東大阪市が進めている下水道管渠築造工事に伴って発掘調査を実施した若江遺跡の調査報告書である。
2. 現地調査および遺物整理は、財團法人東大阪市文化財協会が東大阪市の委託を受け、現地調査を平成2年8月16日～平成3年2月15日まで、遺物整理を平成3年2月16日～平成5年3月31日まで実施した。
3. 調査・整理は次の事務局体制により進めた。(平成5年9月現在)
理事長 新庄孝臣 (東大阪市教育委員会教育長)
常務理事 西脇 實
事務局長 関 信二 (東大阪市教育委員会社会教育部次長)
調査部長 原田 修 (東大阪市教育委員会文化財課主幹)
調査部員 上野節子
庶務部長 吉川正光 (東大阪市教育委員会文化財課主幹)
庶務部員 大林 享 朝田直美 村田周亮
調査担当 才原金弘 (東大阪市教育委員会文化財課主任)
調査補助 井上伸一 米谷昌憲 山村晃 小川雅人 辻本智英 福林利彦 本田けい子
西川福美 竹田昌代 栗田一己
4. 本書の執筆と編集は才原がおこなった。
5. 図版に収めた遺構写真は才原と補助員が撮影し、遺物写真はスタジオ、G. F. プロに委託した。
6. 調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財團法人日本色彩研究所監修の「新版標準土色帖」に準じた。
7. 遺構実測は建設省告示による国土座標第VI系を使用した。水準高はT.P.値を用いた。

本文目次

はしがき

例言

| | |
|------------|----|
| I. 調査に至る経過 | 1 |
| II. 位置と環境 | 2 |
| III. 調査の概要 | 5 |
| 1. 調査の方法 | 5 |
| 2. 層位 | 5 |
| 3. 造構 | 8 |
| IV. 出土遺物 | 13 |
| 1. 土器 | 13 |
| 2. 製塙土器 | 54 |
| 3. 墓輪 | 54 |
| 4. 瓦 | 54 |
| 5. 土製品 | 58 |
| 6. 石製品 | 58 |
| 7. 木製品 | 59 |
| 8. 金属製品 | 63 |
| 9. 銭貨 | 64 |
| V. まとめ | 64 |

挿図目次

| | |
|-------------------|------|
| 第1図 造跡周辺図 | 3 |
| 第2図 調査位置図 | 4 |
| 第3図 東壁断面実測図 | 7 |
| 第4図 A～D地区造構実測図 | 9・10 |
| 第5図 C-1地区造構実測図 | 11 |
| 第6図 C-1地区石組水路実測図 | 13 |
| 第7図 堀出土土器実測図 | 14 |
| 第8図 堀出土土器実測図 | 16 |
| 第9図 堀出土土器実測図 | 17 |
| 第10図 落ち込み1出土土器実測図 | 19 |
| 第11図 落ち込み1出土土器実測図 | 20 |

| | |
|--------------------------------------|----|
| 第12図 落ち込み1出土土器実測図 | 21 |
| 第13図 落ち込み1出土土器実測図 | 22 |
| 第14図 落ち込み2・3出土土器実測図 | 24 |
| 第15図 溝1・2・3出土土器実測図 | 25 |
| 第16図 土塙2・4・5・6・7、ピット5・8・11・14出土土器実測図 | 28 |
| 第17図 A地区包含層出土土器実測図 | 30 |
| 第18図 A地区包含層出土土器実測図 | 32 |
| 第19図 B地区包含層出土土器実測図 | 34 |
| 第20図 B地区包含層出土土器実測図 | 36 |
| 第21図 B地区包含層出土土器実測図 | 38 |
| 第22図 B地区包含層出土土器実測図 | 39 |
| 第23図 C地区包含層出土土器実測図 | 42 |
| 第24図 C地区包含層出土土器実測図 | 43 |
| 第25図 C-1地区包含層出土土器実測図 | 45 |
| 第26図 C-1地区包含層出土土器実測図 | 46 |
| 第27図 D地区包含層出土土器実測図 | 49 |
| 第28図 E地区包含層出土土器実測図 | 51 |
| 第29図 F地区包含層出土土器実測図 | 52 |
| 第30図 G地区包含層出土土器実測図 | 53 |
| 第31図 製塙土器・埴輪実測図 | 55 |
| 第32図 瓦実測図 | 56 |
| 第33図 土製品・石製品実測図 | 57 |
| 第34図 石製品実測図 | 58 |
| 第35図 木製品実測図 | 60 |
| 第36図 木製品実測図 | 62 |
| 第37図 金属製品実測図 | 63 |
| 第38図 錢貨拓影 | 64 |

表 目 次

| | |
|------------|----|
| 第1表 ピット計測値 | 12 |
|------------|----|

図版目次

- 図版1 遺構 1. 遺構全景 (A地区)
2. 土塙1、ピット1・2 (A地区)
- 図版2 遺構 1. 土塙1 (A地区)
2. 土塙2 (A地区)
- 図版3 遺構 1. 溝1 (A地区)
2. 遺構全景 (B地区)
- 図版4 遺構 1. 溝2・3 (B地区)
2. ピット5～9・11 (B地区)
- 図版5 遺構 1. 落ち込み1 (B地区)
2. 落ち込み1 内土器出土状況 (B地区)
- 図版6 遺構 1. 東壁断面 (C地区)
2. 壁西肩 (C地区)
- 図版7 遺構 1. 石組水路 (C-1地区)
2. 石組水路 (C-1地区)
- 図版8 遺構 1. 遺構全景 (C-1地区)
2. 遺構全景 (C-1地区)
- 図版9 遺構 1. 土塙5 (C-1地区)
2. 遺構全景 (D地区)
- 図版10 遺構 1. 壁東肩 (D地区)
2. 土塙7 (D地区)
- 図版11 遺物 1. 壁出土土器
2. 壁出土土器
- 図版12 遺物 1. 壁出土土器
2. 壁出土土器
- 図版13 遺物 1. 壁出土土器
2. 壁出土土器
- 図版14 遺物 1. 壁出土土器
2. 壁出土土器
- 図版15 遺物 1. 壁出土土器
2. 壁出土土器
- 図版16 遺物 1. 壁出土土器
2. 壁出土土器
- 図版17 遺物 落ち込み1 出土土器
- 図版18 遺物 落ち込み1 出土土器
- 図版19 遺物 1. 落ち込み1 出土土器
2. 落ち込み1 出土土器
- 図版20 遺物 1. 落ち込み1 出土土器
2. 落ち込み1 出土土器
- 図版21 遺物 1. 落ち込み1 出土土器
2. 落ち込み1 出土土器
- 図版22 遺物 1. 落ち込み1 出土土器
2. 落ち込み1 出土土器
- 図版23 遺物 1. 落ち込み1 出土土器
2. 落ち込み1 出土土器
- 図版24 遺物 1. 落ち込み1 出土土器
2. 落ち込み1 出土土器
- 図版25 遺物 1. 落ち込み1 出土土器
2. 落ち込み1 出土土器
- 図版26 遺物 1. 落ち込み1 出土土器
2. 落ち込み3 出土土器
- 図版27 遺物 1. 落ち込み2 出土土器
2. 溝1・2 出土土器
- 図版28 遺物 1. 溝3 出土土器
2. 溝3 出土土器
- 図版29 遺物 1. 溝3 出土土器
2. 土塙2 出土土器
- 図版30 遺物 1. 土塙4・5 出土土器
2. 土塙6・7、ピット5・11出土土器
- 図版31 遺物 1. ピット8 出土土器
2. A・B地区包含層出土土器
- 図版32 遺物 B地区包含層出土土器
- 図版33 遺物 B・C地区包含層出土土器
- 図版34 遺物 C地区包含層出土土器
- 図版35 遺物 C-1地区包含層出土土器
- 図版36 遺物 1. C-1・D地区包含層出土土器
2. A地区包含層出土土器

- 图版37 遗物 1. A地区包含层出土土器
2. A地区包含层出土土器
- 图版38 遗物 1. A地区包含层出土土器
2. A地区包含层出土土器
- 图版39 遗物 1. A地区包含层出土土器
2. A地区包含层出土土器
- 图版40 遗物 1. A地区包含层出土土器
2. A地区包含层出土土器
- 图版41 遗物 1. B地区包含层出土土器
2. B地区包含层出土土器
- 图版42 遗物 1. B地区包含层出土土器
2. B地区包含层出土土器
- 图版43 遗物 1. B地区包含层出土土器
2. B地区包含层出土土器
- 图版44 遗物 1. B地区包含层出土土器
2. B地区包含层出土土器
- 图版45 遗物 1. B地区包含层出土土器
2. B地区包含层出土土器
- 图版46 遗物 1. B地区包含层出土土器
2. B地区包含层出土土器
- 图版47 遗物 1. B地区包含层出土土器
2. B地区包含层出土土器
- 图版48 遗物 1. C地区包含层出土土器
2. C地区包含层出土土器
- 图版49 遗物 1. C地区包含层出土土器
2. C地区包含层出土土器
- 图版50 遗物 1. C地区包含层出土土器
2. C地区包含层出土土器
- 图版51 遗物 1. C地区包含层出土土器
2. C—1地区包含层出土土器
- 图版52 遗物 1. C—1地区包含层出土土器
2. C—1地区包含层出土土器
- 图版53 遗物 1. C—1地区包含层出土土器
2. C—1地区包含层出土土器
- 图版54 遗物 1. C—1地区包含层出土土器
2. D地区包含层出土土器
- 图版55 遗物 1. D地区包含层出土土器
2. D地区包含层出土土器
- 图版56 遗物 1. E地区包含层出土土器
2. E地区包含层出土土器
- 图版57 遗物 1. F地区包含层出土土器
2. G地区包含层出土土器
- 图版58 遗物 1. 製塙土器
2. 製塙土器
- 图版59 遗物 瓦
- 图版60 遗物 瓦、石製品
- 图版61 遗物 1. 石製品
2. 土製品
- 图版62 遗物 1. 金属製品、錢貨
2. 金属製品
- 图版63 遗物 木製品
- 图版64 遗物 木製品

I. 調査に至る経過

若江遺跡は東大阪市若江本町、若江北町、若江南町一帯に広がる弥生時代から近世の複合遺跡である。本遺跡がある若江周辺は古くより旧村を中心に開発が進み、ほとんどが住宅や商店、工場となっている。

東大阪市域では下水道管整備事業が計画され、年々実施されてきた。下水道管理設は西地区より普及し、中・東地区に移りつつある。中地区の若江遺跡でも工事は進行しており、これに先だって発掘調査が必要となっている。下水道管理設は若江の集落などを中心に実施されているが、道幅も狭い所が多い。また、調査範囲も幅が狭く、細長いために発掘調査も制約が多い状況となっている。

若江遺跡が周知されたのは、昭和9年の旧楠根川改修工事の際に弥生土器、土師器、須恵器などの遺物が出土したことによる。また、昭和42年には若江公民館建設工事が実施され、この際に土師器の羽釜積み井戸が1基みつかっている。

若江遺跡が本格的に発掘調査されるようになったのは、昭和47年の若江小学校校舎増築工事（第1次調査）に伴ってである。調査では鎌倉時代から室町時代の井戸、柱穴、土塁、溝などの遺構がみつかっている。また、白鳳時代以降の土器、瓦、石製品などが出土している。これらの遺構、遺物は若江寺、若江郡衙、若江城、中世の集落のものと考えられた。また、昭和49年には東大阪市教育委員会によって若江遺跡の範囲確認調査が国庫補助事業で実施された。調査では礎石列や博列などの遺構が検出され、若江城の遺構と考えられた。

昭和49年以降に大阪東大阪線拡幅工事と下水道管理設工事が継続的に実施されることになった。道路拡幅工事は若江遺跡を東西に横切るものであった。また、下水道管理設工事は本管理設用であり推進工法の立坑が遺跡内に点々とあけられた。両工事に伴って発掘調査が実施され、遺跡の性格や範囲などが明らかになった。第33次調査では弥生時代中期の方形周溝墓と考えられる溝が検出されており、若江遺跡で最も古い時期の遺構が確認された。また、第20・27次調査などでは若江城の堀が確認され、城の中心部が明らかになった。堀内からは若江城との関連を思われる遺物も多く出土しており、刀、鐵、鉄砲の玉、小札などの武器や武具がある。若江寺や若江郡衙の明確な遺構はみつかっていないが、白鳳時代以降の瓦などが多量に出土しており、今後、遺構も検出されるものと思われる。

今回、東大阪市若江北町4丁目地先で下水道管理設工事が実施されることになった。工事予定地は若江遺跡内にあり、東大阪市教育委員会文化財課が試掘調査を実施した。試掘調査では工事予定地の西側約2古墳時代以降の遺構、遺物が確認され、工事に先だって発掘調査が必要との見解が出された。東大阪市下水道部と東大阪市教育委員会文化財課が協議した結果、発掘調査を実施することになった。発掘調査は財團法人東大阪市文化財協会が東大阪市下水道部の委託を受けておこなった。第44次調査の面積は210m²であり、平成2年8月16日～3年2月15日まで現場作業を実施した。

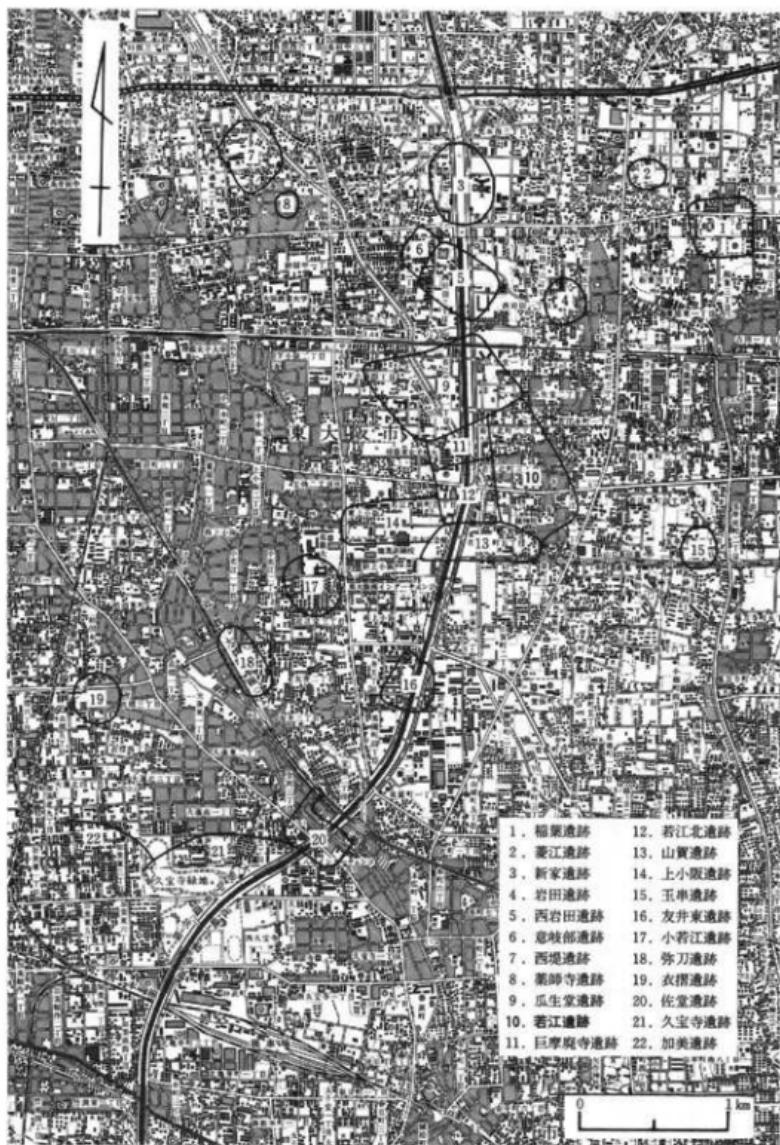
II. 位置と環境

若江遺跡周辺に人々が住み始めるのは弥生時代前期からである。若江遺跡の南西約0.3kmに山賀遺跡、北西約0.7kmに瓜生堂遺跡、さらに西約3.5kmに高井田遺跡などが出現する。当時、若江遺跡の北には河内湖が広がっており、大小5本からなる旧大和川（恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川）が南から、淀川が北から流れ込んでいた。旧大和川と淀川の土砂流出によって河内平野は形成された。当時の人々は自然堤防や微高地に集落を営み、後背湿地を水田として利用していた。また、生駒山西麓の扇状地や扇状地から平野部へ移行する地点にも前期の集落が出現し、中垣内、鬼虎川、鬼塚、繩手遺跡などがあげられる。これらの遺跡は中、後期まで続くものが多い。若江遺跡では中期の方形周溝墓と考えられる溝がみつかっており、近くに同時期の集落があったと考えられる。

若江遺跡周辺で古墳時代の遺跡は山賀、瓜生堂、西岩田、意岐部遺跡などがある。古墳時代の人々も前代の人々と同条件の場所を選び集落を営んでいた。若江遺跡ではピットなどが検出されている。生駒山西麓の扇状地にも点々と集落が存在しており、掘立柱建物や竪穴住居などが検出されている。また、古墳時代中期～後期には多くの古墳が造営されている。後期には古墳群を形成するものが多く、生駒山西麓の各尾根に点在する。出雲井、山畠、花草山、五里山古墳群などがあげられる。

奈良時代以降になると若江遺跡では人々の生活が活発になったらしく、多量の遺物や遺構が確認されている。若江の地には若江寺、若江郡衙、若江城が存在したと考えられており、これらの遺構、遺物がみつかっている。若江寺は白鳳時代に創建された寺院である。明確な遺構はみつかっていないが瓦などが多量に出土することから推測できる。東大阪市域で若江寺と同時期の寺院は河内寺、法通寺、石凝寺などがあげられ、河内寺や法通寺では遺構も検出されている。また、河内国若江郡をおさめる郡衙も若江の地にあったと推定される。若江城は明徳元年（1390年）、畠山基国が河内の守護になったころ、守護代遊佐氏の本拠として築かれた城である。応仁の乱以後、若江城は幾度も戦乱に巻き込まれていることが文献によってわかっている。また、天正9年（1581年）、宣教師ルイス＝フロイスが本国のローマに書き送った「日本耶蘇会年報」の一節には若江城が姿を消したことが伝えられており、この年より以前に若江城は廃城になったと考えられる。近年の調査では若江城のものと考えられる遺構が多くみつかっている。若江城は東西や南北に伸びる堀が数重にめぐらされており、堀内には逆茂木も打たれている。若江城の礎石と考えられるものや付属施設の埠立柱建物もみつかっている。また、若江遺跡では若江寺、若江郡衙、若江城だけでなく、中世の集落も存在しており、掘立柱建物、井戸、溝などの遺構と各種の遺物が出土している。

若江の地に弥生時代中期から人々が住み始め、若江寺、若江郡衙、若江城などが建てられた大きな要因として立地条件が考えられる。若江遺跡は自然堤防上にあり、周辺より一段高くなっていることから生活に適した場所であったと思われる。



第1図 遺跡周辺図



第2図 調査位置図

III. 調査の概要

1. 調査の方法

地区別は建設省告示による第VI座標系を利用した。また、調査の簡便化を図るため、調査地は西よりA、B、C地区と仮称した。各地区は20mごとにわけた。C地区より南に枝状に伸びる地区はC-1地区とした。A-H地区(160m)とC-1地区は本調査を実施した。H地区より東の地区(40m)は遺構、遺物が認められなかつたので立会調査とした。調査は工事の関係から西より20mごとにおこない、A、B、C地区へと移って実施した。上層の盛土は機械掘削し、下層は人力掘削で精査した。

2. 層位(第3図)

断面実測は各地区の東壁でおこなった。約20m間隔である。A-H地区の断面実測図を作成した。以下、各層位の概略を記す。

A地区

第1層 盛土。層厚は70~80cmを測る。

第2層 灰色(10Y4/1)シルト層。微量の中疊と1~2cmの炭化物を少量含む。整地層である。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は40~50cmを測る。

第3層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト層。多量の小疊を含む。上面より約1/2の深さまで鉄分の沈着層がある。整地層である。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は10~15cmを測る。

第4層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土層。微量の中疊を含む。中世の遺構面。層厚は30~40cmを測る。

第5層 灰黄褐色(10YR5/2)細疊~中疊層。弥生時代後期~布留式の遺物を含む。層厚は30cm以上を測る。

A層 暗オリーブ灰色(10GY4/1)シルト層。微量の中疊と0.5~1cmの炭化物を含む。溝1内の堆積層である。層厚は30cmを測る。

B地区

第1層 盛土。層厚は北で30cm、南で1m40cmを測る。

第2層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層。微量の炭化物を含む。微量の鉄分を斑点状に含む。整地層である。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は50~70cmを測る。

第3層 黒褐色(10YR3/2)シルト層。微量の炭化物を含む。微量の鉄分を斑点状に含む。整地層である。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は30~40cmを測る。

第4層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト層。中世の遺構面。層厚は5~20cmを測る。

第5層 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂層。南では欠層となる。層厚は20cmを測る。

第6層 暗灰黄色(2.5Y5/4)粗粒砂～細礫に灰オリーブ色(5Y4/2)シルトが混じる層。古墳時代の遺物を含む。層厚は5～20cmを測る。

第7層 暗灰色(10YR3/3)細粒砂～中礫層。下部にいくにしたがい粒径が大きくなる。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は70cm以上を測る。

C地区

第1層 盛土。層厚は南で50cm、北で70cmを測る。

A層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粘土層。多量の細～中礫と少量の炭化物を含む。塙の埋土である。層厚は30～40cmを測る。

B層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土層。多量の細礫と微量の炭化物を含む。塙の埋土である。層厚は20～30cmを測る。

C層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粘土層。中粒砂～中礫を含む、塙の埋土である。層厚は20～30cmを測る。

D層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂～中礫層。下部ににぶい黄褐色粘土(10YR5/4)をブロック状に含む。塙の堆積土である。層厚は25～40cmを測る。

E層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂～細礫層。少量の炭化物を含む。塙の堆積土である。層厚は15～20cmを測る。

F層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土層。植物遺体を含む。塙の堆積土である。層厚は10～15cmを測る。

第2層 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂～細礫層。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は20cm以上を測る。

D地区

第1層 盛土。層厚は50～80cmを測る。

第2層 暗褐色(10YR3/3)粘土層。多量の極細粒砂～小礫を含む。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は45cmを測る。

第3層 灰オリーブ色(5Y5/3)粗粒砂層。少量の小礫を含む。層厚は20～40cmを測る。

第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂～極粗粒砂層。小礫を含む。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は35～50cmを測る。

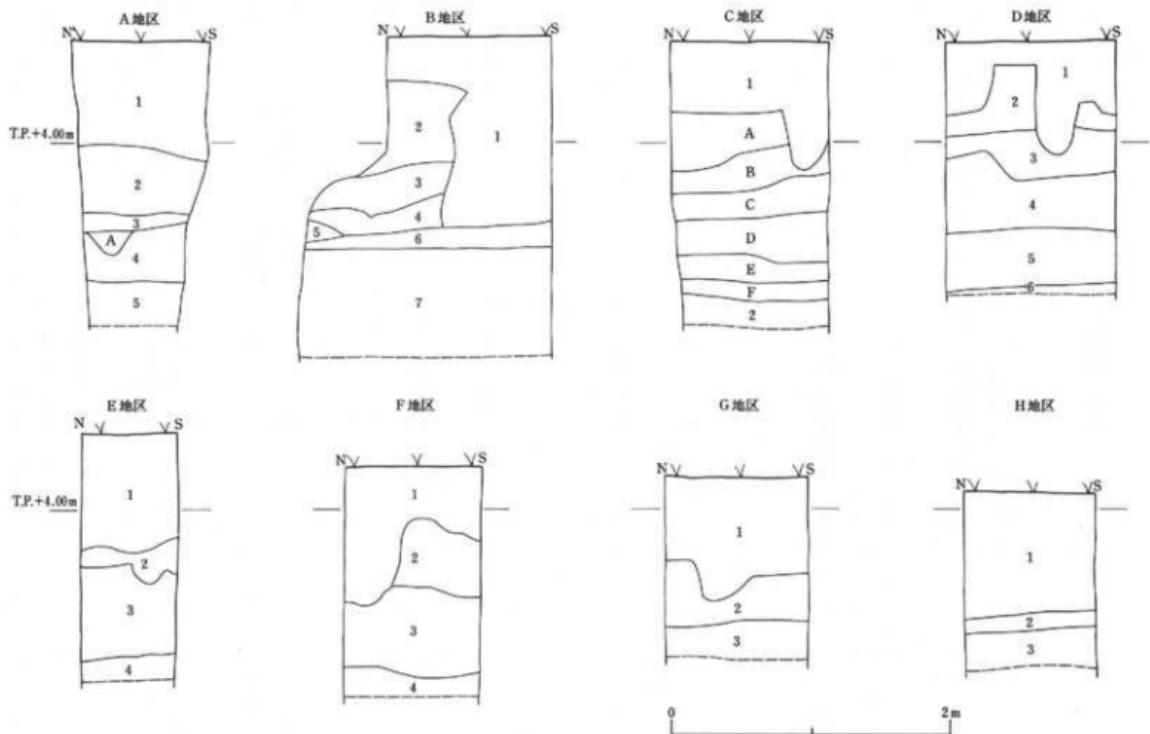
第5層 赤褐色(5YR4/8)粗粒砂～極細粒砂層。小礫を含む。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は40～50cmを測る。

第6層 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂～極粗粒砂層。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は10cm以上を測る。

E地区

第1層 盛土。層厚は70～80cmを測る。

第2層 黑褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト層。小礫を含む。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は10～25cmを測る。



第3図 東壁断面実測図

第3層 明黄褐色(2.5Y6/6)中粒砂～細礫層。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は90cmを測る。

第4層 明黄褐色(2.5Y6/6)細砂～中粒砂層。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は20cm以上を測る。

F地区

第1層 盛土。層厚は北で1m、南で50cmを測る。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細砂～中粒砂層。中礫を含む。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は40～50cmを測る。

第3層 暗緑灰色(7.5GY3/1)極細砂～細砂層。中礫を含む。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は50～60cmを測る。

第4層 灰色(10Y4/1)粘土層。細砂を含む。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は30cm以上を測る。

G地区

第1層 盛土。層厚は50～85cmを測る。

第2層 オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土質シルト層。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は30～50cmを測る。

第3層 暗緑灰色(10GY5/1)粘土層。極細粒砂を含む。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は30cm以上を測る。

H地区

第1層 盛土。層厚は80～90cmを測る。

第2層 緑灰色(7.5GY5/1)粘土質シルト層。奈良時代以降の遺物を含む。層厚は10cmを測る。

第3層 暗緑灰色(10GY4/1)粘土層。極細粒砂を含む。弥生時代後期～布留式の遺物を含む。層厚は25cm以上を測る。

3. 遺構

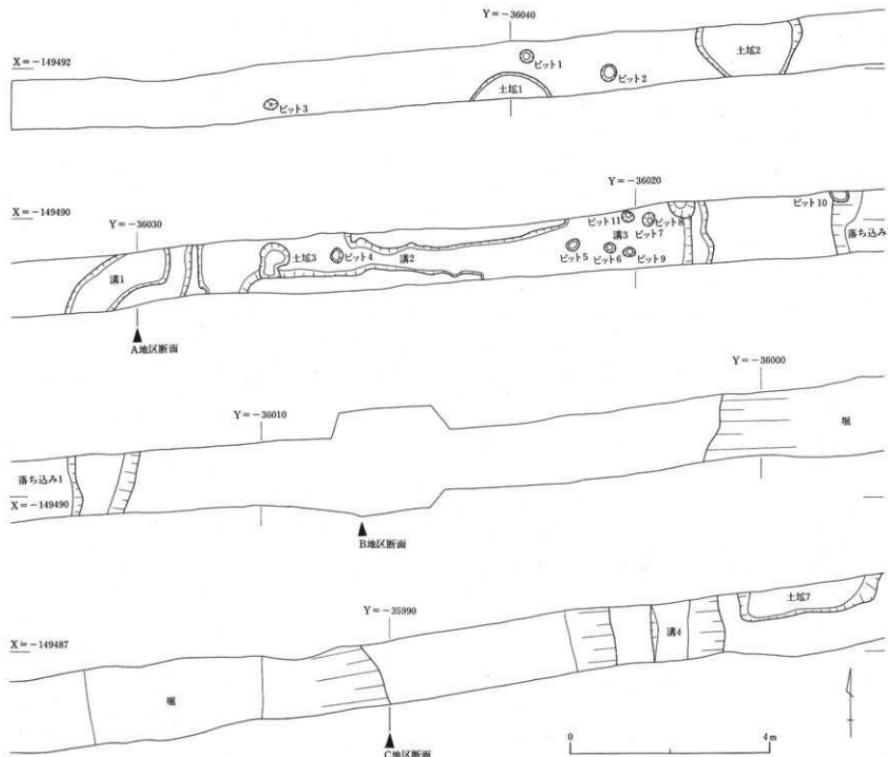
A～D地区とC-1地区で中世の遺構を検出した。D地区より東では遺構は検出できなかった。遺構は土塙7、溝4、ピット20、堀1、落ち込み3、石組水路1がある。

土塙1（第3図）

A地区の中央で検出した。土塙の南北は調査地外にある。円形を呈すると考えられる。長径1.5m、短径0.5m以上、深さ0.2mを測る。出土遺物がないので遺構の詳細な時期は不明である。

土塙2（第3図）

A地区の東側で検出した。土塙の南北は調査地外にある。やや不整形であるが円形を呈すると考えられる。長径2.1m、短径1.0m以上、深さ0.3mを測る。土師器、瓦器が出土した。出土遺物より土塙の時期は12世紀と考えられる。



第4図 A～D地区遺構実測図

土塙3（第3図）

B地区の西側で検出した。溝2によって上部は削平を受ける。瓢箪形を呈する不整形な土塙である。長径0.7m、短径0.6m、深さ0.1mを測る。出土遺物がないので造構の詳細な時期は不明である。

土塙4（第4図）

C-1地区の南側で検出した。土塙の西は調査地外にある。やや不整形であるが楕円形を呈すると考えられる。長径1.2m、短径0.6m以上、深さ0.3mを測る。土師器、瓦器、須恵器が出土した。出土遺物より土塙の時期は12世紀と考えられる。

土塙5（第4図）

C-1地区の中央で検出した。土塙の東西は調査地外にある。北肩は弧を描き、南肩は直線的に終る。長径1.4m、短径0.9m以上、深さ0.4mを測る。土師器、瓦器が出土した。出土遺物より土塙の時期は13世紀と考えられる。

土塙6（第4図）

C-1地区の北側で検出した。土塙の西は調査地外にある。隅丸方形を呈すると考えられる。長辺1.2m、短辺0.4m以上、深さ0.2mを測る。土師器が出土した。出土遺物より土塙の時期は16世紀と考えられる。

土塙7（第3図）

D地区の西側で検出した。土塙の北は調査地外にある。やや不整形であるが隅丸方形を呈すると考えられる。長辺2.9m、短辺0.6m以上、深さ0.5mを測る。土師器が出土した。出土遺物より土塙の時期は16世紀と考えられる。

溝1（第3図）

A、B地区の境で検出した。南西から北東方向に伸びる溝である。

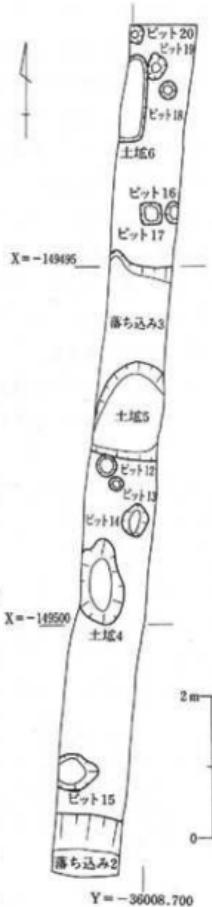
幅0.8m、深さ0.1mを測る。土師器が出土した。出土遺物より溝の時期は13世紀と考えられる。

溝2（第3図）

B地区の西側で検出した。L字形に伸びる溝である。溝3と切り合う。幅0.4~0.6m、深さ0.1mを測る。土師器、須恵器が出土した。出土遺物より溝の時期は13世紀と考えられる。

溝3（第3図）

B地区の西側で検出した。南北方向に伸びる溝である。溝2と切り合う。幅1.5m、深さ0.1mを測る。土師器、瓦器が出土した。出土遺物より溝の時期は16世紀と考えられる。



第5図 C-1地区構造実測図

溝4（第3図）

D地区の西側で検出した。南北方向に伸びる溝である。幅1.6m、深さ0.6mを測る。出土遺物がないので造構の詳細な時期は不明である。

ピット（第3・4図）

A、B、C—1地区で合計20のピットを検出した。円形、楕円形、方形、不整形を呈するものがある。出土遺物よりピットの時期は13世紀と16世紀の2時期がある。ピットの径や深さなどは第1表に記した。

堀（第3図）

C、D地区で検出した。南北方向に伸びる堀である。西肩は1段、東肩は2段で落ちる。土止用の矢板が短いことから堀の底までは完掘できなかった。幅15.5m、深さ1.3m以上を測る。堀内は大きく2層に分けられ、上層が埋土、下層が堆積土である。多量の土師器、須恵器、瓦器や瓦、石製品、木製品が出土した。出土遺物より堀の時期は16世紀と考えられる。

落ち込み1（第3図）

B地区の東側で検出した。落ち込みの東西は調査地外にある。形状は不明である。西肩は1段、東肩は2段で落ちる。ピット10によって切られる。幅3.5m、深さ0.4mを測る。多量の土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器や瓦、石製品、木製品が出土した。出土遺物より落ち込みの時期は16世紀と考えられる。

落ち込み2（第4図）

C—1地区の南側で検出した。北肩以外は調査地外にある。形状は不明である。幅0.9m以上、深さ0.5mを測る。土師器、瓦器が出土した。出土遺物より落ち込みの時期は13世紀と考え

第1表 ピット計測表

| 番号 | 形態 | 径・一边 | 深さ | 備考 | 出土遺物 |
|-------|------|---------|----|--------------|----------|
| No. 1 | 円 形 | 径25 | 17 | | 土師器、瓦器 |
| 2 | 円 形 | 径30 | 17 | | |
| 3 | 不整形 | 長27 短21 | 18 | | 土師器 |
| 4 | 楕円形 | 長30 短24 | 11 | 溝2に削平を受ける | ④ 土師器 |
| 5 | 楕円形 | 長27 短23 | 17 | 溝3に削平を受ける | ④ 土師器、瓦器 |
| 6 | 楕円形 | 長25 短20 | 9 | " | |
| 7 | 円 形 | 径24 | 11 | " | |
| 8 | 不 明 | 径50 | 21 | 溝3を切る | ④ 土師器、瓦器 |
| 9 | 楕円形 | 長25 短18 | 12 | 溝3に削平を受ける | |
| 10 | 不 明 | 径32 | 16 | 落ち込み1を切る | |
| 11 | 楕円形 | 長25 短20 | 7 | 溝3に削平を受ける | ④ 土師器 |
| 12 | 円 形 | 径32 | 8 | 土塙5と切り合う | |
| 13 | 円 形 | 径18 | 4 | | |
| 14 | 不整形 | 長41 短35 | 40 | | |
| 15 | 不 明 | 径55 | 26 | | 土師器、瓦器 |
| 16 | 不 明 | 径32 | 7 | 落ち込み2に削平を受ける | |
| 17 | 隅丸方形 | 辺32 | 15 | " | 土師器 |
| 18 | 円 形 | 径25 | 22 | " | 土師器、瓦器 |
| 19 | 不整形 | 径37 | 16 | 土塙6と切り合う | |
| 20 | 不 明 | 径25 | 3 | 落ち込み2に削平を受ける | |

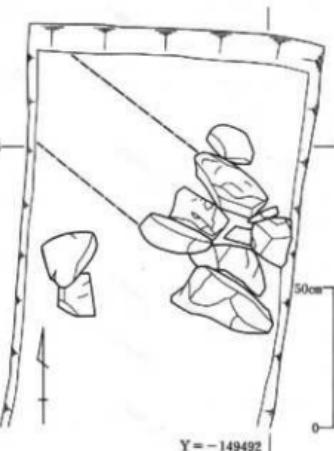
られる。

落ち込み3（第4図）

C-1地区の中央で検出した。北肩のみが段状に落ちる。深さ0.2mを測る。土師器、瓦器が出土した。出土遺物より落ち込みの時期は16世紀と考えられる。

石組水路（第5図）

C-1地区の北側で検出した。前記した遺構の上層で確認した。北西から南東方向に伸びる石組水路である。北西部はすでに破壊されており、周辺に石が散乱する。20~30cm大の石を利用しておらず、底と2側面に石が残る。内側幅0.2m、深さ0.2mを測る。出土遺物はないが整地層に築造されていることから16世紀と考えられる。



第6図 C-1地区石組水路実測図

IV. 出土遺物

今回の調査では弥生時代～中世に至る時期の遺物が出土した。土器、製塩土器、埴輪、瓦、土製器、石製品、木製品、金属製品、錢貨がある。以下、各種類ごとに説明を記す。

1. 土器

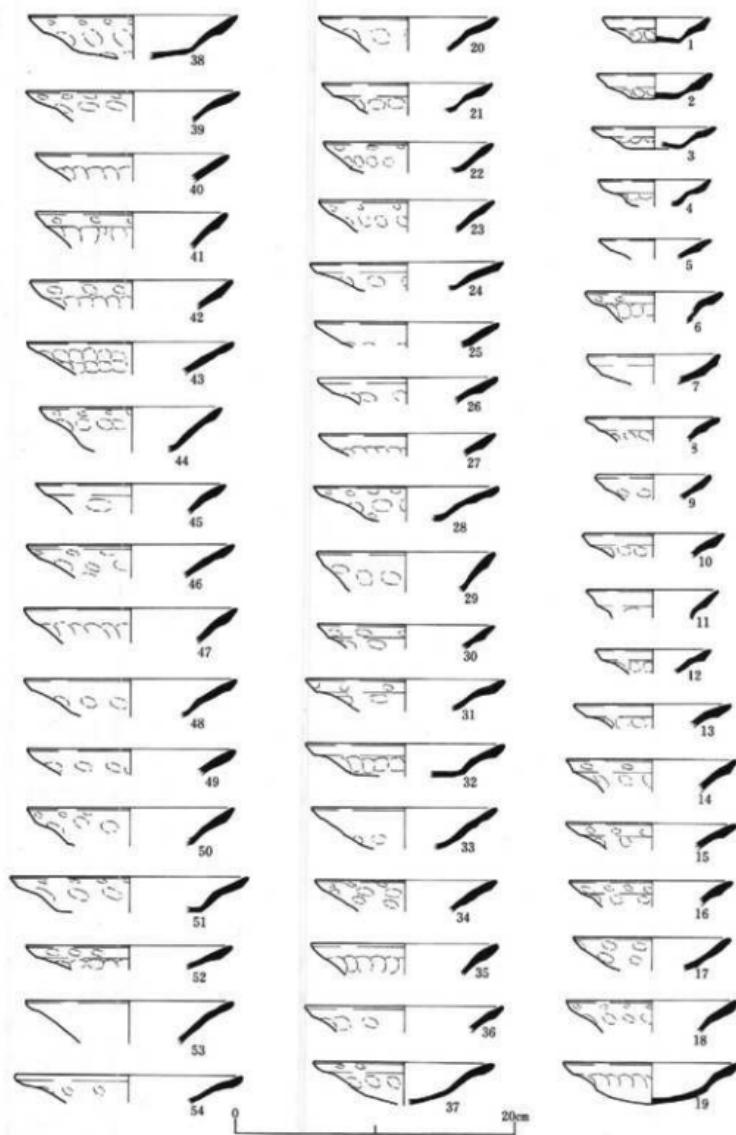
土器は弥生時代～中世に至るものがある。弥生時代～布留式の土器は下層の砂層より出土した。古墳時代～中世の土器は遺構及び上層の遺物包含層より出土した。土器の説明は遺構と各地区的包含層に分けて説明を記す。中世の土師器皿は10cm以下を小皿、10~12cm前後を中皿、12cm以上を大皿として扱う。

遺構出土の土器

壺（第7～9図）

中世の土師器、瓦器、須恵器、輸入磁器、陶磁器が出土した。

土師器 皿（1~72）、高台付皿（73）、羽釜（108）の器種がある。1~54は口縁部が大きくラッパ状に伸びる皿である。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が外側へ肥厚するものが多い。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。1~12は小皿、13~23は中皿、24~54は大皿である。55~62・66・67は丸底に近い平底の底部より口縁部が内側ないしは直立気味に伸びる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整かナデ調整、見込みはナデ調整する。55~59は大皿、60~62は中皿、66~68は小皿である。64・65は口縁部が強く外反する小皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調



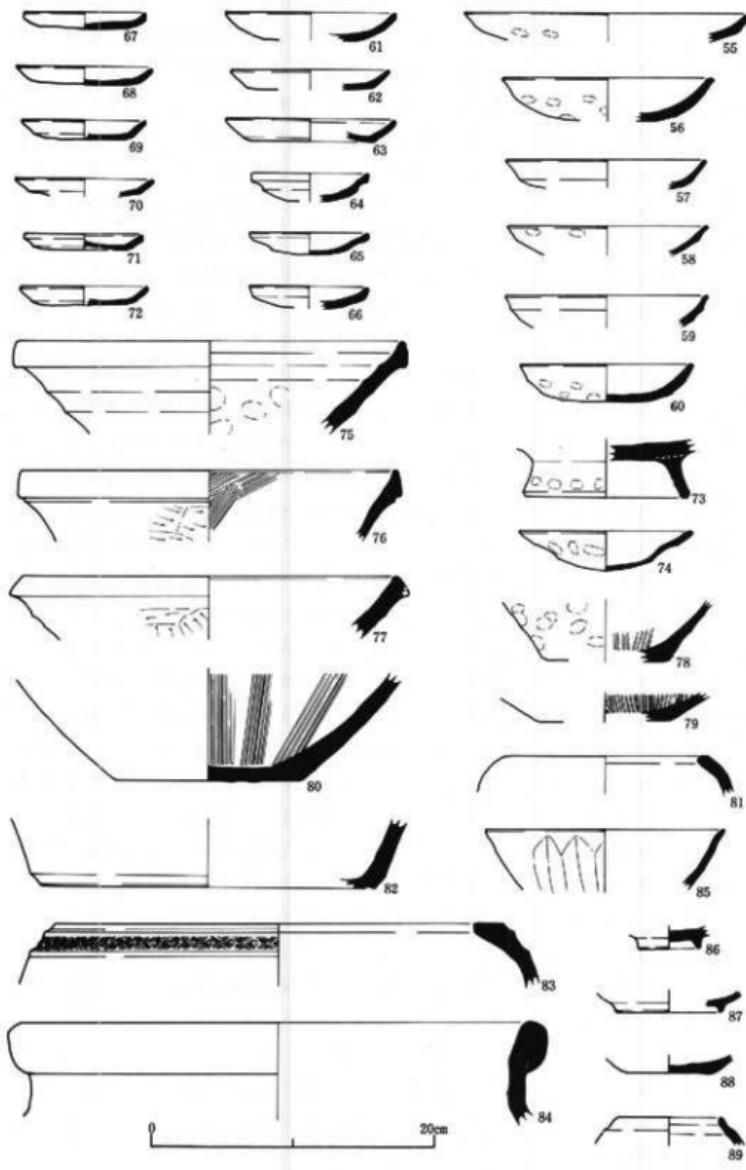
第7図 墓出土土器実測図

整する。63・69～72は口縁部と体部の境に段を有する皿である。口縁部は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。63は大皿、69～72は小皿である。73は高台付皿である。口縁部は欠損する。高台は高く、八字形に伸びる。外面は横ナデ調整する。108は口縁部がく字形に外反する羽釜である。口縁端部は内側へ肥厚する。外面は横ナデ調整する。

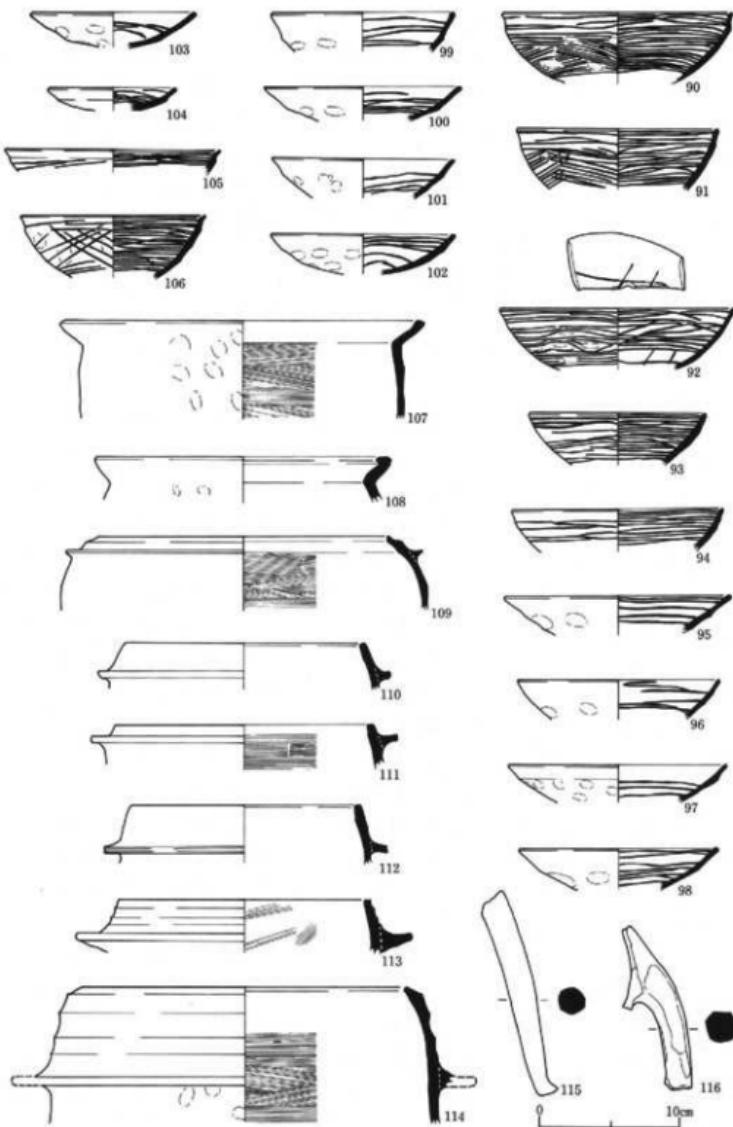
瓦器 皿 (74・104)、擂鉢 (76～89)、火舎 (81・83)、深鉢 (82)、壺 (89)、椀 (90～103・105・106)、鍋 (107)、羽釜 (109～116) の器種がある。74は丸底に近い平底の底部より口縁部が大きく外上方へ伸びる皿である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整する。見込みの調整法は不明。口縁部がラッパ状に伸びる土師器の皿と同形態、同調整である。外面に赤色塗料を施す。内面に黒色の物質と緑青が多量に付着する。104は口縁部がゆるく外反する皿である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整、体部内面はナデ調整の後、粗いヘラミガキ調整する。76～79は擂鉢である。76・77は体部が大きく逆八字形に伸び、口縁端部が幅広の面をもつ。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はヘラケズリ調整する。体部内面は76がハケメ調整の後ナデ調整、77は不明である。78・79は底部であり、内面におろし目を施す。おろし目は78が4本、79が15本以上を数える。78は体部外面を指オサエ調整する。81は口縁部が大きく内弯し、口縁端部が丸く終る火舎である。外面は横ナデ調整する。83は口縁部が大きく内弯し、口縁端部が上方に幅広の面をもつ火舎である。口縁部に2条の凸帯を貼り付け、その間に菱形のスタンプ文様を施す。外面は横ナデ調整する。82は深鉢の底部であり、平底を呈する。外面は横ナデ調整する。89は張りのある体部より口縁部がわざかに外反する壺である。口縁端部は丸く終る。外面は横ナデ調整する。90～103は口縁端部が丸く終る椀である。90～94は器高が高く、体部外面をヘラミガキ調整する。90・91は外面のヘラミガキ調整を分割で施す。92は見込みに並行線の暗文が残る。95～103は器高が低く、皿状を呈する。体部外面のヘラミガキ調整は消滅し、指オサエ調整で終る。内面はナデ調整の後、渦巻状の暗文を施す。105・106は口縁端部の内側に沈線を施す椀である。体部外面は指オサエ調整の後、やや粗いヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。107は張りの少ない体部より口縁部がく字形に外反する鍋である。口縁端部は面をもつ。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面はハケメ調整する。109～112は口縁部が内弯気味に立ち上がる羽釜である。鍔は短い。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整する。110・111と横ナデ調整する110・112がある。113・114は口縁部が内弯気味に立ち上がり、外面に段を有する羽釜である。鍔は長い。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面はハケメ調整する。115・116は羽釜の脚部であり、端部がわざかにL字形を呈する。

須恵器 捶鉢 (75) と鉢 (88) の器種がある。75は体部が大きく逆八字形に伸び、口縁端部が幅広の面をもつ撊鉢である。外面は回転ナデ調整する。88は鉢の底部であり、平底を呈する。底面は糸切り底である。

輸入磁器 青磁椀 (85) と白磁椀 (86)・皿 (87) の器種がある。85は体部が外上方へ伸び、



第8図 墳出土土器実測図



第9図 墓出土土器実測図

口縁部がゆるく外反する青磁碗である。口縁端部は丸く終る。体部外面に蓮弁文を施す。内外面はロクロナデ調整する。全面に施釉し、色調は緑灰色を呈する。86は白磁碗の底部である。やや低い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。全面に施釉し、色調は淡青白色を呈する。87は白磁碗の底部である。内窓気味の高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。全面に施釉し、色調は白色を呈する。

陶磁器 撥鉢（80）と壺（84）の器種がある。80は備前焼の撥鉢である。平底の底部より体部が外上方へ伸びる。内面に6本のおろし目を施す。内外面はロクロナデ調整する。色調は赤紫色を呈する。84は窓が不明の壺である。頸部が上方へ立ち上がり、口縁端部が玉縁状を呈する。外面に自然釉が残る。内外面はロクロナデ調整する。色調は淡茶灰色を呈する。

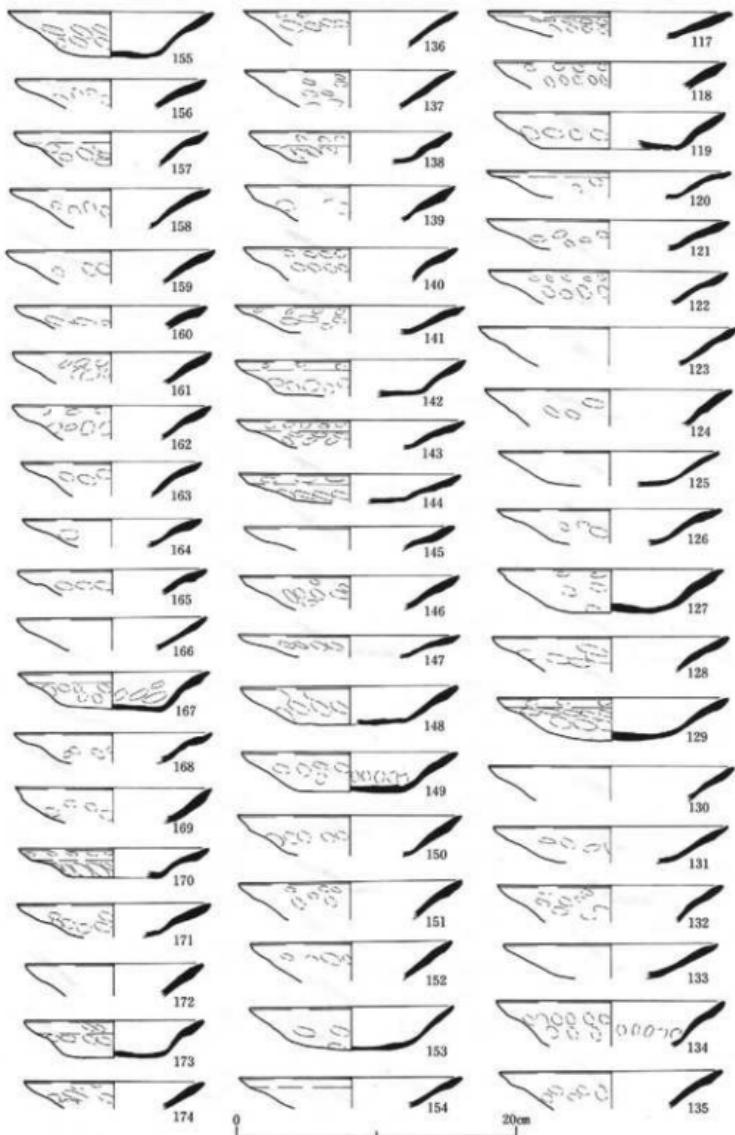
落ち込み1（第10～13図）

古墳時代～中世の土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器が出土した。古墳時代の土器は混入と考えられる。

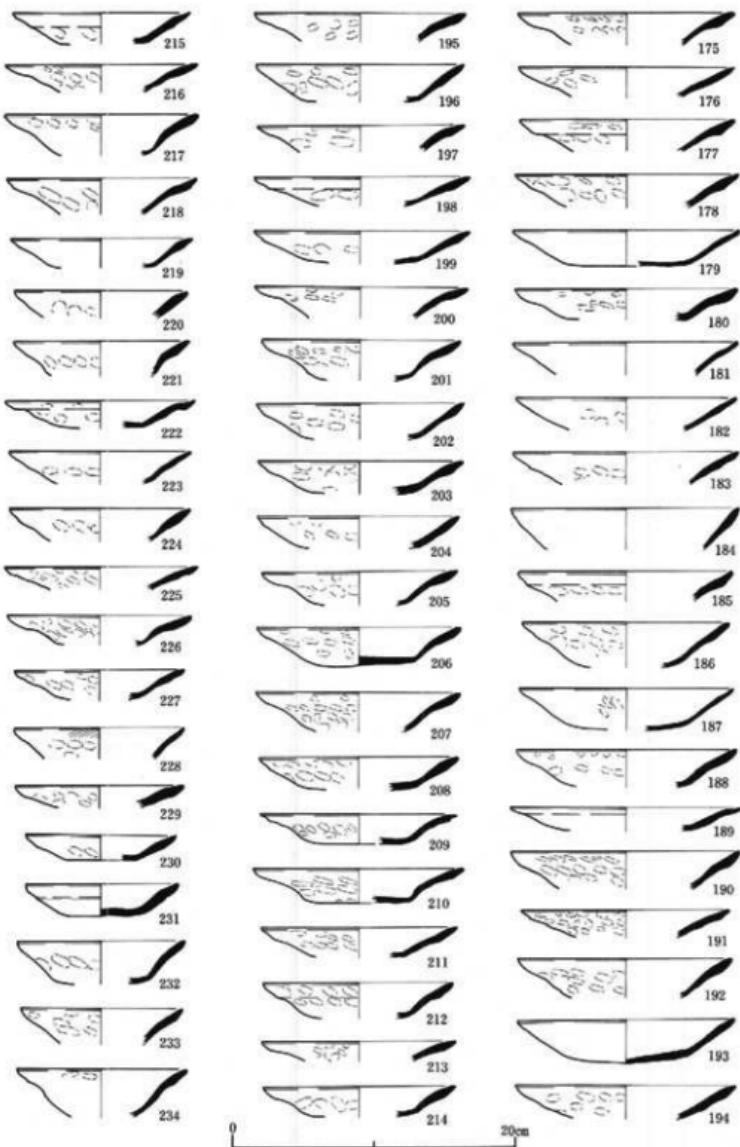
土師器 盆（117～298・329～335）、燭台（299）、羽釜（300・301）の器種がある。117～298は口縁部が大きくラッパ状に伸びる皿である。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が外側へ肥厚するものが多い。底部は丸底に近い平底が多いが、一部上げ底を呈するものもある。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整するものが多い。153は見込みをハケメ調整する。117～227は大皿、228～245は中皿、246～298は小皿である。329～335は丸底に近い平底の底部より口縁部が内窓ないしは直立気味に伸びる皿である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整かナデ調整する。見込みはナデ調整する。299は燭台の柱状部である。外面に凸帯がめぐる。柱状部内面は中空である。外面はナデ調整する。300・301は口縁部が強く外反する羽釜である。口縁端部は丸く終る。鉢は300が水平に、301が外上方に伸びる。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整する。

須恵器 古墳時代の甕（302・303）と中世の捏鉢（304・305）・底部（306）の器種がある。302・303は口縁部が大きく外上方へ伸びる甕である。口縁端部は面をもつ。外面には1条の凸帯を施す。口縁部外面は回転ナデ調整する。304は体部が大きく逆八字形に伸びる捏鉢である。口縁端部はやや狭いが面をもつ。体部外面は回転ナデ調整する。305は捏鉢の底部であり、平底を呈する。底面は糸切り底である。体部外面は回転ナデ調整する。306は平底の底部である。外面はナデ調整する。

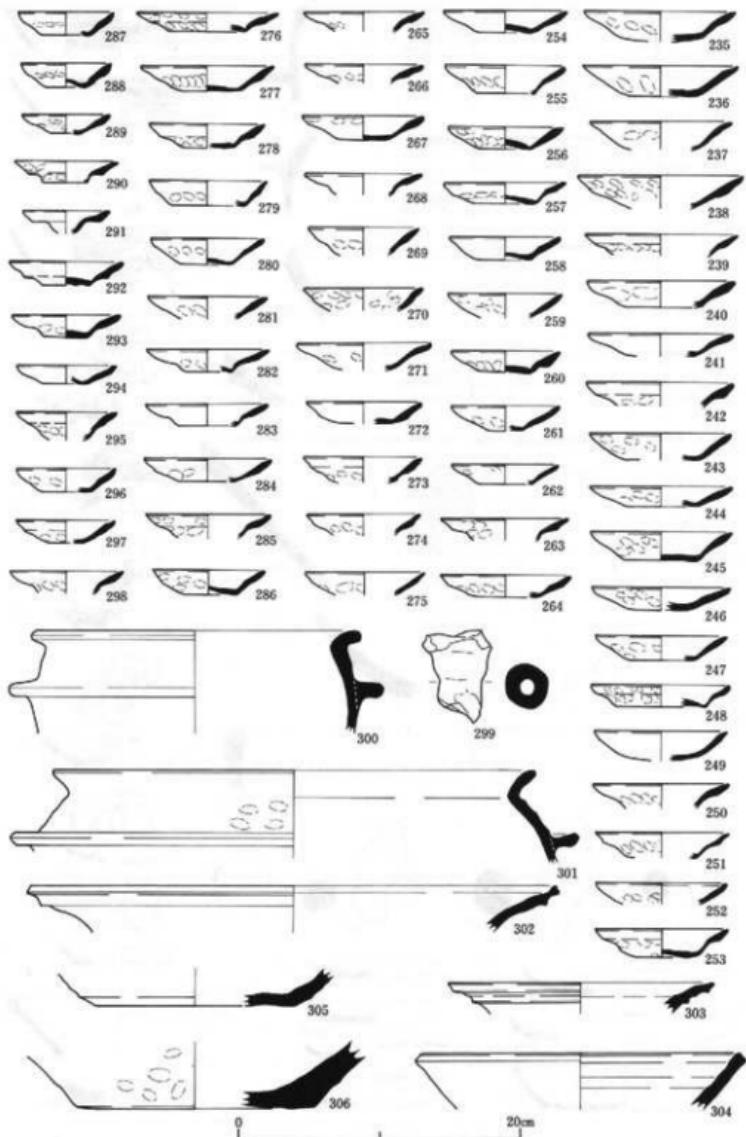
瓦器 梗（307～314）、盆（315）、羽釜（316・317、324～326）、撥鉢（318～321）、深鉢（322）、壺（323）の器種がある。307～309は口縁端部が丸く終る梗である。器高に高く、体部内外面は密なヘラミガキ調整する。309は見込みに並行線の暗文を施す。310～314は梗の底部であり、高台を貼り付ける。見込みに暗文を施す。310・311は斜格子、312は不整形、313は並行線、314は連結輪状の暗文である。315は体部と口縁部の境に段を有する皿である。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が丸く終る。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整、見込みはナデ調整の後、並行線の暗文を施す。316・317は張りの少ない体部より口縁部が内窓気



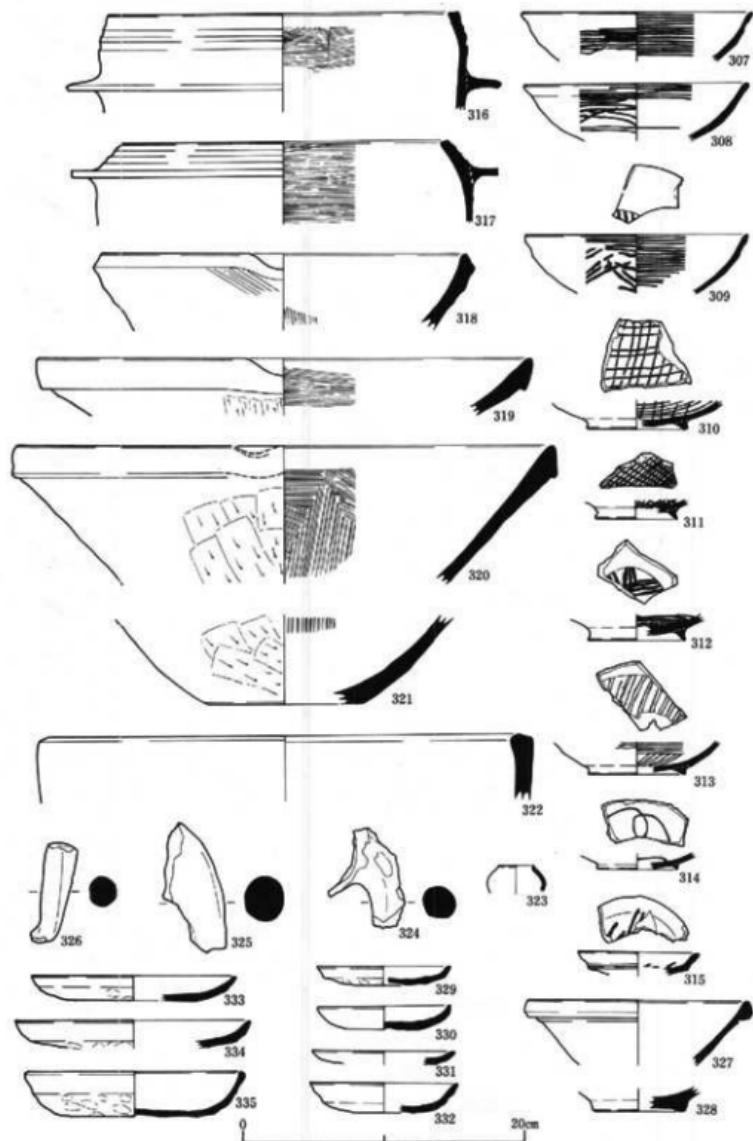
第10図 落ち込み1出土土器実測図



第11図 落ち込み1出土土器実測図



第12図 落ち込み1出土土器実測図



第13図 落ち込み1出土土器実測図

味に立ち上がる羽釜である。口縁端部は面をもつ。口縁部外面に数条の段を有する。鉢は水平方向に長く伸びる。316は口縁部内外面を横ナテ調整、体部外面をナテ調整、内面をハケメ調整する。317は口縁部外面を横ナテ調整、内面をハケメ調整する。体部外面はナテ調整、内面はハケメ調整する。324～326は羽釜の脚部である。端部がゆるいL字形を呈する。外面はナテ調整する。319は体部が大きく逆八字形に伸びる擂鉢である。口縁端部は面をもち、片口部が残る。体部内面におろし目が15本残る。口縁部外面はハケメ調整の後、横ナテ調整、内面は横ナテ調整する。体部外面はヘラケズリ調整、内面はナテ調整する。319・320は318と同形態であるが、口縁端部の拡張幅が広い。口縁端部に片口部が残る。口縁部外面は横ナテ調整、体部外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整する。320は体部内面に18本のおろし目が残る。321は擂鉢の底部である。平底を呈する。体部内面に18本のおろし目が残る。体部外面はヘラケズリ調整、内面は使用による磨り減りが著しく調整法は不明。322は体部が上方へ伸びる深鉢である。口縁端部はやや丸く終る。内外面は横ナテ調整する。323は球形を呈する体部より口縁部がゆるく外反する壺である。口縁端部は丸く終る。内外面は横ナテ調整する。

輸入磁器 白磁椀 (327・328) がある。327は体部が逆八字形に伸びる。口縁端部は幅広に拡張し、玉縁状を呈する。内外面はロクロナテ調整する。内外面は施釉し、色調が乳白色を呈する。328は底部であり、低い高台を削り出す。内外面はロクロナテ調整する。内面は施釉し、色調が淡黄白色を呈する。

落ち込み2 (第14図)

中世の瓦器と土師器が出土した。

瓦器 椭 (336～339) がある。336～339は口縁端部が丸く終る椀である。器高は低く、断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。体部外面のヘラミガキ調整は消滅し、指オサエ調整で終る。体部内面はナテ調整の後、粗いヘラミガキ調整する。口縁部外面は横ナテ調整する。339は見込みにジグザグ状の暗文を施す。

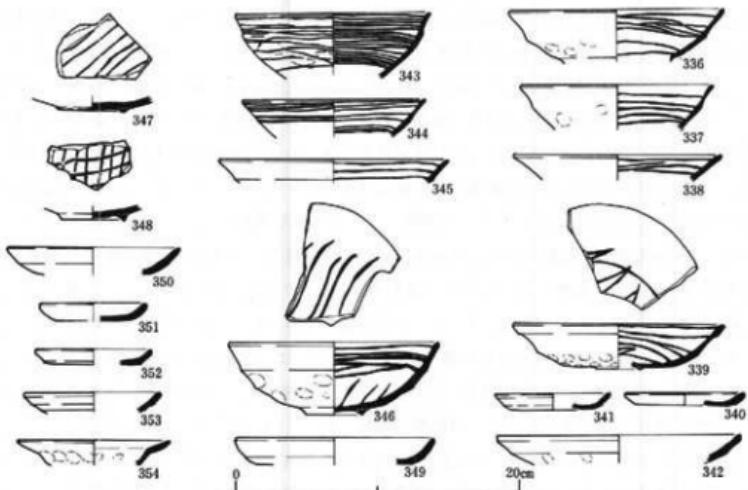
土師器 盆 (340～342) がある。340～342は口縁部が内窓気味に立ち上がる皿である。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面と見込みはナテ調整する。340・341は小皿、342は大皿である。

落ち込み3 (第14図)

中世の瓦器と土師器が出土した。

瓦器 椭 (343～348) がある。343～346は口縁端部が丸く終る椀である。343・344は器高が高い。外面は指オサエ調整の後、やや粗いヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。345・346は器高がやや低く、断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。体部外面のヘラミガキ調整は消滅し、指オサエ調整で終る。内面はナテ調整の後、粗いヘラミガキ調整する。346は見込みに並行線の暗文を施す。347・348は椀の底部である。見込みに347は並行線、348は斜格子の暗文を施す。

土師器 盆 (349～354) がある。349～351は口縁部が内窓気味に立ち上がる皿である。口縁



第14図 落ち込み2・3出土土器実測図

部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。349は大皿、350は中皿、351は小皿である。352・353は体部と口縁部の境に段を有する小皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。354は口縁部が大きくラッパ状に伸びる小皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。

溝2（第15図）

奈良時代以降の土器と須恵器が出土した。奈良時代の土器は混入と考えられる。

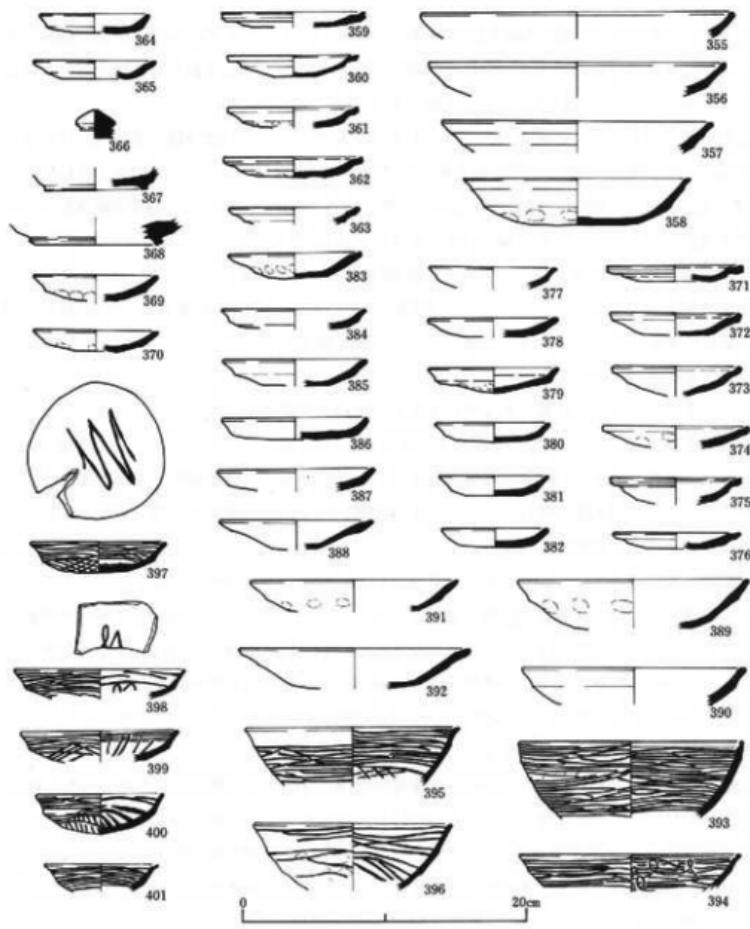
土師器 皿（355～365）がある。355・356は奈良時代の皿である。口縁部が内窓気味に立ち上がり、口縁端部が内側へやや肥厚する。内外面は横ナデ調整する。357・358は口縁部が2段で外反する大皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。359～363は口縁部が強く外反した後、内窓する小皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。364・365は口縁部が内窓気味に立ち上がる小皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。

須恵器 奈良時代の蓋（366）と杯（367・368）の器種がある。366は蓋のつまみ部であり、宝珠状を呈する。内外面は回転ナデ調整する。367・368は杯の底部であり、断面形が方形を呈する高台がつく。内外面は回転ナデ調整する。

溝1（第15図）

中世の土師器が出土した。

土師器 皿（369・370）がある。369・370は口縁部が内窓気味に立ち上がる小皿である。口



第15図 溝1・2・3出土土器実測図

縁部内外面は横ナテ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナテ調整する。

溝3（第15図）

中世の土師器と瓦器が出土した。

土師器 盆（371～392）がある。371～376は口縁部が強く外反した後、内寄する小皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面はナテ調整か指オサエ調整、見込みはナテ調整する。377～387・389～391は口縁部が内寄気味に立ち上がる皿である。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面はナテ調整か指オサエ調整、見込みはナテ

調整する。377～385は小皿、386・387は中皿、389～391は大皿である。388・392は口縁部が大きくラッパ状に伸びる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。388は中皿、392は大皿である。

瓦器 梱 (393～396) と皿 (397～401) の器種がある。393・394は口縁端部の内面に沈線を施す椀である。器高は高く、内外面を密なヘラミガキ調整する。394は体部内面に連結輪状の暗文を施す。395・396は口縁端部が丸く終る椀である。器高は高い。395は内外面を密なヘラミガキ調整する。見込みに並行線の暗文を施す。396は内外面をやや粗いヘラミガキ調整する。397～400は口縁端部が丸く終る皿である。底部は丸底に近い平底である。内外面は密なヘラミガキ調整する。見込みに397・398はシグザグ状、399は並行線の暗文を施す。401は口縁端部内面に沈線を施す皿である。内外面は密なヘラミガキ調整する。

土壙2 (第16図)

布留式土器と中世の土師器、瓦器が出土した。布留式土器は混入と考えられる。

布留式土器 鉢 (413) と甕 (414) の器種がある。413は張りの少ない体部より、口縁部が2段で外反する鉢である。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。414は口縁部が内窩気味に立ち上がる甕である。口縁端部は内側へ肥厚し、面をもつ。内外面は横ナデ調整する。

土師器 皿 (402～411) と鉢 (412) の器種がある。402・403は口縁部が強く外反した後、内窩する小皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。404～411は口縁部が内窩気味に立ち上がる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。404～410は小皿、411は大皿である。412は張りの少ない体部より、口縁部がゆるく外反する鉢である。口縁端部は面をもつ。内外面は横ナデ調整する。

瓦器 梱 (415～418) がある。415は口縁端部の内側に沈線を施す椀である。器高はやや低い。内外面は密なヘラミガキ調整する。416・417は口縁端部が丸く終る椀である。器高は高い。内外面は密なヘラミガキ調整する。418は椀の底部である。断面形が逆台形を呈する高い高台を貼り付ける。内外面は密なヘラミガキ調整する。見込みに並行線の暗文を施す。

土壙4 (第16図)

奈良時代以降の瓦器、輸入磁器、土師器、須恵器が出土した。奈良時代の土器は混入と考えられる。

瓦器 梱 (419) がある。419は口縁端部の内側に沈線を施す椀である。器高はやや低い。外面は指オサエ調整の後、粗いヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。

輸入磁器 白磁皿 (420) がある。皿の底部である。断面形が逆三角形を呈する低い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。外面は施釉、底部裏面は無施釉。色調は淡白灰色を呈する。

土師器 皿 (421～423) がある。421～423は口縁部が内窩気味に立ち上がる小皿である。口

縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。

須恵器 奈良時代の壺（424）がある。424は壺の底部である。断面形が方形を呈する高い高台を削り出す。内外面は回転ナデ調整する。

土塙6（第16図）

中世の土師器が出土した。皿（425・426）がある。425は口縁部が強く外反した後、内湾する小皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。内外面は横ナデ調整する。426は口縁部が大きくラッパ状に伸びる大皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。

土塙7（第16図）

中世の土師器が出土した。皿（427～430）がある。427～430は口縁部が大きくラッパ状に伸びる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。427～429は小皿、430は大皿である。

土塙5（第16図）

中世の瓦器と土師器が出土した。

瓦器 梱（431～433）と甕（436）の器種がある。431・432は口縁端部が丸く終る楕である。器高はやや低い。431は断面形が逆台形を呈する低い高台を貼り付ける。体部外面のヘラミガキ調整は消滅する。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面はやや粗いヘラミガキ調整する。431は見込みに並行線の暗文を施す。433は口縁端部の内側に沈線を施す楕である。器高は高い。外面は粗いヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。436は張りの強い体部より口縁部が大きく外反する甕である。口縁端部は上方へやや拡張し、面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はタタキ目調整、内面はナデ調整する。

土師器 皿（434・435）がある。434は口縁部が内湾気味に立ち上がる大皿である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。435は口縁部が外反した後、内湾する小皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。

ピット4（第16図）

中世の土師器が出土した。羽釜（437）がある。437は口縁部が強く外反する羽釜である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。内外面は横ナデ調整する。

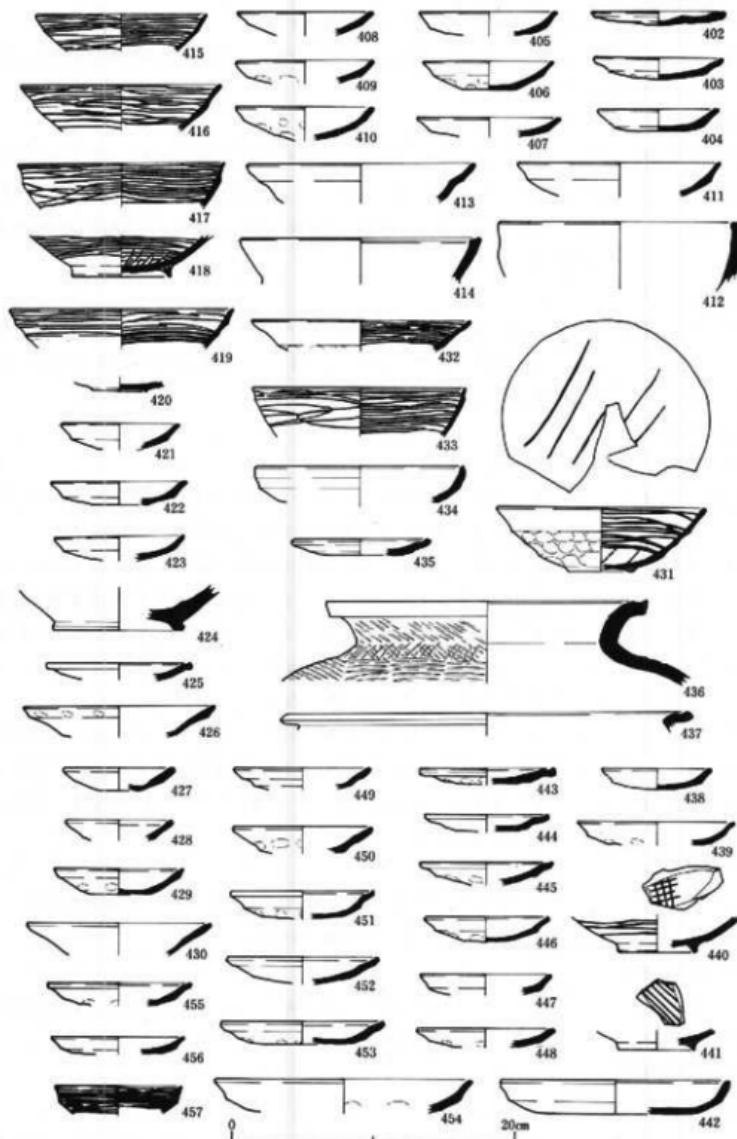
ピット11（第16図）

中世の土師器が出土した。438・439は口縁部が内湾気味に立ち上がる皿である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。438は小皿、439は中皿である。

ピット8（第16図）

中世の瓦器と土師器が出土した。

瓦器 楠（440・441）がある。440・441は楕の底部である。440は断面形が逆台形を呈する高い高台を貼り付ける。内外面はヘラミガキ調整する。見込みに斜格子の暗文を施す。441は断



第16図 土塙2・4・5・6・7、ピット5・8・11・14出土土器実測図

面形が逆三角形を呈するやや低い高台を貼り付ける。見込みに並行線の暗文を施す。

土師器 盆（442～453）がある。442・447～449は口縁部が内窓気味に立ち上がる盆である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。442は大盆、447～449は小盆である。443～446・451～453は口縁部が外反した後、内窓する盆である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。443～446は小盆、451～453は中盆である。450は口縁部が大きくラッパ状に伸びる小盆である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。

ピット5（第16図）

中世の土師器と瓦器が出土した。

土師器 盆（454～456）がある。454・456は口縁部が内窓気味に立ち上がる盆である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。454は大盆、456は小盆である。455は口縁部が外反した後、内窓する小盆である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。

瓦器 盆（457）がある。457は口縁部がゆるく外反する盆である。口縁端部は丸く終る。外面は密なヘラミガキ調整する。

包含層出土の土器

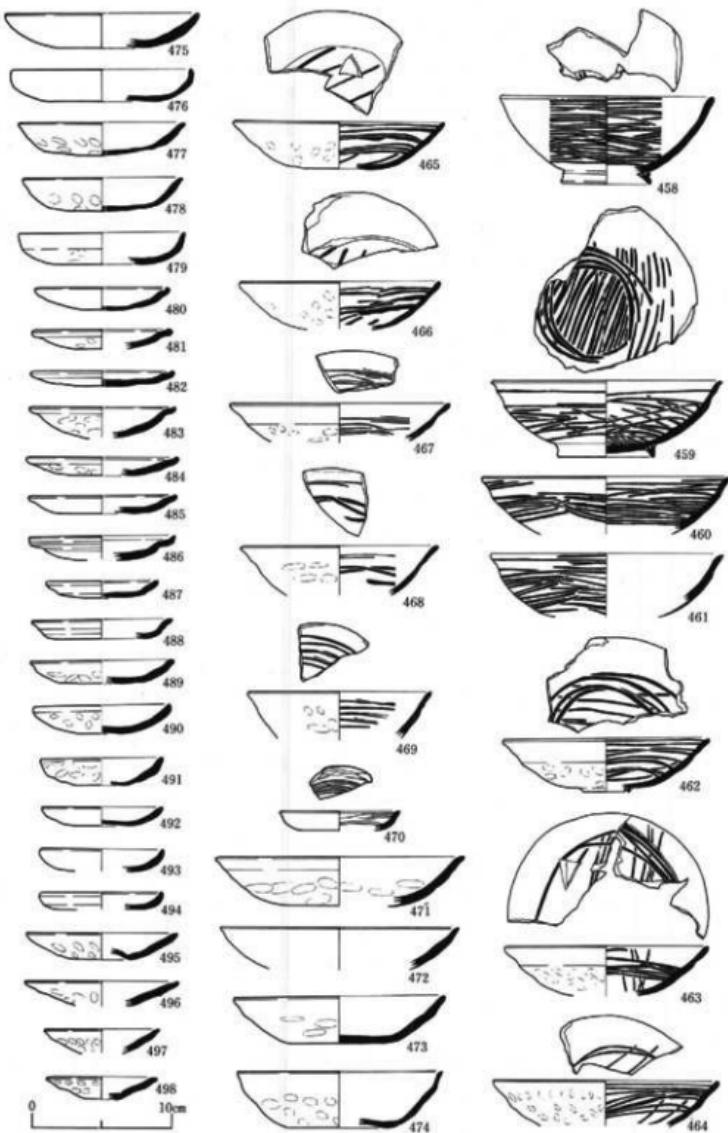
A地区（第17・18図）

弥生時代～中世の土器が出土した。弥生土器、庄内式土器、瓦器、土師器、須恵器、陶磁器、輸入磁器が出土した。

弥生土器 底部（501）がある。501は平底を呈する底部である。風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。

庄内式土器 瓢（499・500）がある。499・500は口縁部がく字形に外反する瓢である。口縁端部は上方へやや拡張する。外面は横ナデ調整する。499は生駒西麓産。500は非河内産。

瓦器 槌（458～469）と盆（470）の器種がある。458～461は口縁端部が丸く終る槌である。器高は高い。底部に断面形が逆三角形を呈する高い高台を貼り付ける。外面は密なヘラミガキ調整する。458・459は見込みに並行線の暗文を施す。462～466は口縁端部が丸く終る槌である。器高はやや低い。底部に断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。外面のヘラミガキ調整は消滅する。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整する。内面は粗いヘラミガキ調整する。見込みに並行線の暗文を施す。467～469は口縁端部が丸く終る槌である。器高はやや低い。外面のヘラミガキ調整と見込みの暗文は消滅する。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。470は口縁部がゆるく外反する盆である。口縁端部は丸く終る。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。

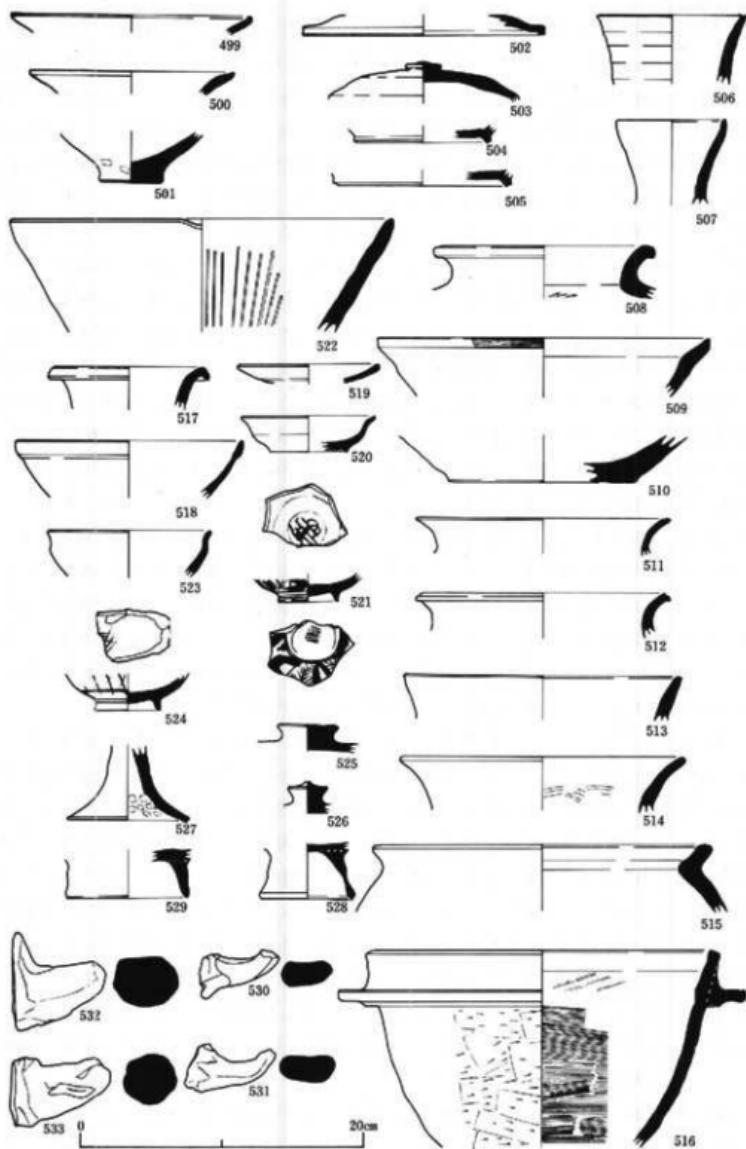


第17图 A地区包含层出土土器实测图

土師器 古墳時代の高杯 (527)、奈良時代の甕 (511~513)・羽釜 (514)・蓋 (525・526)・把手 (530~533)、中世の皿 (471~498)・羽釜 (515・516)・高台付皿 (528・529) の器種がある。527は高杯の脚部である。据部がゆるやかに伸び、端部がやや面をもつ。内外面はナデ調整する。511~513は口縁部がゆるく外反する甕である。511・513は口縁端部が尖り気味に終る。512は口縁端部が面をもち、中央が回む。内外面は横ナデ調整する。514は口縁部が大きく外反する羽釜である。口縁端部は丸く終る。内外面は横ナデ調整する。525・526は蓋のつまみ部である。つまみ部は円形を呈する。525は中央が凹状、526は凸状を呈する。内外面はナデ調整する。530~533は甕などの把手部である。J字形を呈し、530・531は板状、532・533は棒状を呈する。外面はナデ調整する。471~498は皿である。471~479・489~494は口縁部が内弯気味に立ち上がる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。471~476は大皿、477~479は中皿、489~494は小皿である。480~486は口縁部が外反した後、内弯する皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。480・481は小皿、482~486は中皿である。487・488は口縁部と体部の境に段を有する小皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。495~498は口縁部が大きくラッパ状に伸びる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。515は張りのある体部より、口縁部が強く外反する羽釜である。口縁端部はやや丸く終る。内外面は横ナデ調整する。516は張りのない体部より、口縁部が上方へ伸びる羽釜である。口縁端部は面をもつ。鉢は水平方向に伸び、端部が面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整する。528・529は高台付皿の脚部である。高い高台を貼り付ける。端部は丸く終る。内外面は横ナデ調整する。

須恵器 古墳時代の提瓶 (507)・甕 (508)、奈良時代の蓋 (502・503)・杯 (504・505)・壺 (506)、中世の鉢 (509)・捏鉢 (510) の器種がある。507は口頭部が外反した後、内弯する提瓶である。口縁端部は丸く終る。内外面は回転ナデ調整する。508は口縁部が強く外反する甕である。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は横ナデ調整する。体部内面にタタキの当具痕が残る。502は口縁部がゆるく外反する蓋である。口縁端部は面をもつ。内外面は回転ナデ調整する。503は蓋のつまみ部である。つまみ部は円形であり、中央は凸状を呈する。天井部内面はナデ調整、他は回転ナデ調整する。504・505は杯の底部である。断面形が方形を呈する高台を削り出す。内外面は回転ナデ調整する。506は口頭部がゆるく外反する壺である。口縁端部は尖り気味に終る。内外面は回転ナデ調整する。509は口縁部がゆるく外反する鉢である。口縁端部は上方へやや拡張する。内外面は横ナデ調整する。510は捏鉢の底部である。平底を呈する。風化が著しく調整法は不明。

陶磁器 撥鉢 (522)、皿 (519・520)、碗 (523・524) の器種がある。522は体部が大きく外上方へ伸びる撥鉢である。口縁端部は丸く終り、片口部が残る。内面にヘラによるおろし目を施し、9本が残る。内外面はロクロナデ調整する。色調は橙赤色を呈する。丹波焼。519は体



第18図 A地区包含層出土土器実測図

部がゆるく外上方へ伸びる皿である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナデ調整する。内外面に施釉し、色調が黄褐色を呈する。窯は不明。520は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する皿である。口縁端部は丸く終る。底部は断面形が逆台形を呈する低い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。底部裏面以外は施釉し、色調が黄緑色を呈する。美濃焼。523は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する天目茶碗である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉し、色調が暗茶褐色を呈する。瀬戸・美濃焼。524は碗の底部である。断面が逆台形を呈する高い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。内外面に淡青色で絵を描き、施釉する。色調は淡青白色を呈する。伊万里焼。

輸入磁器 白磁壺 (517)・椀 (518)と青花の椀 (521)がある。517は口頭部が外上方へ伸びた後、下方へ折れ曲る壺である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナデ調整する。内外面に施釉し、色調が白灰色を呈する。518は体部が逆八字形に伸びる椀である。口縁端部はやや玉縁状を呈する。内外面はロクロナデ調整する。内外面に施釉し、色調が暗白灰色を呈する。521は椀の底部である。断面形が逆台形を呈する高い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。内外面に藍色で絵を描き、施釉する。色調は淡青白色を呈する。

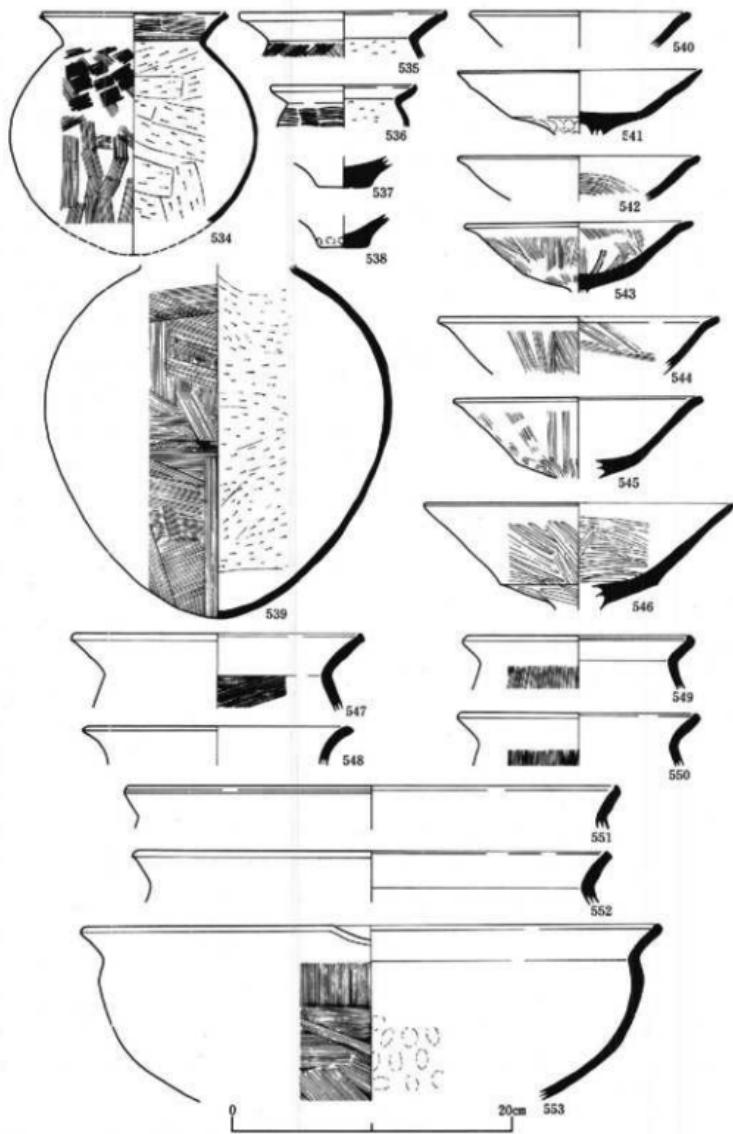
B 地区（第20～22図）

弥生時代～中世の土器が出土した。弥生土器、庄内式土器、土師器、須恵器、黒色土器、陶磁器、輸入磁器、瓦器がある。

弥生土器 底部 (537・538)がある。537・538は平底を呈する。内外面は風化が著しく調整法は不明。537は生駒西麓産。538是非河内産。

庄内式土器 豆 (534～536)がある。534～536は球形の体部より口縁部がく字形に外反する甕である。口縁端部は上方へつまみ上げ気味に肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整するが534は内面をさらにハケメ調整する。体部外面はタタキ目調整の後、ハケメ調整する。内面はヘラケズリ調整する。生駒西麓産。

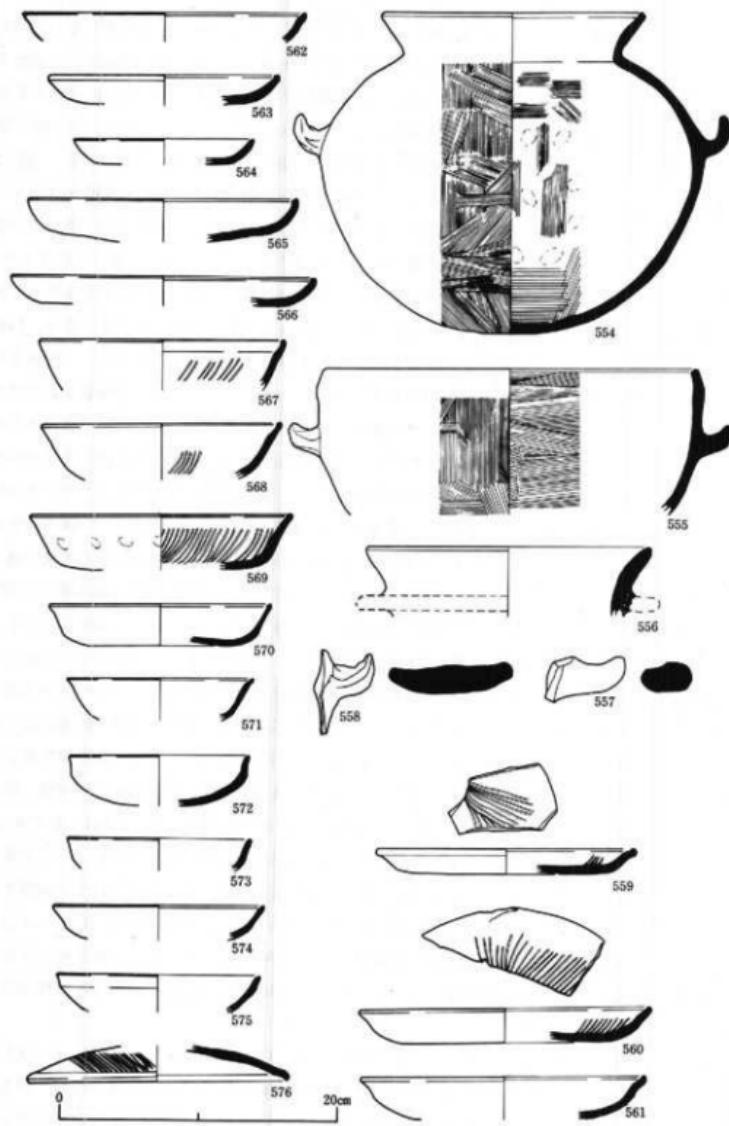
土師器 古墳時代の甕 (539)・高杯 (540～546)、奈良時代の甕 (547～552)・鍋 (553)・把手付甕 (554)・把手付鍋 (555)・羽釜 (556)・把手 (557・558)・皿 (559～566)・杯 (567～575)・蓋 (576)、中世の高台付皿 (613・614)・皿 (630～664)・羽釜 (665)の器種がある。539は体部が卵形を呈する甕である。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整する。540～546は高杯の杯部である。540・541・546は口縁部が外上方へ伸びる。542～545は口縁部がゆるく外反する。541・546は体部の下部に稜をもつ。540・541は口縁部内外面を横ナデ調整、体部内外面をナデ調整する。542は口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面をナデ調整、内面をハケメ調整する。543・544は口縁部内外面を横ナデ調整、体部内外面をハケメ調整する。545は口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面をハケメ調整の後、ヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。546は口縁部内外面を横ナデ調整、体部内外面をヘラミガキ調整する。547・549～552は張りの少ない体部より口縁部が外折する甕である。口縁端部は上方へつまみ上げ気味に肥厚する。547



第19圖 B 地區包含層出土土器實測圖

は口縁部内外面を横ナデ調整、体部内面をハケメ調整する。体部外面は煤が付着しており調整法は不明。549～552は口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。548は口縁部がゆるく外反する甕である。口縁端部は下方へ面をもつ。内外面は横ナデ調整する。553は体部が浅い鍋である。口縁部は外折し、口縁端部は上方へつまみ上げ気味に肥厚する。口縁端部に片口部が残る。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。554は球形を呈する体部より、口縁部が外折する甕である。口縁端部は上方へつまみ上げ気味に肥厚する。体部の中位に2個1対の把手を施す。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はハケメ調整、内面はハケメ調整の後、ナデ調整する。555は張りの少ない体部より、口縁部が内弯する鍋である。口縁端部は丸く終る。体部の中位に2個1対の把手を施す。口縁部外面は横ナデ調整、他はハケメ調整する。556は口縁部が大きく外反する羽釜である。口縁端部は丸く終る。甕は欠損する。内外面は横ナデ調整する。557・558は把手である。板状を呈する。外面はナデ調整する。559～563は口縁部がゆるく外反する皿である。口縁端部は内側へ肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。559・560は体部内面に放射状の暗文を施す。564～566は口縁部が内弯する皿である。562・563は口縁端部がやや内側へ肥厚する。564は丸く終る。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。567～571は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が内側へ肥厚する杯である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。567～569は体部内面に放射状の暗文を施す。572～575は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸く終る杯である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。576は口縁部がやや内弯する蓋である。口縁端部は面をもつ。口縁部内外面と天井部内面は横ナデ調整、外面はヘラミガキ調整する。613・614は高台付皿の底部である。八字形の高い高台を貼り付ける。内外面は横ナデ調整する。630～636・659～664は口縁部が大きくラッパ状に伸びる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。630～636は大皿、659～663は小皿、664は中皿である。637・649～655は口縁部が内弯気味に立ち上がる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。637は大皿、649～655は小皿である。638～648は口縁部が外反した後、内弯する皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。638～645・647・648は小皿、646は中皿である。656～658は口縁部と体部の境に段を有する小皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面と見込みはナデ調整する。665は口縁部がく字形に外反する羽釜である。口縁端部はやや面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整する。

須恵器 古墳時代の杯（577～580）・蓋（590）・高杯（595）、奈良時代の杯（581～585）・蓋（586～589）・椀（591）・鉢（592・593）・甕（594）・臺（596・597）・底部（611）、中世の椀（612）・捏鉢（625）の器種がある。577はやや深い体部より受部が外上方へ伸びる杯である。口縁部は内傾し、口縁端部が面をもつ。内外面は回転ナデ調整する。578～580は浅い体部より



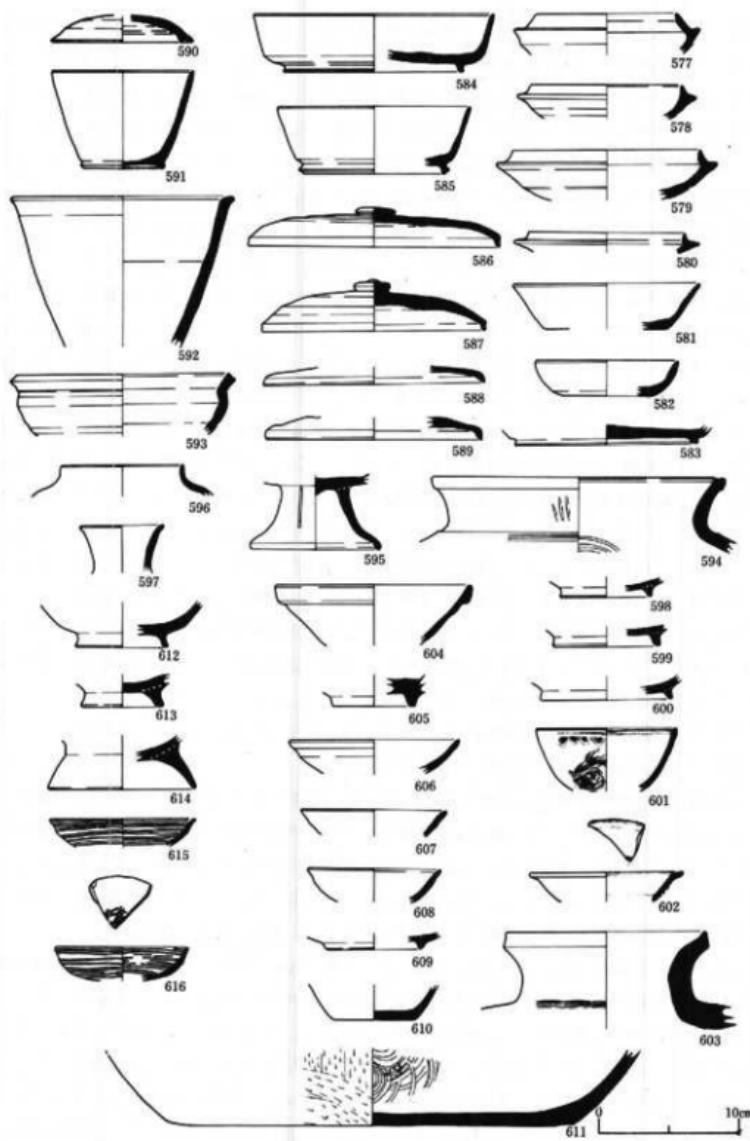
第20图 B地区包含层出土土器实测图

受部が水平方向に伸びる杯である。口縁部は短く外反し、口縁端部が尖り気味に終る。内外面は回転ナテ調整する。590は口縁部がゆるく外反し、内面にわずかにかえりの残る蓋である。内外面は回転ナテ調整する。595は短脚一段透の高杯である。脚部に細い直線状の透を入れる。内外面は回転ナテ調整する。581・582は平底の底部より口縁部が大きく外上方へ伸びる杯である。口縁端部は丸く終る。内外面は回転ナテ調整する。583～585は高台のある杯である。断面形が方形を呈する高台を削り出す。口縁部は大きく外上方へ伸び、口縁端部は丸く終る。内外面は回転ナテ調整する。586～589は器高の低い蓋である。口縁端部は下方へつまみ上げ気味に拡張する。天井部中央に円形のつまみがつく。586・588・589は内外面を回転ナテ調整する。587は天井部外面の約 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラケズリ調整、内面をナテ調整、他を回転ナテ調整する。591は体部が長く外上方へ伸び、口縁部に至る椀である。口縁端部は丸く終る。底部は断面形が方形を呈する高台を削り出す。内外面は回転ナテ調整する。592は体部が長く外上方へ伸び、口縁部が短く外反する鉢である。口縁端部は丸く終る。内外面は回転ナテ調整する。593は張りの少ない体部より口縁部が強く外反する鉢である。口縁端部は面をもつ。内外面は回転ナテ調整する。594は強く張る体部より口縁部が大きく外反する。口縁端部は丸く終り、内側に沈線を施す。口縁部外面にヘラ記号が残る。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面はカキ目調整する。内面にタタキ目調整の当具痕が残る。596は張りの大きい体部より口縁部が短く外反する壺である。口縁端部は丸く終る。内外面は回転ナテ調整する。597は口頭部がゆるく外上方へ伸びる壺である。口縁端部は丸く終る。内外面は回転ナテ調整する。611は平底の底部である。外面はヘラケズリ調整する。内面にタタキ目調整の当具痕が残る。612は山茶椀の底部である。高い高台を施す。内外面は回転ナテ調整する。625は体部が大きく逆八字形に伸びる捏鉢である。口縁端部は面をもつ。内外面は回転ナテ調整する。

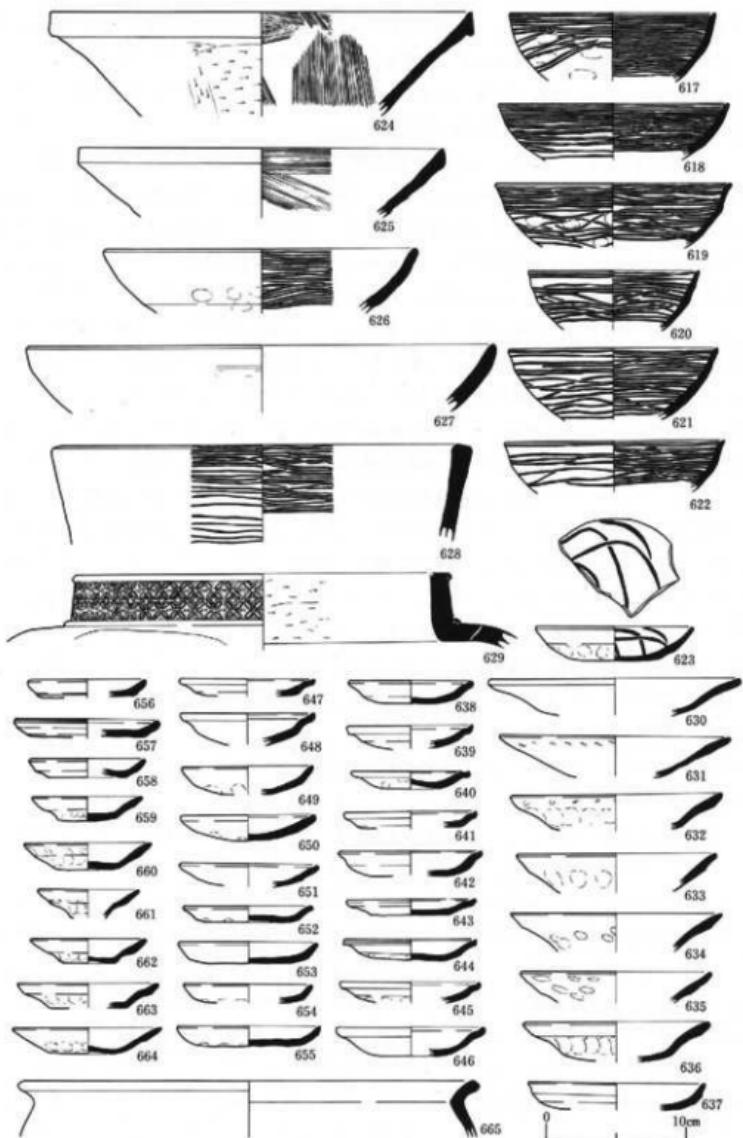
黒色土器 椭（598～600）がある。598～600は高い高台を貼り付けた椭の底部である。すべて内黒である。外面は横ナテ調整、内面はナテ調整する。

陶磁器 椭（602）と甕（603）の器種がある。602は体部が内舟気味に立ち上がり、口縁部に至る椭である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナテ調整する。淡青色で内面に1条の直線と外面に絵を描き、施釉する。淡青白色を呈する。伊万里焼。603は張りの強い体部より、口縁部が大きく外反する甕である。口縁端部は上方へ拡張し、面をもつ。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面はタタキ目調整、内面はナテ調整する。色調は淡紫灰色を呈する。

輸入磁器 青磁皿（602）と白磁椭（604・605）・皿（606～610）の器種がある。602は口縁部が外反する皿である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナテ調整する。内面に淡青色で3条の直線を施し、施釉する。色調は淡青灰色を呈する。604は体部が大きく外上方へ伸びる椭である。口縁端部は外側へ肥厚し、玉縁状を呈する。内外面はロクロナテ調整する。内外面に施釉し、色調が白灰色を呈する。605は椭の底部である。断面形が逆台形を呈する高い高台を削り出す。内外面はロクロナテ調整する。外面は無施釉、内面は施釉する。色調は白灰色を呈する。606～608は口縁部がゆるく外反する皿である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロ



第21図 B地区包含層出土土器実測図



第22図 B地区包含層出土土器実測図

ナデ調整する。内外面は施釉し、色調は606・608が淡青白色、609が白灰色を呈する。609は皿の底部である。低い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉し、色調が白灰色を呈する。610は皿の底部であり、平底を呈する。内外面はロクロナデ調整する。底部裏面は無施釉、他は施釉する。色調は白灰色を呈する。

瓦器 皿 (615・616)、椀 (617~623)、擂鉢 (624)、鉢 (626・627)、深鉢 (628)、風炉[†] (629) の器種がある。615は口縁部がゆるく外反し、口縁端部の内面に沈線を施す皿である。内外面はやや密なヘラミガキ調整する。616は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸く終る皿である。内外面はやや密なヘラミガキ調整する。見込みに斜格子の暗文を施す。617・618は口縁端部の内面に沈線を施す椀である。器高は高い。外面はやや粗い、内面は密なヘラミガキ調整する。619~622は口縁端部が丸く終る椀である。器高は高い。外面はやや粗い、内面は密なヘラミガキ調整する。623は口縁端部が丸く終る椀である。器高は低く、浅い皿状を呈する。高台と見込みの暗文は消滅する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面はナデ調整の後、粗いヘラミガキ調整する。624は体部が大きく逆八字形に伸びる擂鉢である。口縁端部は上下へ拡張し、幅広の面をもつ。体部内面に30本以上のおろし目を施す。口縁部外面は横ナデ調整、内面はハケメ調整する。体部外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。626・627は口縁部が内湾気味に立ち上がる鉢である。口縁端部は丸く終る。626は外面を横ナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。627は内外面を横ナデ調整する。628は体部が外上方へ伸びる深鉢である。口縁端部は面をもつ。内外面はヘラミガキ調整する。629は張りの強い体部より口縁部が内傾する風炉である。口縁端部は面をもつ。体部に透を施す。口縁端部、体部と口縁部の境に凸帯を貼り付け、その間に花状のスタンプ文様を施す。外面は風化が著しく調整法は不明、内面は口縁部をヘラケズリ調整の後、横ナデ調整、体部を横ナデ調整する。

C 地区（第23・24図）

布留式～中世の土器が出土した。布留式土器、瓦器、輸入磁器、陶磁器、須恵器、土師器がある。

布留式土器 器台 (693) がある。693は脚部が八字形に伸びる器台である。裾端部は丸く終る。脚部の中位に小円孔を穿つ。裾端部内外面は横ナデ調整、他はナデ調整する。

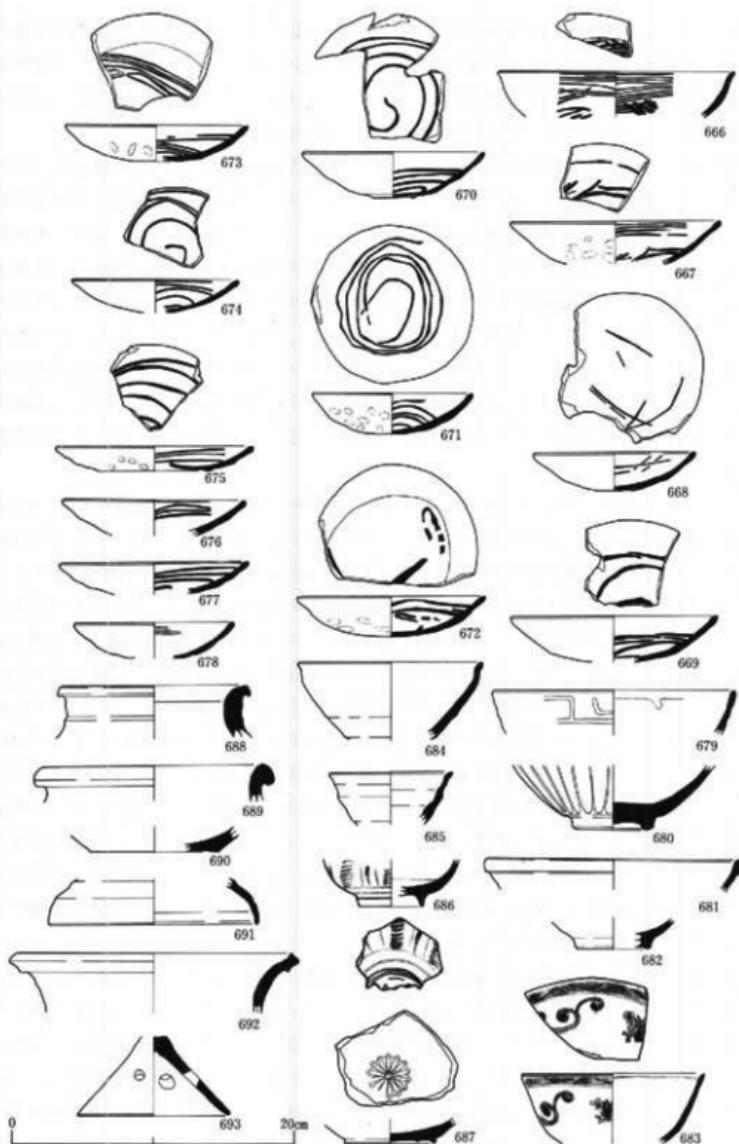
瓦器 楠 (666~678)、羽釜 (729~732)、甕 (723)、鉢 (734)、火舟 (738) の器種がある。666は口縁端部が丸く終る椀である。器高はやや低い。内外面はやや密なヘラミガキ調整し、見込みに斜格子の暗文を施す。667・668は口縁端部が丸く終る椀である。器高は低く、皿状を呈する。底部の高台は消滅する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。見込みに並行線の暗文を施す。669~678は口縁端部が丸く終る椀である。器高は低く、皿状を呈する。670は底部に低い高台を貼り付けるが他は消滅する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。729~732は張りの少ない体部より口縁部が内湾気味に立ち上がる羽釜である。口縁端部はやや面をもつ。鉢は水平及び外上方へ短く伸びる。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整、

内面はハケメ調整する。730は風化が著しく調整法は不明。723は口縁部が大きく外反する妻である。口縁端部は面をもつ。口縁端部の内面が凹む。風化が著しく調整法は不明。734は体部が外上方へ伸びる鉢である。口縁端部がやや面をもつ。風化が著しく調整法は不明。738は口縁部が内弯する火舎である。口縁端部は面をもつ。内外面は横ナデ調整する。

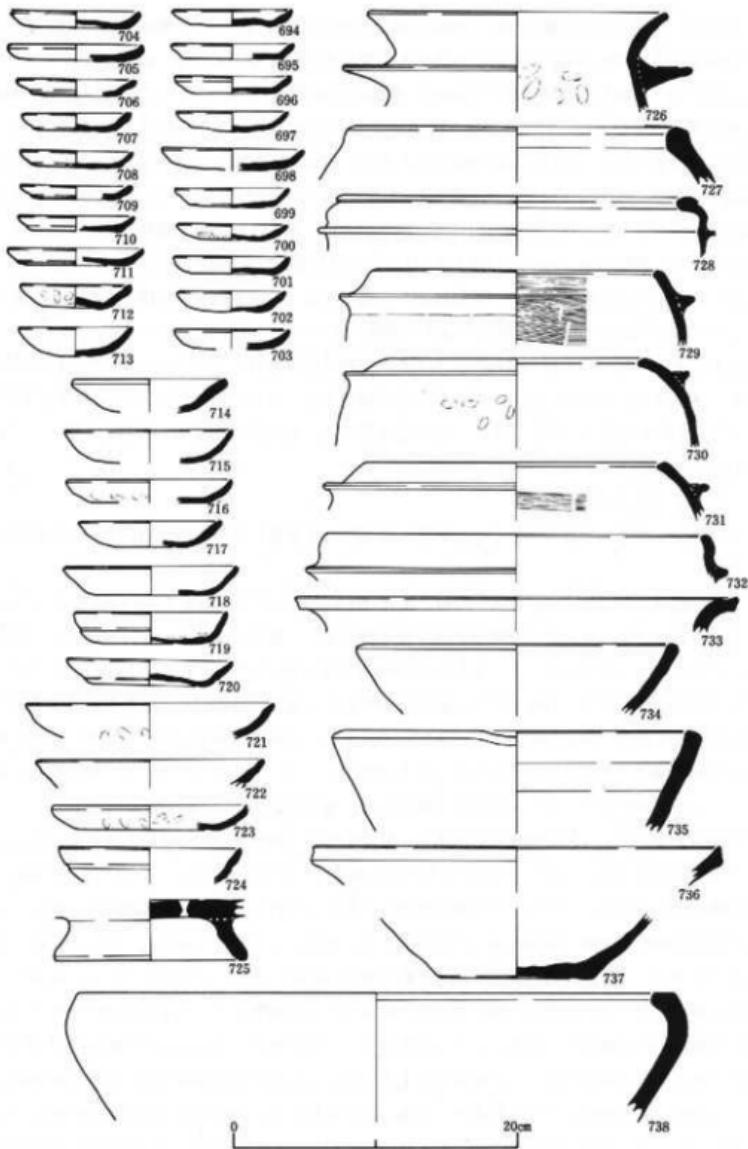
輸入磁器 青磁椀 (679・680)、白磁椀 (681・682)、青花の椀 (683) の器種がある。679は体部が内弯気味に立ち上がる椀である。口縁端部は丸く終る。外面に雷文を施す。内外面はロクロナデ調整する。内外面に施釉し、色調が緑青色を呈する。680は椀の底部である。断面形が方形を呈する高台を削り出す。外面に蓮弁文を施す。内外面はロクロナデ調整する。底部裏面以外は施釉し、色調が黄緑色を呈する。681は口縁端部が外側へ肥厚し、玉縁状を呈する椀である。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉し、色調が灰白色を呈する。682は椀の底部である。わずかに凹む高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。底部裏面以外は施釉し、色調が灰白色を呈する。683は体部が外上方へ伸び、口縁部に至る椀である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナデ調整する。内外面に蓝色で絵を描き、施釉する。色調は淡青白色を呈する。

陶磁器 楠 (684~686)、皿 (687)、甕 (688)、壺 (689)、底部 (690) の器種がある。684は体部が外上方へ伸び、口縁部が短く外反する天目茶椀である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナデ調整する。底部より約 $\frac{1}{3}$ の外面は無施釉、他は施釉する。色調は黒褐色を呈する。瀬戸・美濃焼。685は体部が外上方へ伸び、口縁部がわずかに外反する椀である。口縁端部は丸く終る。内外面の凹凸が著しい。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉し、色調が淡灰白色を呈する。窯は不明。686は椀の底部である。断面形が逆三角形を呈する高い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。外面に青色で絵を描き、施釉する。色調は淡青白色を呈する。伊万里焼。687は皿の底部である。低い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。見込みにヘラ描きによる菊花状の文様を施す。内外面は施釉し、色調が淡緑色を呈する。688は頸部が上方へ伸び、口縁部が短く外反する甕である。口縁端部はやや面をもつ。内外面は横ナデ調整する。色調は灰橙色を呈する。窯は不明。689は口縁端部が下方へ肥厚する壺である。内外面は横ナデ調整する。全面に自然釉が付着し、色調が淡灰緑色を呈する。窯は不明。690は平底を呈する底部である。内外面はロクロナデ調整する。外面は無施釉、内面は施釉する。色調は緑褐色を呈する。窯は不明。

須恵器 古墳時代の蓋 (691)・甕 (692) と中世の捏鉢 (735~737) の器種がある。691は口縁部が内弯する蓋である。口縁端部は丸く終る。内外面は回転ナデ調整する。692は口頸部が大きく外上方へ伸びる妻である。口縁端部の外側は段を有する。内面はややつまみ上げ気味に終る。内外面は横ナデ調整する。735・736は体部が大きく逆八字形に伸びる捏鉢である。735は口縁端部がやや面をもち、片口部が残る。内外面は回転ナデ調整する。736は口縁端部を上方へやや拡張する。内外面は回転ナデ調整する。737は捏鉢の底部である。わずかに凹む平底である。底面は糸切り底である。内外面は回転ナデ調整する。



第23图 C地区包含层出土土器实物图



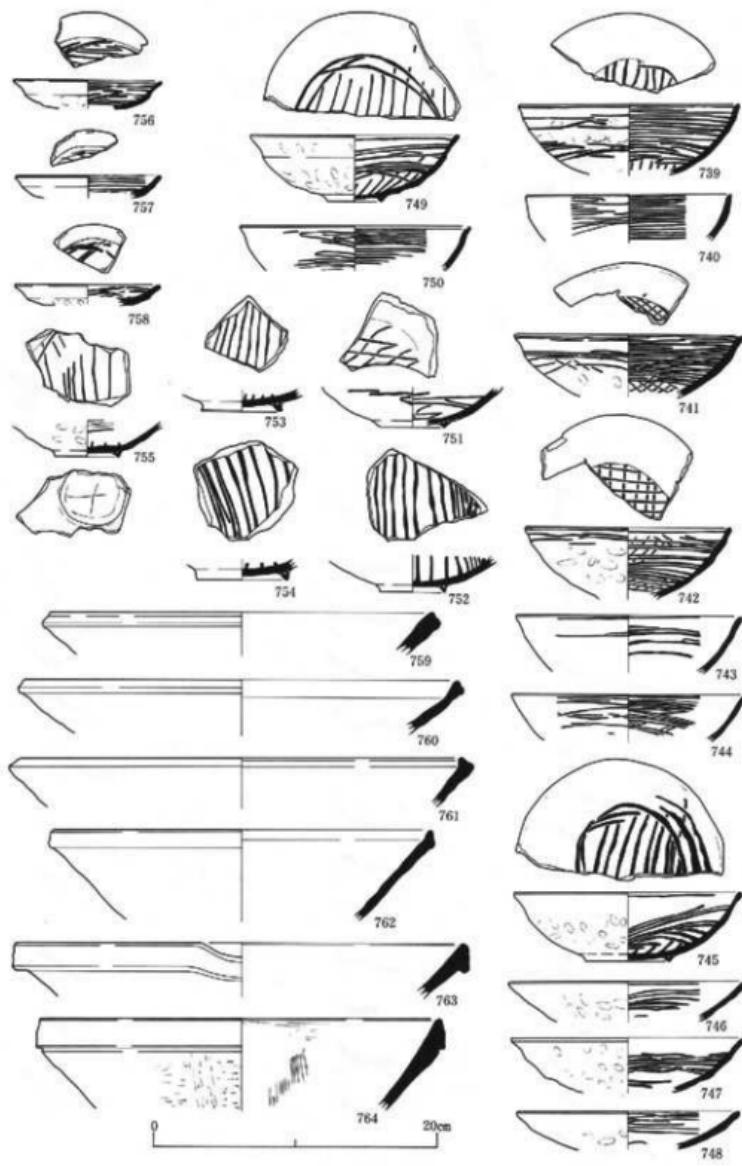
第24図 C地区包含層出土土器実測図

土師器 奈良時代の羽釜（726）と中世の羽釜（727・728）・皿（694～724）・高台付皿（725）の器種がある。726は口縁部が長く外反する羽釜である。口縁端部は丸く終る。鈔は外上方へ長く伸びる。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。727は口縁端部が外側へ肥厚する羽釜である。内外面は横ナデ調整する。728は張りの少ない体部より口縁部が強く内弯する羽釜である。口縁端部は外側へ折り返す。鈔は短く水平方向に伸びる。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。694～705・715～718・721～723は口縁部が内弯気味に立ち上がる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。694～705は小皿、715～718は中皿、721～723は大皿である。706～711・719・720・724は口縁部と体部の境に段がつく皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。706～711は小皿、719・720は中皿、724は大皿である。712～714は口縁部が大きくラッパ状に伸びる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。712・713は小皿、714は中皿である。725は高台付皿の底部である。高い高台を貼り付ける。見込みに焼成後的小円孔を穿つ。内外面は横ナデ調整する。

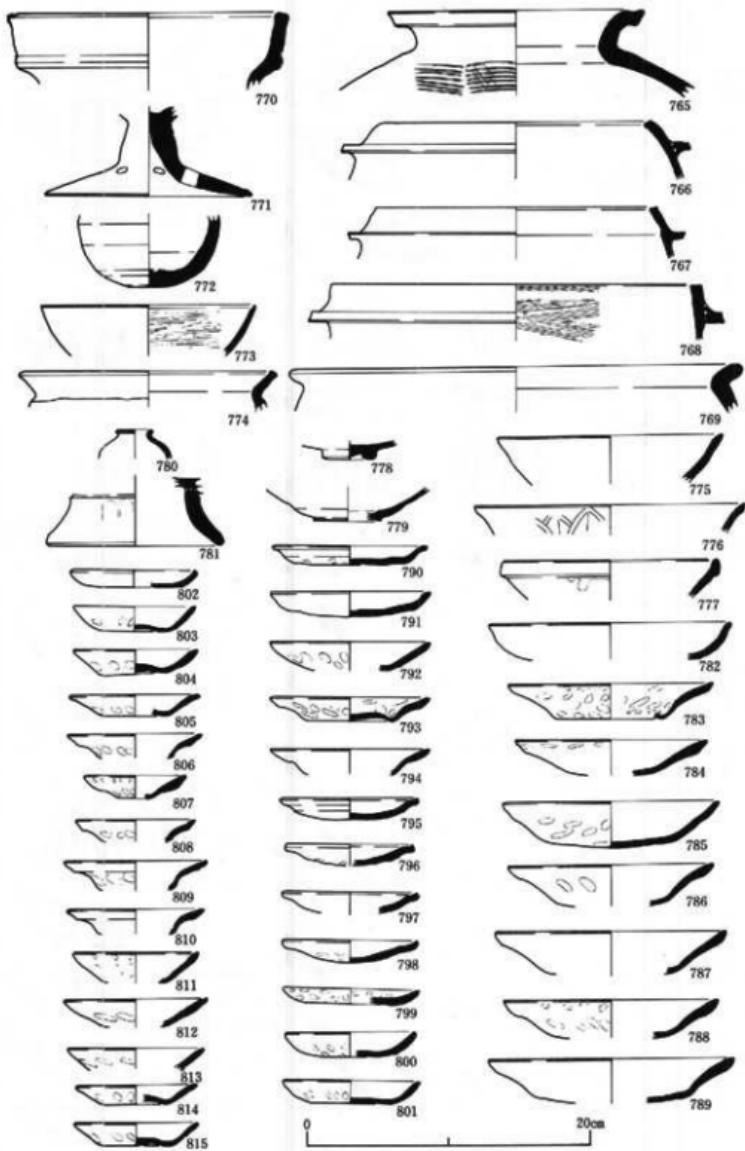
C-1 地区（第25・26図）

古墳時代～中世の土器が出土した。瓦器、須恵器、土師器、黒色土器、陶磁器、輸入磁器がある。

瓦器 檜（739～755）、皿（756～758）、擂鉢（764）、甕（765）、羽釜（766～768）、壺（780）の器種がある。739～744は口縁端部が丸く終る椀である。器高はやや高い。外面は粗い、内面はやや密なヘラミガキ調整する。見込みに739は並行線、741・742は斜格子の暗文を施す。745～749は口縁端部が丸く終る椀である。器高はやや低い。底部に断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。外面のヘラミガキ調整は消滅する。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面はやや粗いヘラミガキ調整する。745・749は見込みに並行線の暗文を施す。750は口縁端部の内側に沈線を施す椀である。器高はやや高い。外面はやや密なヘラミガキ調整する。751～755は椀の底部である。断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。見込みに751は斜格子、752～755は並行線の暗文を施す。755は底部裏面にX状の記号を刻む。焼成後のものである。756～758は口縁部がゆるく外反する皿である。口縁端部は丸く終る。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整する。内面はヘラミガキ調整し、見込みに並行線の暗文を施す。764は体部が大きく逆八字形に伸びる擂鉢である。口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面をもつ。口縁部外面は横ナデ調整、内面はハケメ調整する。体部外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。内面におろし目を施し、12本が残る。765は張りのある体部より口縁部が強く外反する甕である。口縁端部は上方へつまみ上げ気味に拡張する。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はタタキ目調整、内面はナデ調整する。766～768は口縁部が内弯気味に立ち上がる羽釜である。口縁端部は面をもつ。鈔は短く水平方向に伸びる。766・767は内外面を横ナデ調整する。768は外面を横ナデ調整、内面をハケメ調整する。780は球形の体部より口



第25图 C-1地区包含层出土土器实测图



第26図 C-1地区包含層出土土器実測図

縁部が強く外反する壺である。口縁端部は丸く終る。内外面は横ナデ調整する。

須恵器 古墳時代の壺(772)と中世の捏鉢(759~763)・鉢(779)の器種がある。772は壺の底部であり、球形を呈する。外面は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデ調整する。759~763は体部が大きく逆八字形に伸びる捏鉢である。口縁端部は面をもつ。761・762は上方へ、763は上下へ口縁端部を拡張する。外面は回転ナデ調整する。763は口縁端部に片口部が残る。779は鉢の底部である。わずかに凹む平底であり、糸切り底である。内外面は回転ナデ調整する。

土師器 古墳時代の壺(770)・高杯(771)と中世の羽釜(769)・甕(774)・高台付皿(781)・皿(783~815)の器種がある。770は口縁部が外反した後、上方へ伸びる壺である。口縁端部はやや面をもつ。外面は横ナデ調整する。771は高杯の脚部である。柱状部が八字形に伸び、裾部が大きく広がる。裾端部は丸く終る。裾部に円孔を穿つ。外面は横ナデ調整する。769は口縁部がく字形に外反する羽釜である。口縁端部は丸く終る。外面は横ナデ調整する。774は張りの少ない体部より口縁部が強く外反する甕である。口縁部と体部の境に稜がつく。口縁端部は面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。781は高台付皿の脚部である。八字形の高い高台を貼り付ける。外面は横ナデ調整する。782・790・791・799~802は口縁部が内窓気味に立ち上がる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。782は大皿、790・791は中皿、799~802は小皿である。783~789・792~794・803~815は口縁部が大きくラッパ状に伸びる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。783~789は大皿、792~794は中皿、803~815は小皿である。795~798は口縁部が外反した後、内窓する小皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整か指オサエ調整、見込みはナデ調整する。

黒色土器 梗(773)がある。773は体部が内窓気味に立ち上がる梗である。口縁端部の内側に沈線を施す。内黒である。外面は横ナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。

陶磁器 梗(775)がある。775は体部が外上方へ伸びる梗である。口縁端部は尖り気味に終る。外面はロクロナデ調整する。外面は施釉し、色調が黄褐色を呈する。窯は不明。

輸入磁器 青磁梗(776)と白磁梗(777)・皿(778)の器種がある。776は口縁部が外上方へ伸びる梗である。口縁端部は尖り気味に終る。外面に蓮弁文を施す。外面はロクロナデ調整する。外面は施釉し、色調が緑褐色を呈する。777は体部が逆八字形に伸びる梗である。口縁端部は上下へ拡張し、玉縁状を呈する。外面はロクロナデ調整する。外面は施釉し、色調が灰白色を呈する。778は皿の底部である。断面形が方形を呈する低い高台を削り出す。外面はロクロナデ調整する。底部裏面以外は施釉し、色調が淡黄白色を呈する。

D 地区（第27図）

弥生時代~中世の土器が出土した。弥生土器、庄内式土器、布留式土器、須恵器、輸入磁器、土師器、瓦器がある。

弥生土器 甕(816~819)と底部(820・821)がある。816は張りのある体部より口縁部が

外反する甕である。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面はタタキ目調整、内面はナテ調整する。生駒西麓産。817は口縁部が大きく外反する甕である。口縁端部は面をもつ。風化が著しく調整法は不明。非河内産。818は張りの少ない体部より口縁部がゆるく外反する甕である。口縁端部は面をもつ。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面はハケメ調整の後ナテ調整、内面はヘラケズリ調整する。生駒西麓産。819は張りの強い体部より口縁部がゆるく外反する甕である。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面はナテ調整、内面はハケメ調整する。生駒西麓産。820・821は底部であり、平底を呈する。820は外面をタタキ目調整する。内面は風化が著しく調整法は不明。非河内産。821は風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。

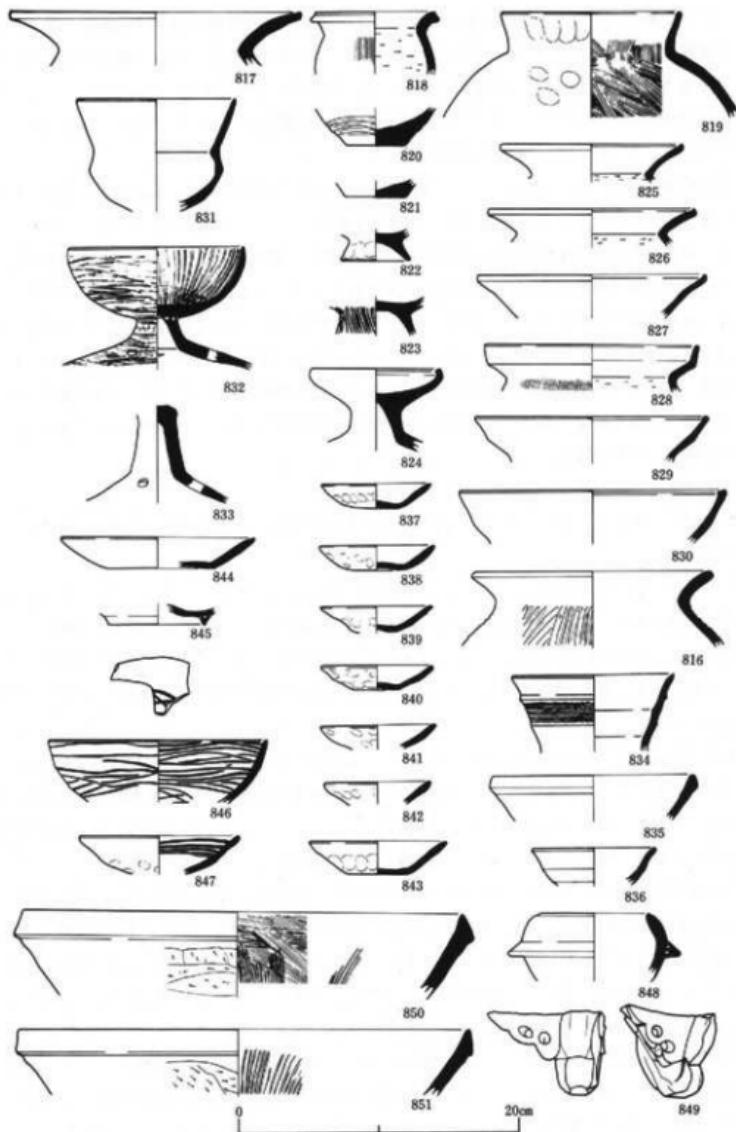
庄内式土器 製塙土器（822）、台付甕（823）、甕（825～828）の器種がある。822は製塙土器の底部であり、上げ底を呈する。内外面はナテ調整する。非河内産。823は甕の脚部であり、ゆるく八字形に伸びる。外面は粗いハケメ調整、内面はナテ調整する。台付S字状口縁の甕と考えられる。非河内産。825～827は口縁部がく字形に外反する甕である。口縁端部は上方へつまみ上げ気味に肥厚する。口縁部内外面は横ナテ調整、体部内面はヘラケズリ調整する。生駒西麓産。828は口縁部が外反した後、上方へ伸びる甕である。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は横ナテ調整、体部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整する。非河内産。

布留式土器 器台（824）、甕（829・830）、小型丸底甕（831）、高杯（832・833）の器種がある。824は杯部が外上方へ伸び、口縁部が強く内弯する器台である。口縁端部は面をもつ。脚部は柱状部が短く、裾部が大きく開く。風化が著しく調整法は不明。829・830は口縁部が内弯気味に立ち上がる甕である。口縁端部は内側へ肥厚し、面をもつ。内外面は横ナテ調整する。831は球形の体部より口縁部が大きく外上方へ伸びる小型丸底甕である。口縁端部は丸く終る。風化が著しく内外面の調整法は不明。832は杯部が椀状を呈する高杯である。口縁端部は丸く終る。脚部は柱状部が短く、裾部が大きく開く。裾部に円孔を穿つ。杯部内面は横ナテ調整の後、放射状の暗文を施す。外面はヘラミガキ調整する。脚部外面はヘラミガキ調整、内面はナテ調整する。833は高杯の脚部である。柱状部は長く、裾部が大きく開く。裾部に円孔を穿つ。風化が著しく調整法は不明。

須恵器 古墳時代の壺（834）がある。834は口頭部が長く外上方へ伸びる壺である。口縁端部は丸く終る。外面に2条の凸帯を施す。凸帯間に櫛描波状文を施す。内外面は回転ナテ調整する。

輸入磁器 白磁椀（835）と皿（836）の器種がある。835は体部が大きく逆八字形に伸びる椀である。口縁端部は外側へ肥厚し、玉縁状を呈する。内外面はロクロナテ調整する。内外面に施釉し、色調が灰白色を呈する。836は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する皿である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナテ調整する。内外面に施釉し、色調が乳白色を呈する。

土師器 皿（837～844）、椀（845）、羽釜（848）の器種がある。837～844は口縁部が大きく



第27图 D地区包含层出土土器实测图

ラッパ状に伸びる皿である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、見込みはナデ調整する。837・843は小皿、844は大皿である。845は椀の底部である。断面形が逆三角形を呈する高台を貼り付ける。外面は横ナデ調整、内面はナデ調整する。848は張りの少ない体部より口縁部が内湾するミニチュアの羽釜である。口縁端部はつまみ上げ気味に終る。鈔はやや下方へ伸びる。内外面は横ナデ調整する。

瓦器 梗 (846・847)、火合 (849)、擂鉢 (850・851) の器種がある。846は口縁端部が丸く終る梗である。器高は高い。外面は粗い、内面は密なヘラミガキ調整する。見込みに斜格子の暗文を施す。847は口縁端部が丸く終る梗である。器高は低く皿状を呈する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。849は火合の脚部である。断面形がL字形を呈する。風化が著しく調整法は不明。850・851は体部が大きく逆八字形に伸びる擂鉢である。口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面をもつ。850は口縁部外面を横ナデ調整、体部外面をヘラケズリ調整する。内面はハケメ調整し、15本のおろし目を施す。851は口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面をヘラケズリ調整、内面をナデ調整する。内面におろし目を施し、14本が残る。

E 地区（第28図）

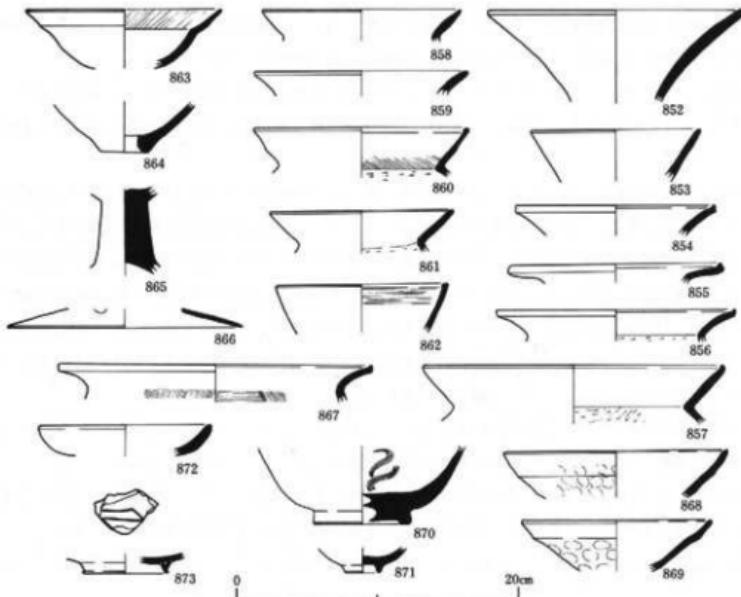
弥生時代～中世の土器が出土した。弥生土器、庄内式土器、布留式土器、土師器、輸入磁器、瓦器がある。

弥生土器 壺 (858・859)、底部 (864)、高杯 (865) の器種がある。858・859は口縁部が外反する壺である。口縁端部は858が丸く終り、859が面をもつ。内外面は横ナデ調整する。生駒西麓産。864は平底の底部である。焼成前の円孔を中央に穿つ。風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。865は高杯の脚部である。柱状部は長い。風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。

庄内式土器 壺 (852・853) と甕 (854～857) の器種がある。852・853は口縁部が長く外上方へ伸びる壺である。口縁端部は丸く終る。内外面は横ナデ調整する。非河内産。854～857は口縁部がく字形に外反する甕である。口縁端部は上方へつまみ上げ気味に肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はヘラケズリ調整する。生駒西麓産。

布留式土器 壺 (860～862)、鉢 (863)、高杯 (866) の器種がある。860～862は口縁部が内角気味に立ち上がる壺である。口縁端部は内側へ肥厚し、面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はヘラケズリ調整する。863は張りの少ない体部より口縁部が2段で外反する鉢である。口縁端部は丸く終る。風化が著しく調整法は不明。866は高杯の脚部である。裾部が大きく聞く。円孔を穿つ。風化が著しく調整法は不明。

土師器 壺 (867)、杯 (868・869)、皿 (872) の器種がある。867は口縁部が大きく外反する壺である。口縁端部は上方へつまみ上げ気味に肥厚する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はハケメ調整する。868・869は体部が外上方へ伸び、口縁部に至る杯である。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面と体部内面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整する。



第28図 E地区包含層出土土器実測図

872は口縁部が内側気味に立ち上がる中皿である。口縁端部は丸く終る。内外面は横ナデ調整する。

輸入磁器 青磁碗 (870) と白磁碗 (871) の器種がある。870は碗の底部である。断面形が方形を呈する低い高台を削り出す。体部と見込みに櫛状工具による文様を施す。内外面はロクロナデ調整する。底部裏面以外は施釉し、色調が灰緑色を呈する。871は碗の底部である。断面形が逆三角形を呈する高い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉し、色調が淡青白色を呈する。

瓦器 梗 (873) がある。873は梗の底部である。断面形が逆三角形を呈するやや高い高台を貼り付ける。見込みに並行線の暗文を施す。

F地区（第29図）

弥生時代～中世の土器が出土した。弥生土器、布留式土器、土師器、瓦器、陶磁器、輸入磁器がある。

弥生土器 壺 (874・875) と甕 (876) の器種がある。874は頭部が筒状を呈し、口縁部が大きく外反する壺である。口縁端部は面をもつ。内面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。875は口縁部が2段で外反する壺である。口縁端部はやや面をもつ。風化が著しく調整法は不明。

生駒西麓産。876は口縁部がく字形に外反する甕である。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はタタキ目調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

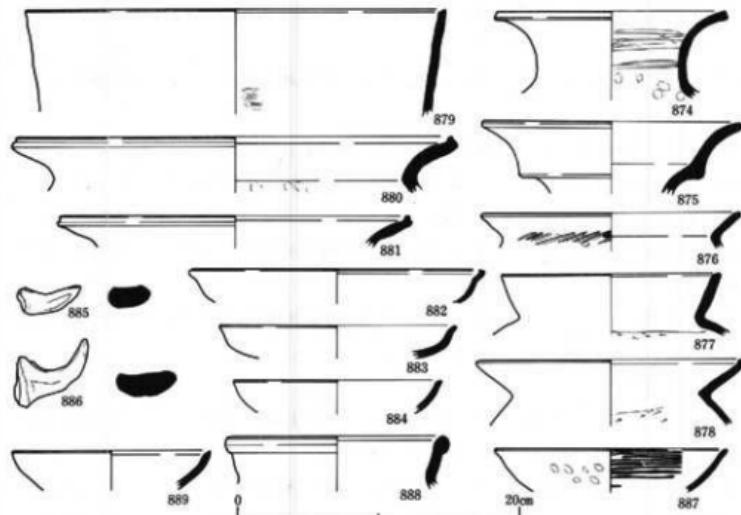
布留式土器 甕(877・878)がある。877・878は口縁部が内湾気味に立ち上がる甕である。口縁端部は内側へ肥厚し、面をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はヘラケズリ調整する。

土師器 古墳時代の瓶(879)と奈良時代の甕(880・881)・皿(882-884)・把手(885・886)の器種がある。879は口縁部が上方へ伸びる瓶である。口縁端部は内傾して面をもつ。外面は横ナデ調整、内面はハケメ調整の後、横ナデ調整する。880・881は口縁部が外折する甕である。口縁端部は上方へつまみ上げ気味に肥厚する。内外面は横ナデ調整する。882は口縁部が外反し、口縁端部が内側へ肥厚する皿である。外面は横ナデ調整する。883・884は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸く終る皿である。外面は横ナデ調整する。885・886は把手である。断面形が板状を呈する。外面はナデ調整する。

瓦器 梱(887)がある。887は口縁端部が丸く終る梶である。器高はやや低い。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整する。内面はやや粗いヘラミガキ調整する。

陶磁器 壺(888)がある。口頸部がやや外上方へ伸びる壺である。口縁端部は外側へ肥厚し、玉縁状を呈する。外面はロクロナデ調整する。色調は紫赤色を呈する。備前焼。

輸入磁器 天目茶梶(889)がある。889は体部が内湾気味に立ち上がる天目茶梶である。口



第29図 F地区包含層出土土器実測図

縁端部はやや尖り気味に終る。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉し、色調が茶黒色を呈する。素地は須恵器の焼に近い。

G 地区（第30図）

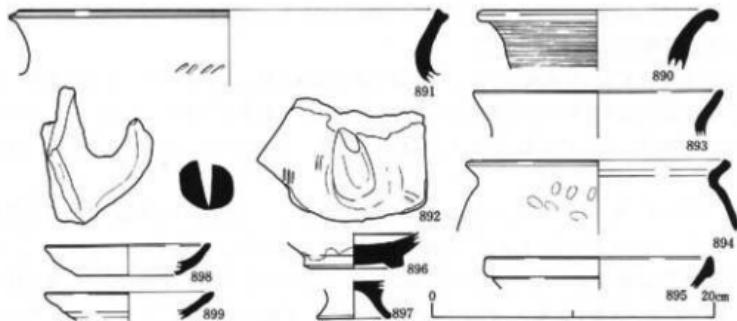
古墳時代～中世の土器が出土した。須恵器、土師器、輸入磁器、陶磁器がある。

須恵器 古墳時代の甕（890）・把手（892）と奈良時代の甕（891）の器種がある。890は口縁部が大きく外反する甕である。口縁端部は下方へ肥厚する。外面はカキ目調整、内面は回転ナデ調整する。892は角状を呈する把手である。上部より円錐形を呈する円孔を穿つ。体部外面はタタキ目調整の後、回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。把手部は指オサエ調整で終る。891は口縁部が大きく外反する甕である。口縁端部は面をもつ。外面はタタキ目調整の後、回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。

土師器 甕（893・894）と高台付皿（897）の器種がある。893は口縁部が大きく外反する甕である。口縁端部は丸く終る。風化が著しく調整法は不明。894は口縁部が強く外反する甕である。口縁端部は面をもつ。口縁部と体部の境に稜がつく。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、内面はナデ調整する。897は高台付皿の底部である。八字形に伸びる高い高台を貼り付ける。外面は横ナデ調整、内面はナデ調整する。

輸入磁器 白磁椀（895・896）がある。895は口縁部が逆八字形に伸びる椀である。口縁端部は外側へ肥厚し、玉縁状を呈する。内外面はロクロナデ調整する。内外面は施釉し、色調が淡白灰色を呈する。896は椀の底部である。断面形が逆台形を呈する低い高台を削り出す。内外面はロクロナデ調整する。外面は無施釉、内面は施釉する。色調は淡黄白色を呈する。

陶磁器 皿（898・899）がある。898・899は口縁部がゆるく外反する皿である。口縁端部は丸く終る。内外面はロクロナデ調整する。898は内外面を施釉し、色調が茶褐色を呈する。瀬戸・美濃焼。899は内面と口縁部外面を施釉し、色調が灰白色を呈する。窯は不明。



第30図 G地区包含層出土土器実測図

2. 製塙土器（第31図）

古墳時代以降の製塙土器がある。上層の遺物包含層より出土した。1～16は口縁部が尖り気味かやや丸く終る薄手の製塙土器である。外面は指オサエ調整、内面はナテ調整する。B地区出土。17は胎土中に稲穀を含む薄手の製塙土器である。外面は指オサエ調整、内面はナテ調整する。B地区出土。18は薄手の製塙土器であり、外面をナテ調整、内面をハケメ調整する。F地区出土。19・20は口縁端部が肥厚する厚手の製塙土器である。外面は指オサエ調整、内面はナテ調整する。19はF地区、20はA地区出土。21・22は厚手の製塙土器であり、外面をタタキ目調整、内面を貝殻調整する。B地区出土。23～25は厚手の製塙土器であり、外面を指オサエ調整する。内面に布压痕を残す。23は9～10本/cm、24は8～9本/cm、25は30～35本/cmである。23はF地区、24・25はB地区出土。

3. 埋輪（第31図）

上層の遺物包含層より円筒埴輪（26）が出土した。26は円筒埴輪の破片である。断面形が台形を呈する低いタガを貼り付ける。外面は縦方向のハケメ調整、内面はナテ調整する。

4. 瓦（第32図）

瓦は白鳳～室町時代の瓦がある。造構及び上層の遺物包含層より出土した。軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦がある。圧倒的に平瓦、丸瓦の量が多い。

1は偏行唐草文の軒平瓦である。頭は段頭である。外区は珠文と鋸歯文で飾る。内区は連続波状の茎から2本の蕨手が派生した形である。凹凸面はナテで仕上げる。破損後に二次焼成を受けており、煤が付着する。B地区の落ち込み1より出土。白鳳時代。

2・3は連珠文の軒平瓦である。頭は段頭である。瓦当部には周縁をめぐらし、界線とする。内区には珠文を一列に配する。3は珠文を欠損する。凹面は布目痕を残し、凸面はナテで仕上げる。2は破損後に二次焼成を受けており、煤が付着する。B地区の遺物包含層より出土。3はC地区的堀より出土。鎌倉時代。

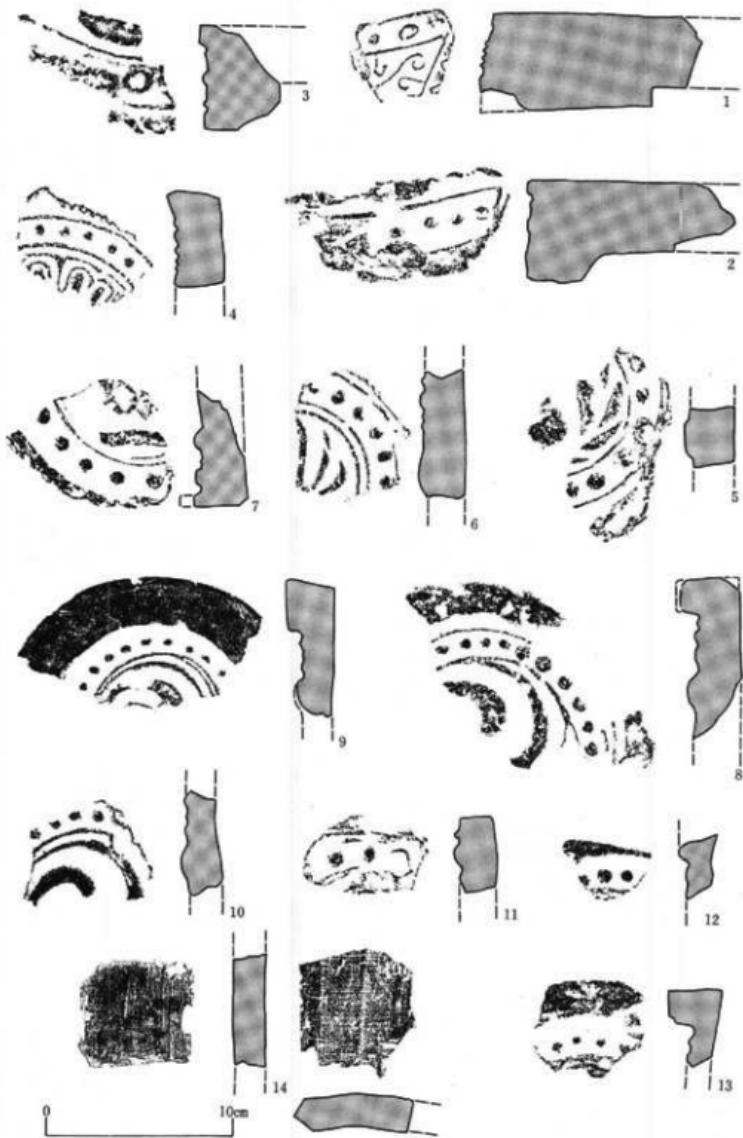
4は複弁蓮華文の軒丸瓦である。外区は2重の圓線で区画し、その間に珠文を施す。周縁の内斜面に雷文と称される花弁文で飾る。内区は複弁蓮華文を施す。内面はナテで仕上げる。外面は二次焼成を受けており、煤が付着する。B地区の落ち込み1より出土。白鳳時代。

5は蓮華文の軒丸瓦である。外区は2重の圓線で区画し、その間に珠文を施す。内区は蓮華文を施す。内面はナテで仕上げる。B地区の落ち込み1より出土。平安時代。

6は蓮華文の軒丸瓦である。外区は外側に1重、内側に2重の圓線で区画し、その間に珠文を施す。内区は蓮華文を施す。内面はナテで仕上げる。C地区的遺物包含層より出土。平安時代。



第31図 製塙土器・埴輪実測図



第32図 瓦実測図

7は五輪塔文の軒丸瓦である。外区は1重の圓線で区画し、その間に珠文を施す。内区は五輪塔文を施す。内面はナデて仕上げる。C地区の堀より出土。平安時代。

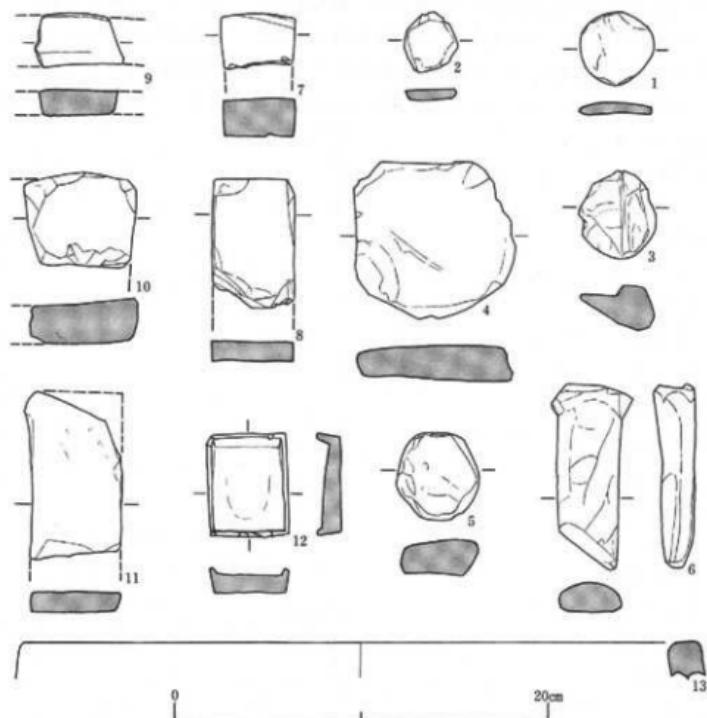
8は巴文の軒丸瓦である。外区は1重の圓線で区画する。内区は左廻りの三巴文を配し、そのまわりに珠文を施す。内面はナデて仕上げる。B地区の落ち込み1より出土。鎌倉時代。

9は巴文の軒丸瓦である。内区に左廻りの三巴文を配し、そのまわりに珠文を施す。内面はナデて仕上げる。C地区の堀より出土。鎌倉時代。

10は巴文の軒丸瓦である。左廻りの三巴文を配し、そのまわりに珠文を施す。内面はナデて仕上げる。C地区の堀より出土。鎌倉時代。

12~13は軒丸瓦である。珠文のみが残る。内面はナデて仕上げる。11はB地区、12・13はC地区の遺物包含層より出土。時期は不明。

14は平瓦である。凸面は布目痕を残す。凹面はナデて仕上げる。B地区の落ち込み1より出土。白鳳時代。



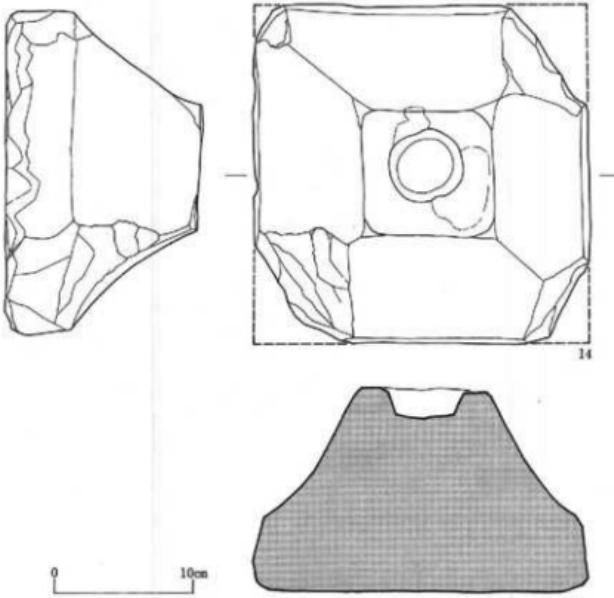
第33図 土製品・石製品実測図

5. 土製品（第33図）

中世の土製品が遺構及び上層の遺物包含層より出土した。1～5は円板状土製品である。1は土師器皿、2は瓦器羽釜、3～5は瓦を転用する。円形に打ち欠いた後、円周部を研磨する。1は径3.8cm、重さ10g、2は径3.2cm、重さ5.5g、3は径4.8cm、重さ37.8g、4は径8.5cm、重さ174.3g、5は径4.5cm、重さ39.6gを測る。1・3は堀、2・4・5はC地区の遺物包含層より出土。6は板状土製品である。長方形を呈し、小口の一方を瘤状にする。下部は欠損する。外面はナデテ仕上げる。残在長9.5cm、最大幅4.3cmを測る。C-1地区の遺物包含層より出土。

6. 石製品（第33・34図）

中世の石製品が遺構及び上層の遺物包含層より出土した。砥石、硯、鍋、五輪塔がある。7～11は長方形を呈する砥石である。4面に使用による磨り減りが認められるものが多い。11は刃物痕が残る。7は残存長2.8cm、最大幅4.0cm、最大厚2.0cmを測る。C-1地区的遺物包含層より出土。8は残存長7.0cm、最大幅4.4cm、残存厚1.0cmを測る。B地区の落ち込み1より出土。9は全長2.8cm、残存幅4.6cm、最大厚1.4cmを測る。C-1地区的遺物包含層より出土。10は残存長5.0cm、残存幅6.0cm、最大厚2.2cmを測る。C地区的堀より出土。11は残存長9.0cm、最大幅4.8cm、最大厚1.0cmを測る。C地区的遺物包含層より出土。12は長方形を呈する小形の硯である。陸部中央は使用による磨り減りが著しい。海部に墨が付着する。全長5.3cm、最大幅4.2cm、最大高1.2cmを測る。C地区的堀より出土。13は復原口径36.5cmを測る滑石製の石鍋である。口縁端部は面をも



第34図 石製品実測図

つ。B地区の落ち込み1より出土。14は五輪塔の笠石である。断面形が台形を呈し、上部に円形の凹みを入れる。1辺が23.6cm、最大高14.4cmを測る。C-1地区の遺物包含層より出土。

7. 木製品（第35・36図）

木製品は古墳時代と中世のものがある。古墳時代のものは遺物包含層、中世のものは落ち込み1・堀より出土した。鍬未成品・鋤・箸・板などがある。以下、各製品について説明を記すが、挿図の横断面に描かれた弧は木の年輪を模式的に表わしており、木取りを示す。材は広葉樹、針葉樹を識別しているが、同定したものではなく、著者の肉眼観察によるものである。

1は鍬未成品である。平面形が台形を呈する。側縁は頭部より弯曲した後、刃部に向かって直線的に伸びる。刃部は両側よりV字形に削る。全面に加工痕が残る。全長27.0cm、最大幅18.4cm、最大厚2.0cmを測る。柾目材を使用する。材は広葉樹と考えられる。B地区の古墳時代遺物包含層より出土。5世紀後半。

2は組み合せ式の鋤である。一般的になすび状鋤と呼ばれているものである。身の下半は欠損する。結縛部と身の境は両側縁にコ字形のえぐりを入れる。結縛部は横断面がかまばこ状であり、小口が瘤状を呈する。残存長35.4cm、最大幅9.2cm、最大厚1.1cmを測る。柾目材を使用する。材は広葉樹と考えられる。B地区の古墳時代遺物包含層より出土。5世紀後半。

3は角材である。小口の一端にえぐりを入れる。全長28.4cm、最大幅3.0cm、最大厚2.4cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の古墳時代遺物包含層より出土。5世紀後半。

4は棒材である。小口の一端にえぐりを入れる。下部は自然面で終る。残存長29.2cm、長径7.2cm、短径6.6cmを測る。芯持材を使用する。材は針葉樹である。B地区の古墳時代遺物包含層より出土。5世紀後半。

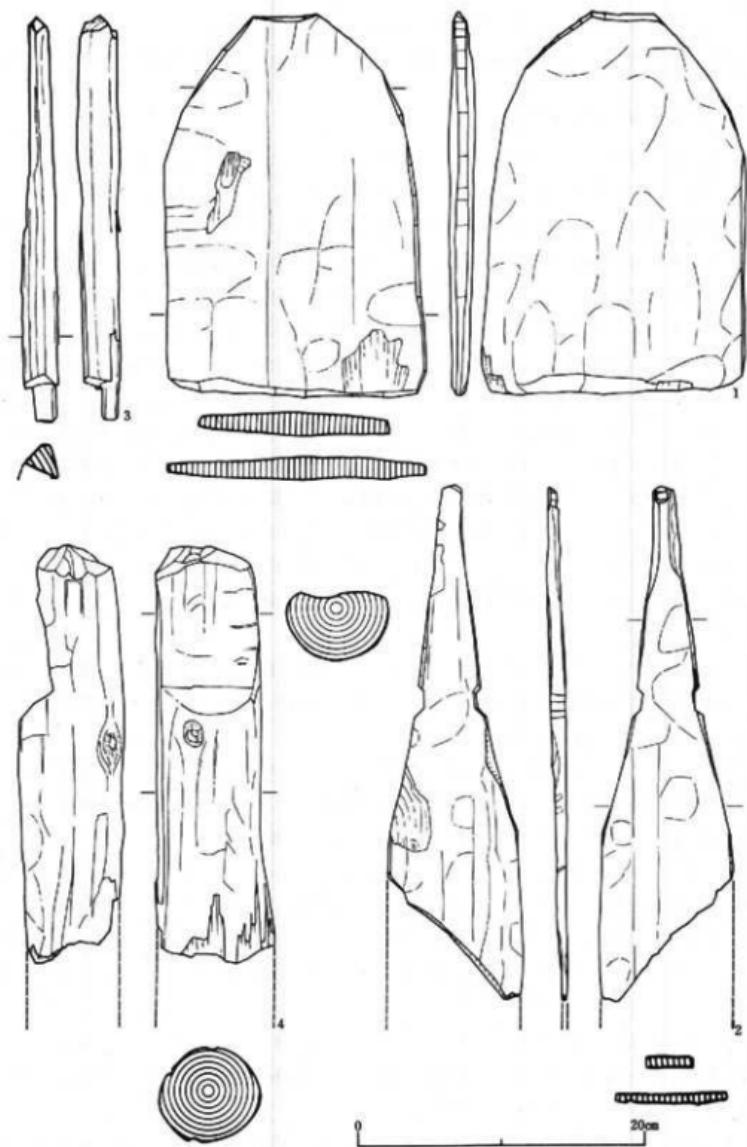
5は箸である。棒状を呈し、中央部で最も厚く、小口に向かって細く尖らす。全面を削る。断面形がほほ楕円形を呈する。残存長20.2cm、長径0.8cm、短径0.5cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

6は箸である。形態は5と同様。残存長11.2cm、長径0.6cm、短径0.4cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

7は箸である。形態は5と同様であるが断面形がやや角ばる。残存長10.3cm、長径0.6cm、短径0.5cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

8は箸である。形態は5と同様であるが断面形が長方形を呈する。残存長11.3cm、長辺0.6cm、短辺0.5cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

9は箸である。形態は5と同様であるが断面形がやや角ばる。残存長3.3cm、長径0.6cm、短径0.5cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。



第35図 木製品実測図

10は箸である。形態は5と同様であるが断面形が長方形を呈する。残存長5.0cm、長辺0.5cm、短辺0.3cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

11は箸である。形態は5と同様であるが断面形が長方形を呈する。残存長6.3cm、長辺0.4cm、短辺0.3cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

12は箸である。形態は5と同様である。残存長5.4cm、長辺0.6cm、短辺0.4cmを測る。割り材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

13は板材である。小口の一端の約 $\frac{1}{2}$ を斜めに削る。側縁も斜めに削る。全長4.0cm、最大幅2.4cm、最大厚0.5cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

14は板材である。側縁は垂直に削る。残存長2.2cm、最大幅2.2cm、最大厚0.6cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。C地区の壙より出土。16世紀。

15は板材である。側縁は垂直に削る。全長9.0cm、残存幅2.3cm、最大厚0.2cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

16は板材である。側縁は斜めに削る。残存長7.0cm、最大幅2.1cm、最大厚0.3cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

17は角材である。側縁は垂直に削る。全長10.7cm、最大幅2.2cm、最大厚1.5cmを測る。板目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

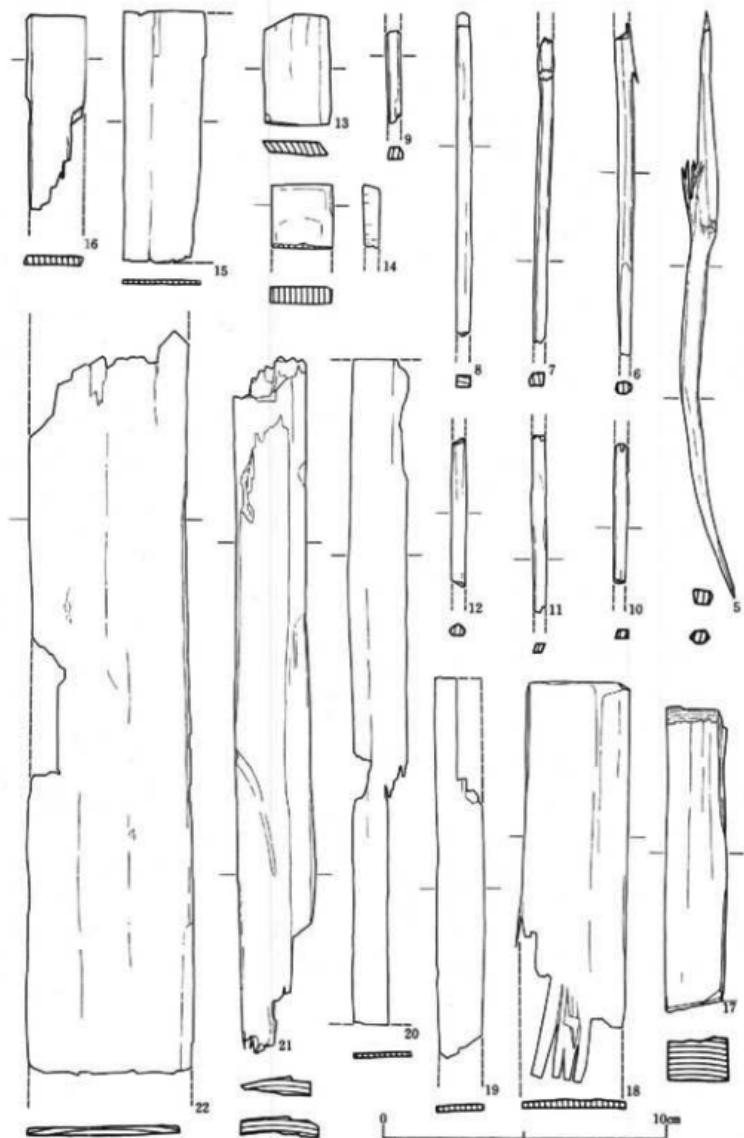
18は板材である。側縁は垂直に削る。残存長14.2cm、最大幅3.7cm、最大厚0.3cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

19は板材である。側縁は垂直に削る。残存長13.5cm、最大幅1.7cm、最大厚0.2cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

20は板材である。側縁は垂直に削る。全長23.6cm、最大幅2.1cm、最大厚0.2cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

21は板材である。側縁は垂直に削る。残存長24.6cm、最大幅2.7cm、最大厚0.7cmを測る。板目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。

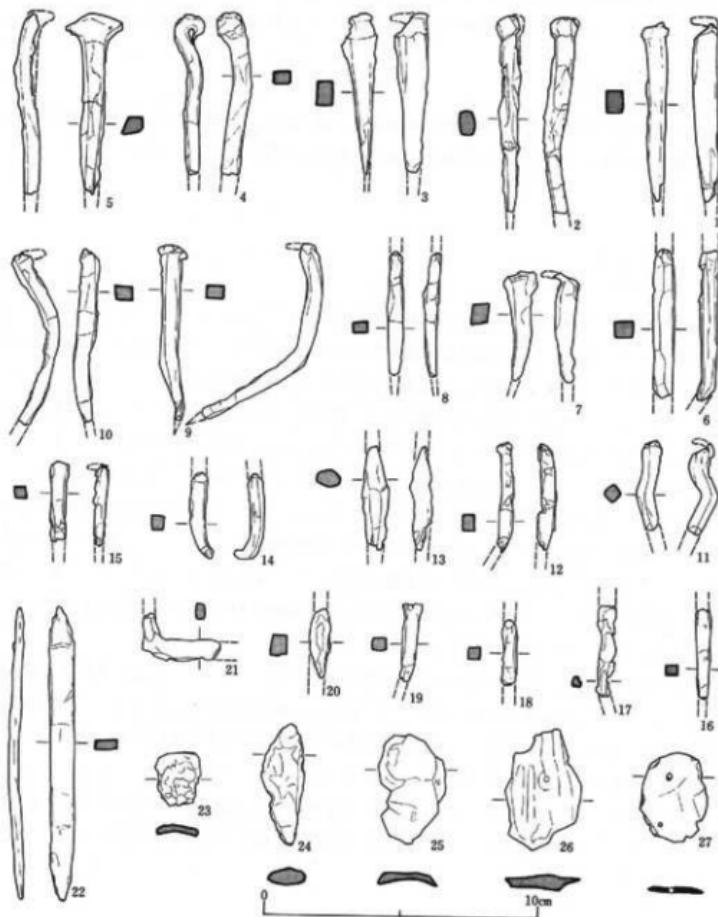
22は板材である。側縁は垂直に削る。残存長26.3cm、最大幅6.0cm、最大厚0.4cmを測る。板目材を使用する。材は針葉樹である。B地区の落ち込み1より出土。16世紀。



第36図 木製品実測図

8. 金属製品（第37図）

中世の金属製品が上層の遺物包含層及び造構より出土した。鉄製及び青銅製のものがある。1~21は鉄製の釘である。大型のものと小形のものがあり、前者は瓦釘などが考えられる。頭部は逆L字形を呈し、横断面が長方形ないしは方形を呈する。22は長方形の板状を呈する鉄製品



第37図 金属製品実測図

である。用途は不明である。
残存長10.7cm、最大幅0.9cm、
最大厚0.4cmを測る。A地区
の遺物包含層より出土。23～
25は形状及び用途不明の鉄製

品である。23・25はA地区、24はB地区的遺物包含層より出土。26・27は形状及び用途不明の
青銅製品である。27は小孔を2孔穿つ。26はA地区、27はB地区的遺物包含層より出土。



第38図 銭貨拓影(実寸)

9. 銭貨 (第38図)

銭貨は遺物包含層より出土した。28は寛永通宝、29・30は皇宋通宝である。皇宋通宝は北宋
錢（初鑄年1039年）である。28はA地区、29はC地区、30はB地区より出土。

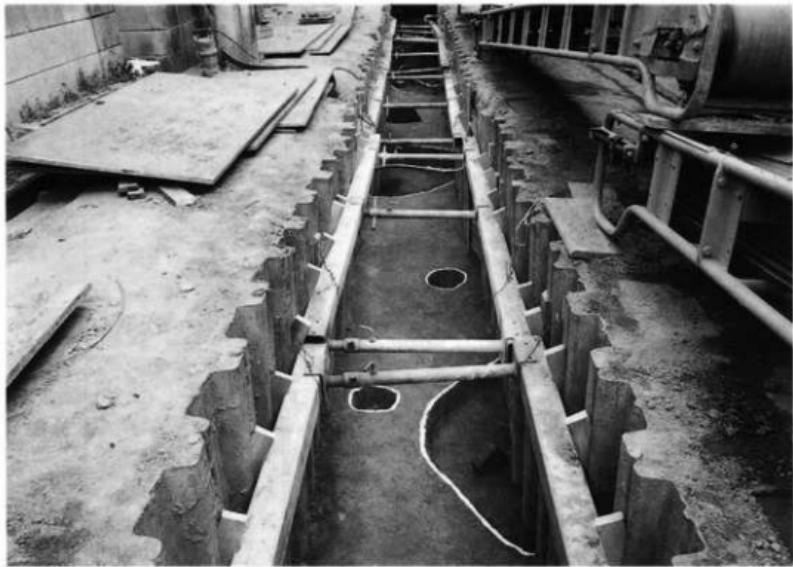
V. まとめ

下水道管渠築造工事に伴う若江遺跡の発掘調査は順次おこなわれている。第44次の発掘調査
も同事業のものである。今回の調査地は幅が狭く細長いものであった。そのため、遺構の性格
を決定しがたいものが多い。調査では若江城関連と考えられる遺構を検出した。B、C地区で
は幅15.5m、深さ1.3m以上を測る堀を確認した。堀は最も東に位置するものである。第32次調
査で検出されている堀の続きであり、北へ伸びている。また、第32次調査では土壘が存在した
ことが確認されているが、今回の調査では認められなかった。当地点では本来土壘がなかった
のか、または削平を受けてなくなっているのかは不明である。C-1地区では石組水路を検出し
た。C-1地区の周辺では以前に埠立建物、埠列、石組水路などがみつかっており、若江城関
連の施設と考えられている。今回の石組水路も同様のものと思われる。また、堀より東では整
地層及び遺構は検出しておらず、D地区までが若江城の範囲と考えられる。東の城外は調査結
果より湿地を呈していたと思われる。

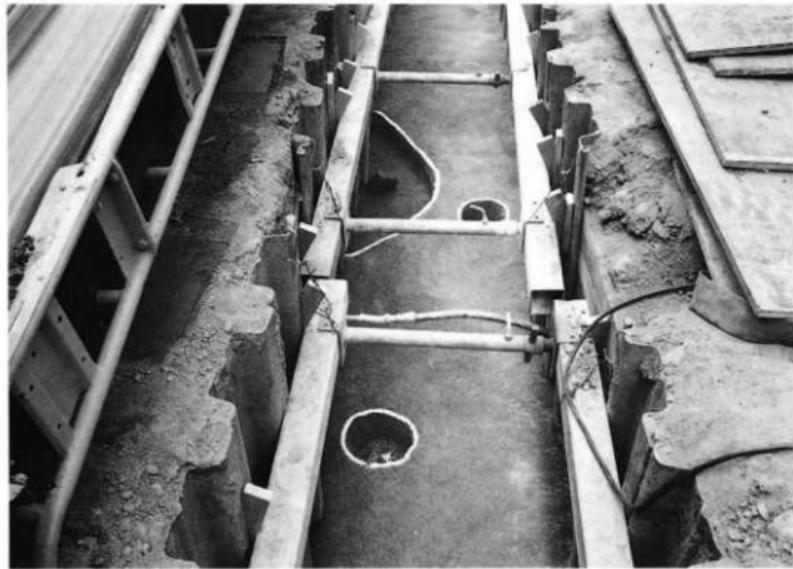
また、今回の調査では弥生時代より中世に至る遺物が出土している。B地区の下層で部分的
ではあるが古墳時代の遺物包含層を確認した。遺物包含層より鋤や鍬未成品などの木製農耕具
が出土した。当時期の木製農耕具は本市域では出土例が少なく貴重な資料である。鍬未成品の
出土から若江遺跡で木製農耕具を作っていたことが明らかになった。

調査は幅の狭く細長いものであったが、若江城関連の遺構、遺物や古墳時代の木製農耕具の
資料が得られた。今後の調査によってさらに大きな成果が得られることを期待したい。

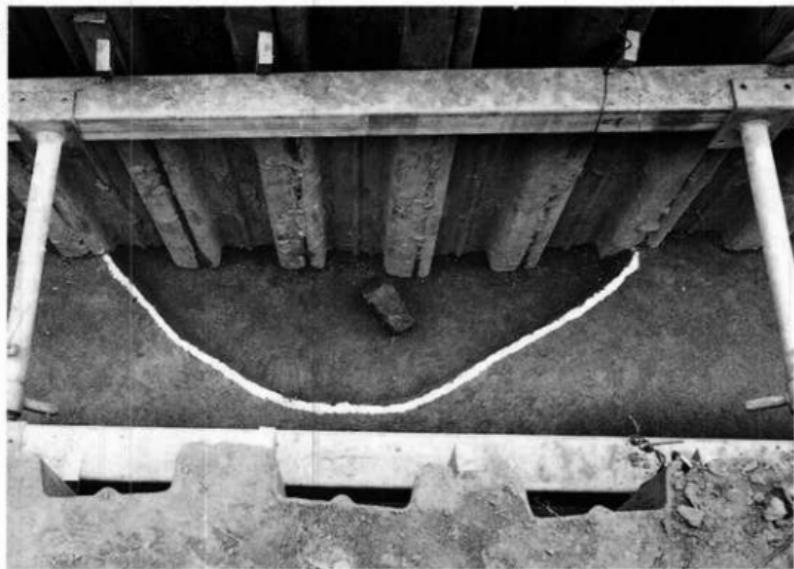
図 版



1. 造構全景 (A地区)



2. 土塙1. ピット1・2 (A地区)



1. 土塙 1 (A地区)



2. 土塙 2 (A地区)



1. 構1 (A地区)

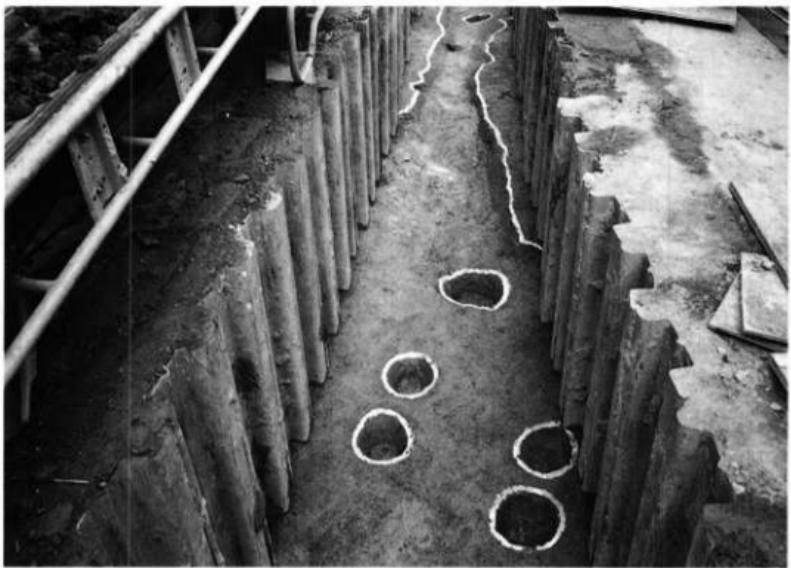


2. 遺構全景 (B地区)

図版4
造構



1. 溝2・3 (B地区)



2. ピット5～9・11 (B地区)



1. 落ち込み1 (B地区)



2. 落ち込み1内出土状況 (B地区)

図版6 造構



1. 東壁断面 (C地区)



2. 堀西肩 (C地区)



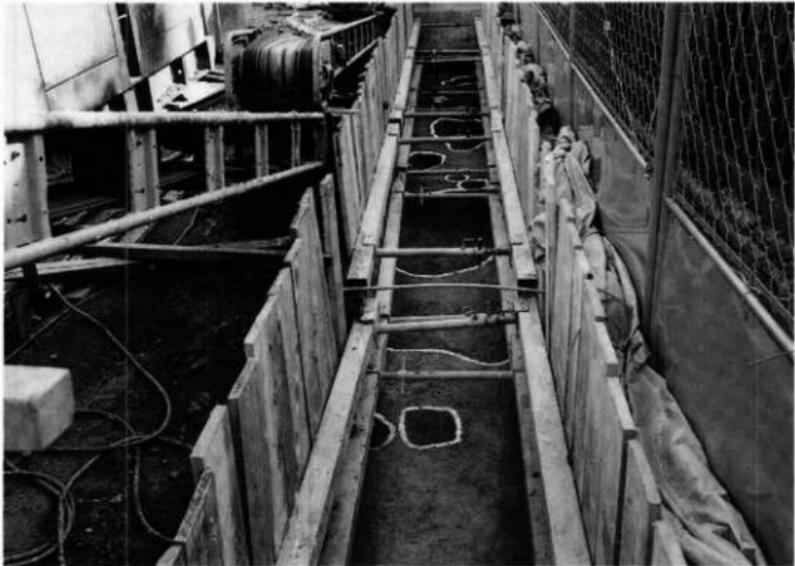
1. 石組水路 (C-1 地区)



2. 石組水路 (C-1 地区)

図版8

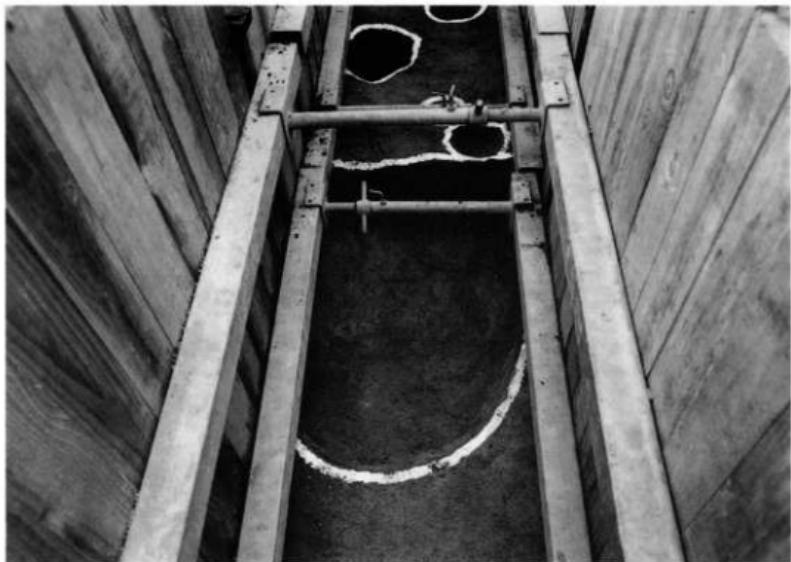
造構



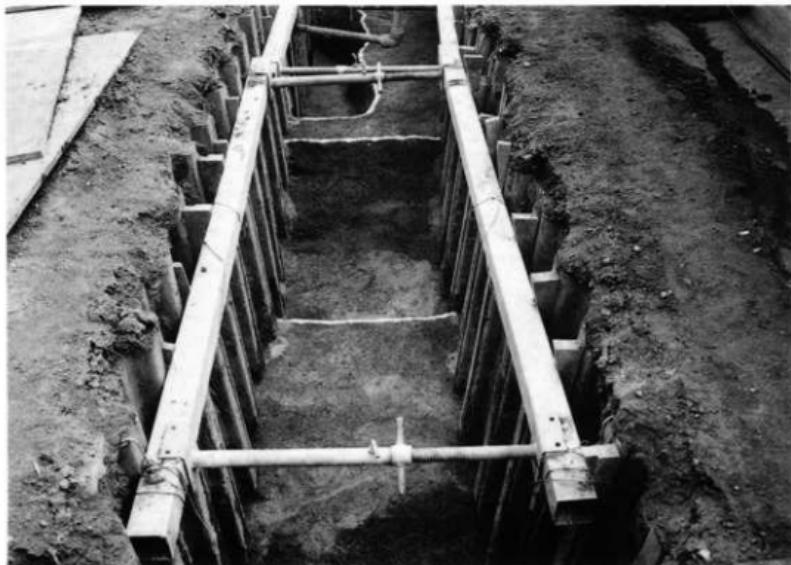
1. 造構全景 (C-1地X)



2. 造構全景 (C-1地区)



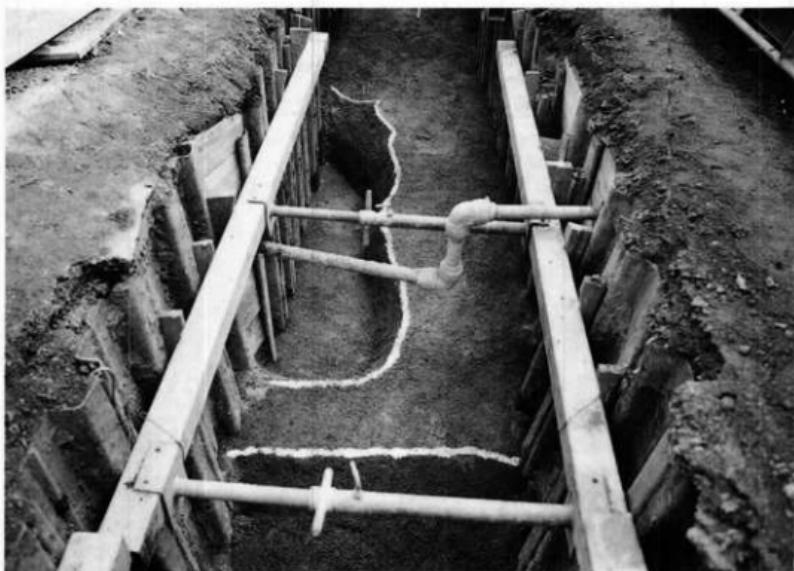
1. 土塙5 (C-1地区)



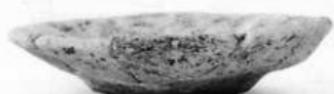
2. 造構全景 (D地区)



1. 煙突屑 (D地区)



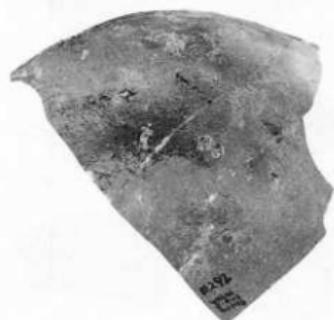
2. 土塙 7 (D地区)



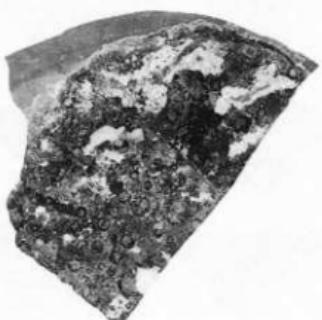
2



38

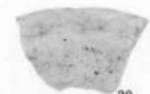


74



74'

1. 堀出土土器 上師器皿、瓦器皿



30



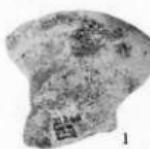
12



4



9



1



22



3



7



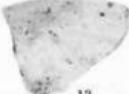
5



6



8



13



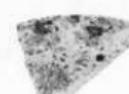
27



36



14

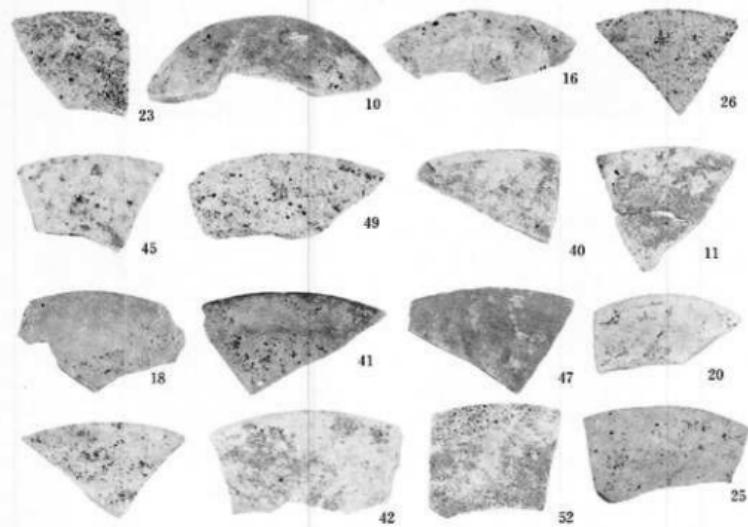


15

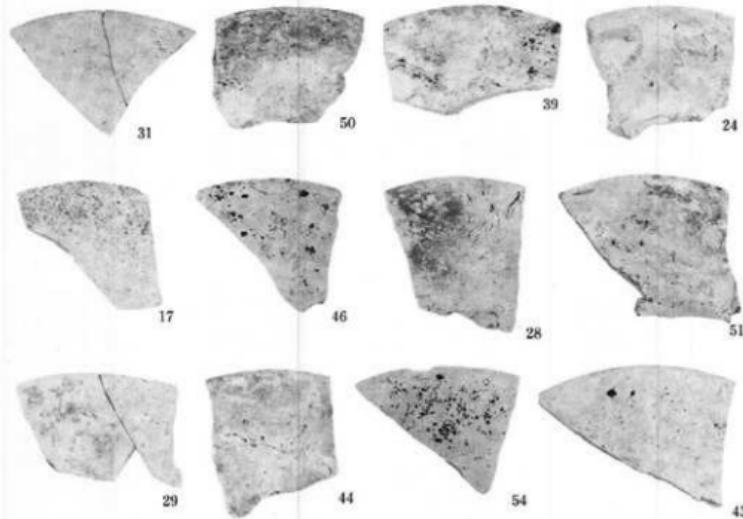
2. 堀出土土器 上師器皿

圖版 12

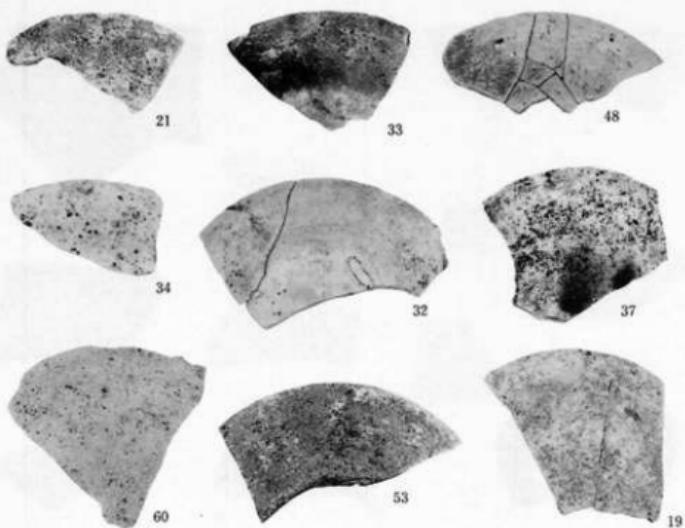
造物



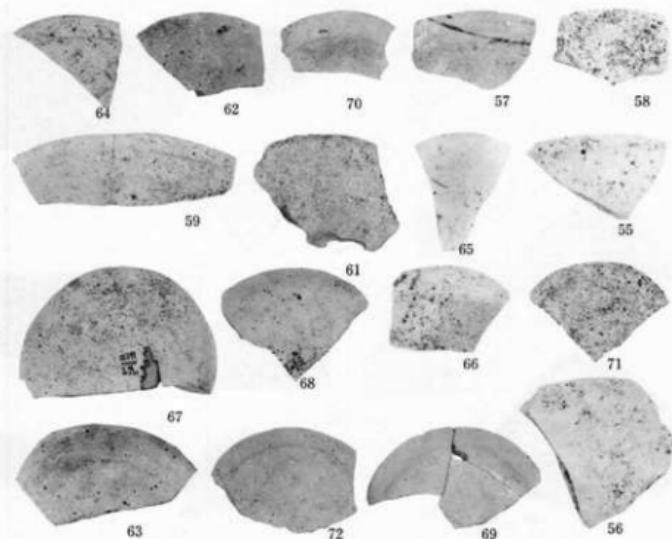
1. 墓出土土器 土師器皿



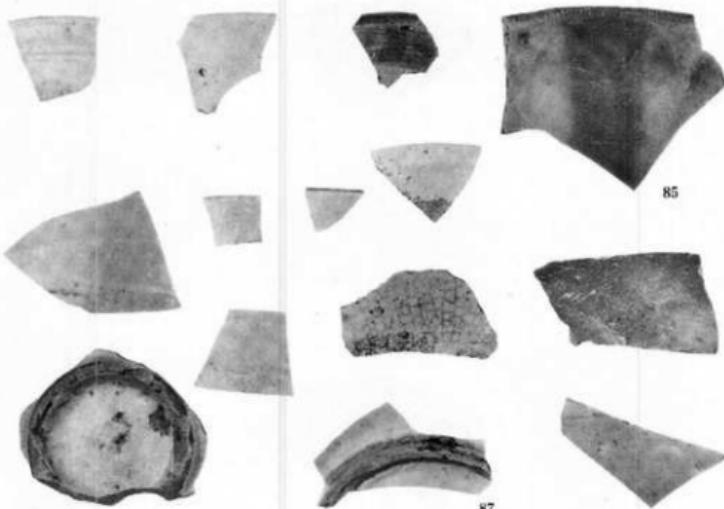
2. 墓出土土器 土師器皿



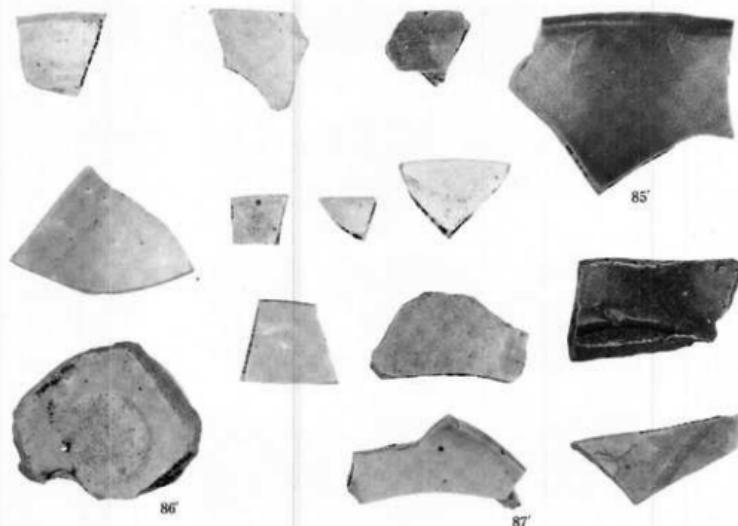
1. 墓出土土器 土師器皿



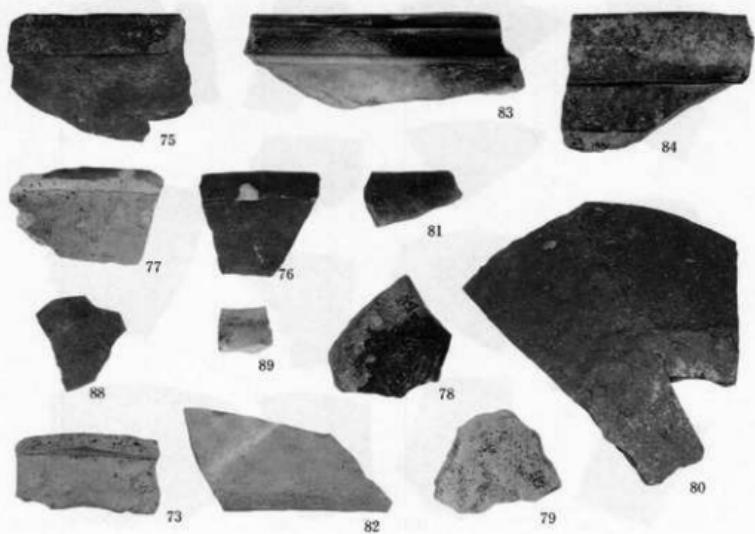
2. 墓出土土器 土師器皿



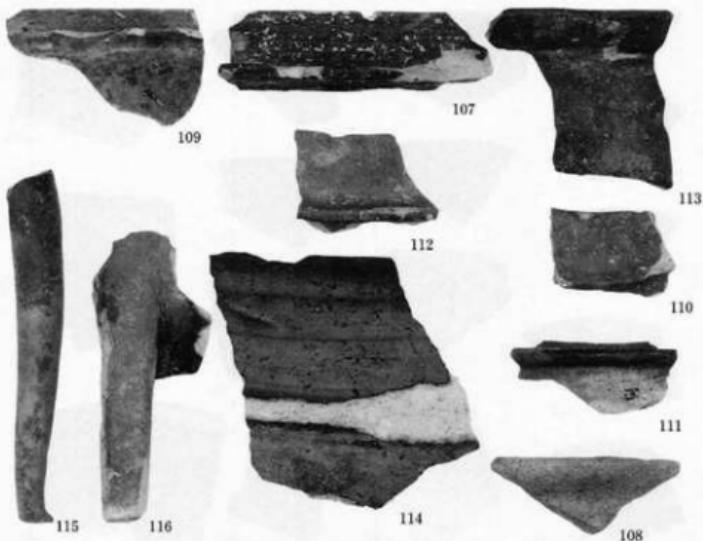
1. 墓出土土器 漢入磁器椀・皿 (表)



2. 墓出土土器 漢入磁器椀・皿 (裏)

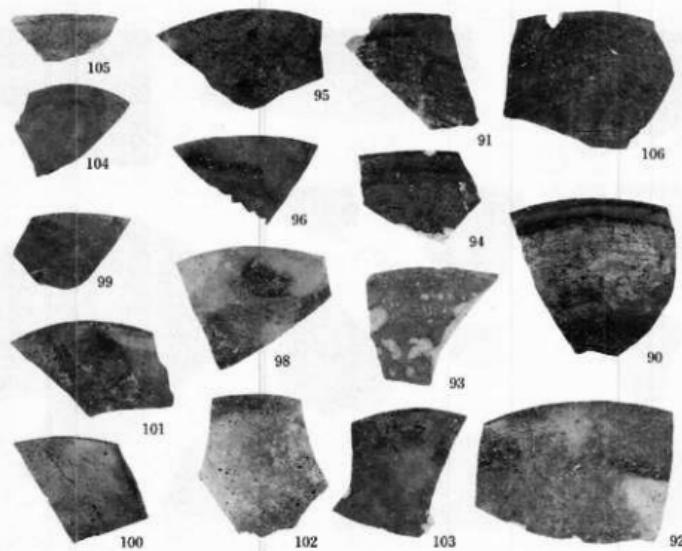


1. 墓出土土器 土師器高台付皿、須恵器鉢・鉢、瓦器壇鉢・火合・深鉢、陶磁器壺・指鉢

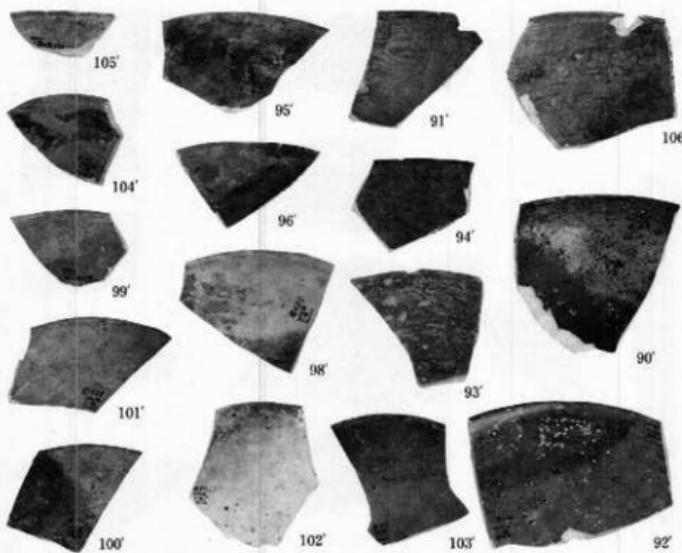


2. 墓出土土器 瓦器羽釜・鍋、土師器羽釜

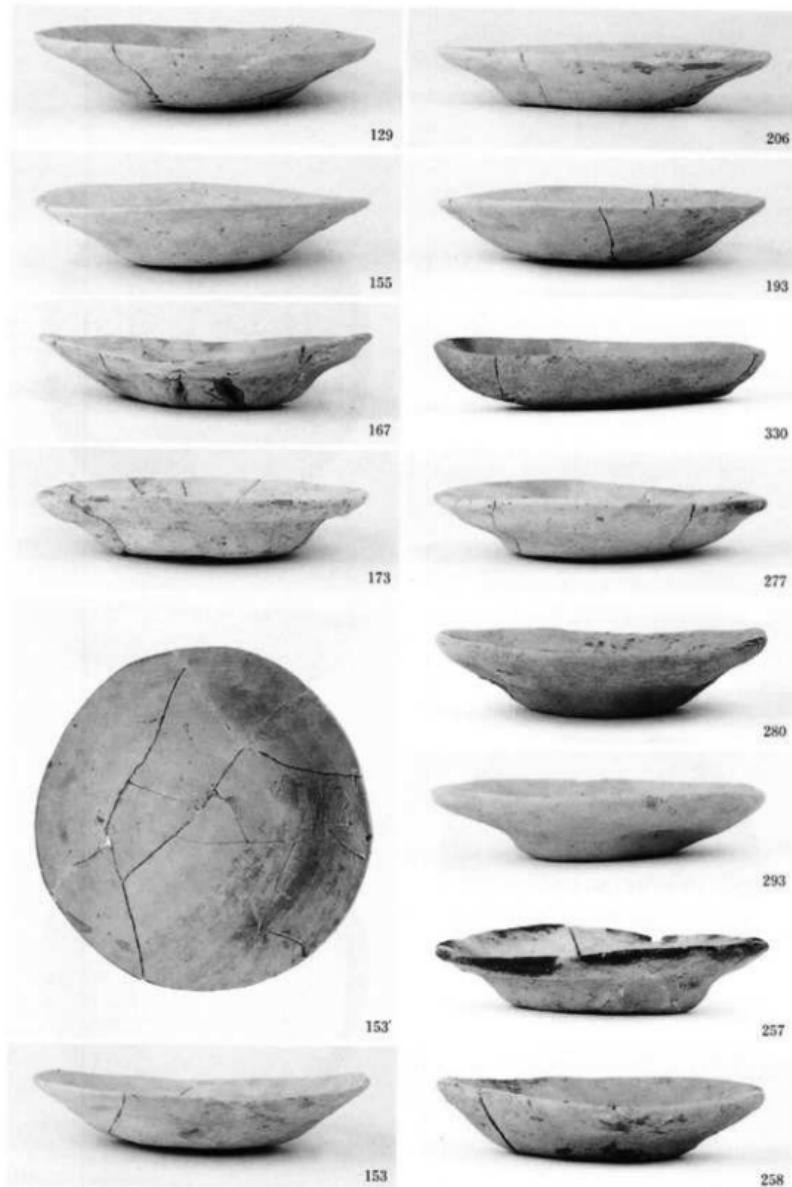
圖版 16
造物



1. 墓出土土器 瓦器碗・皿 (表)



2. 墓出土土器 瓦器碗・皿 (裏)



落ち込み 1 出土土器 土師器皿



260



286



379



372



383



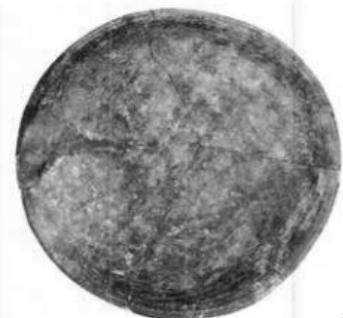
431



386



431



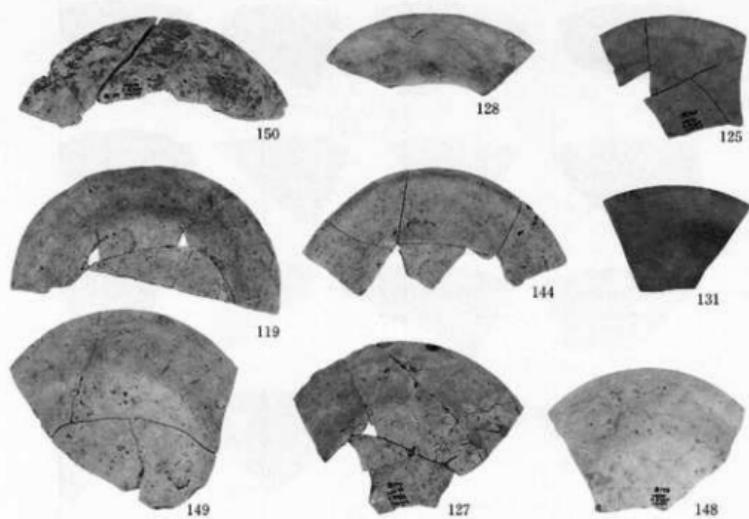
397



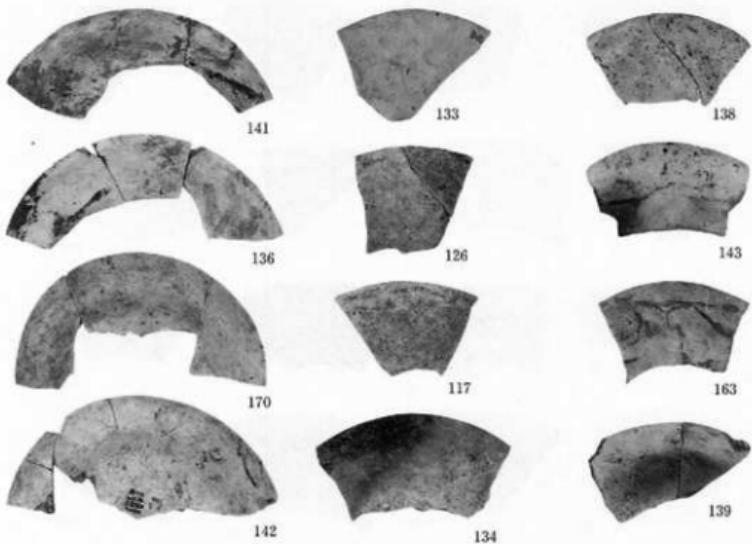
397



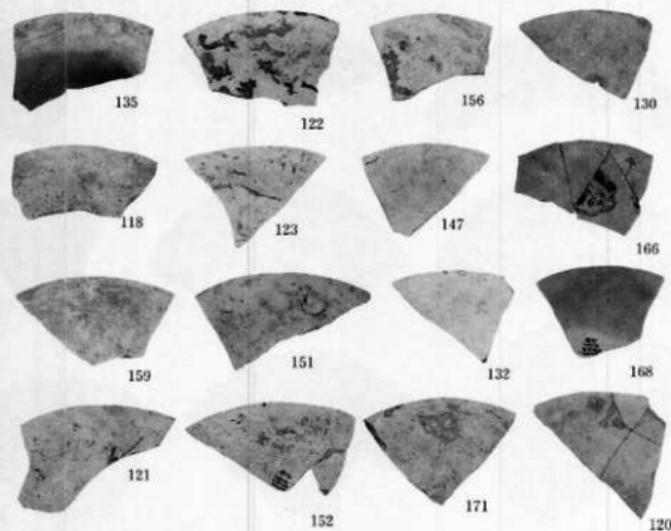
431



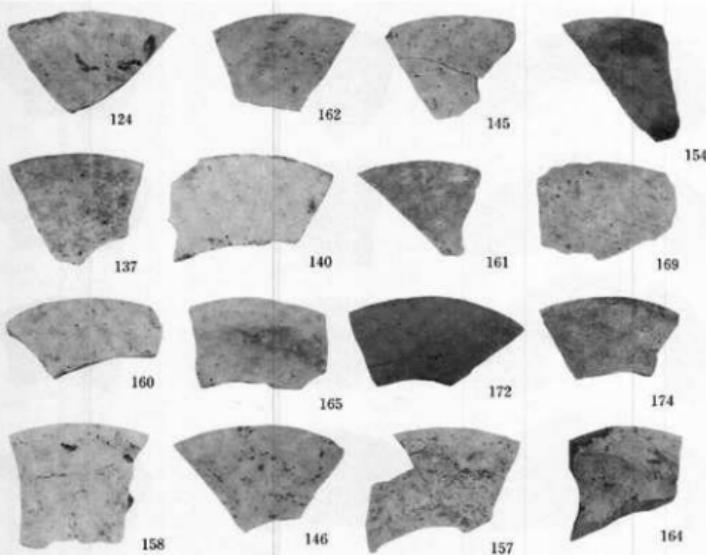
1. 落ち込み 1 出土土器 土師器皿



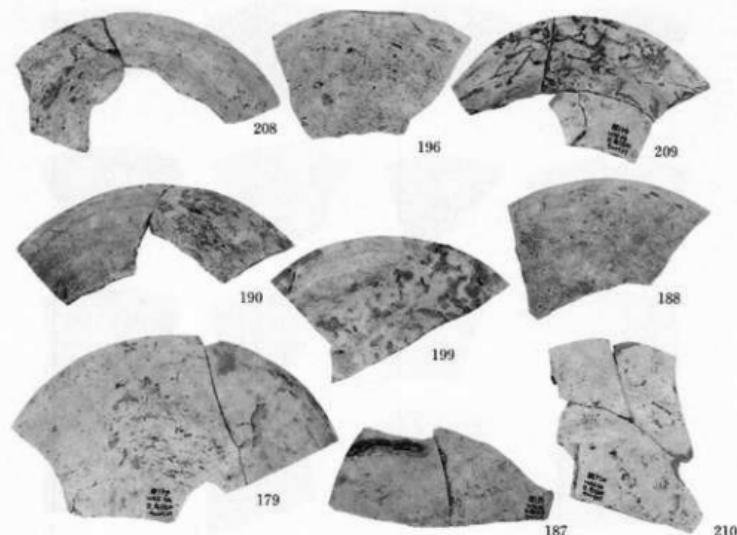
2. 落ち込み 1 出土土器 土師器皿



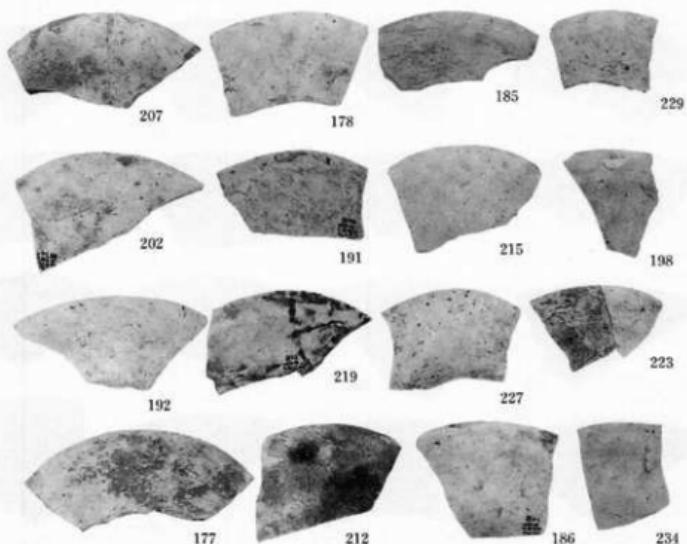
1. 落ち込み1出土土器 土師器皿



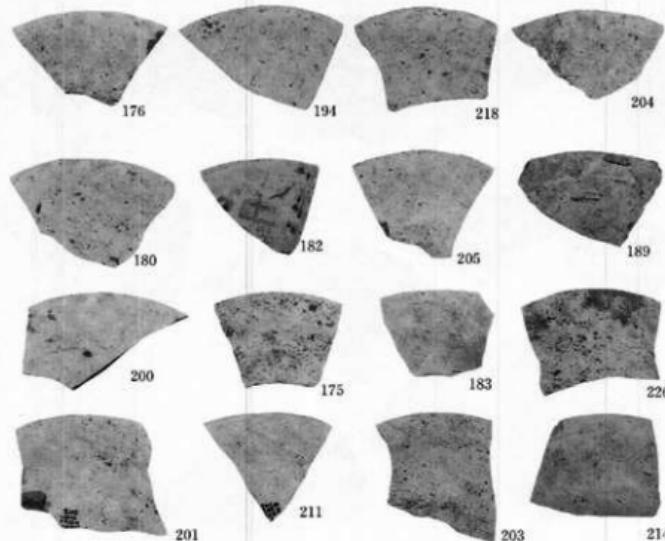
2. 落ち込み1出土土器 土師器皿



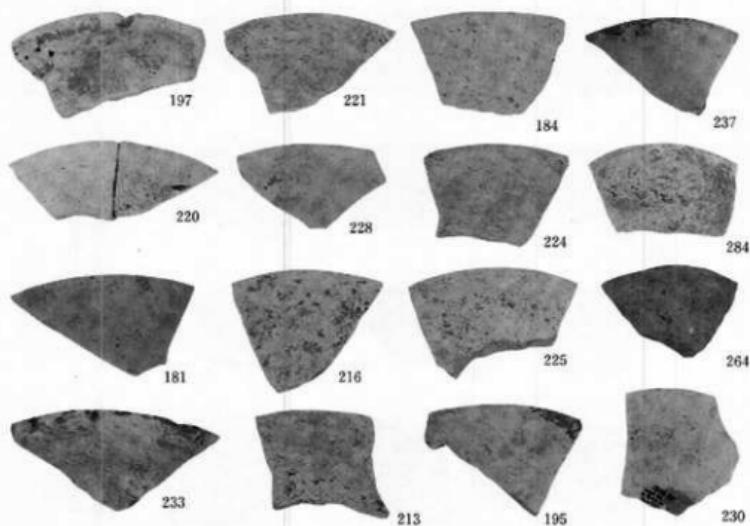
1. 落ち込み 1 出土土器 土師器皿



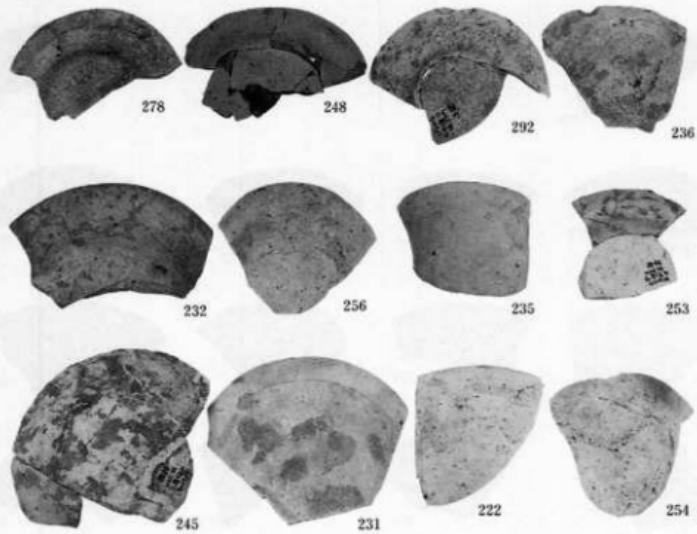
2. 落ち込み 1 出土土器 土師器皿



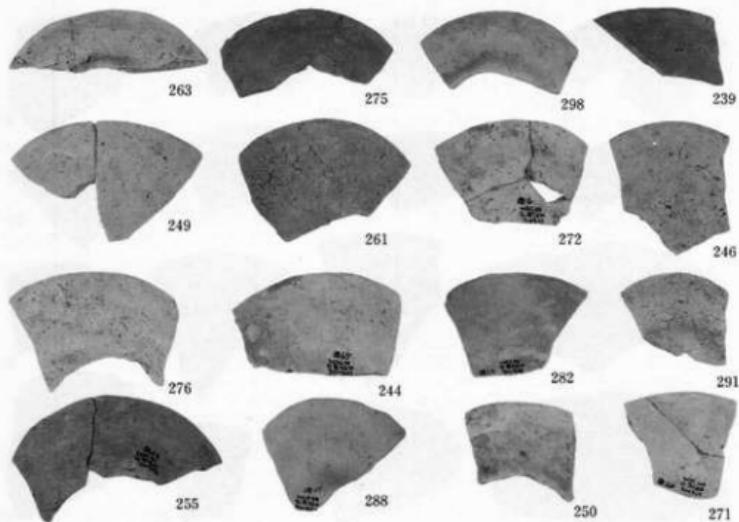
1. 落ち込み1出土土器 土師器皿



2. 落ち込み1出土土器 土師器皿

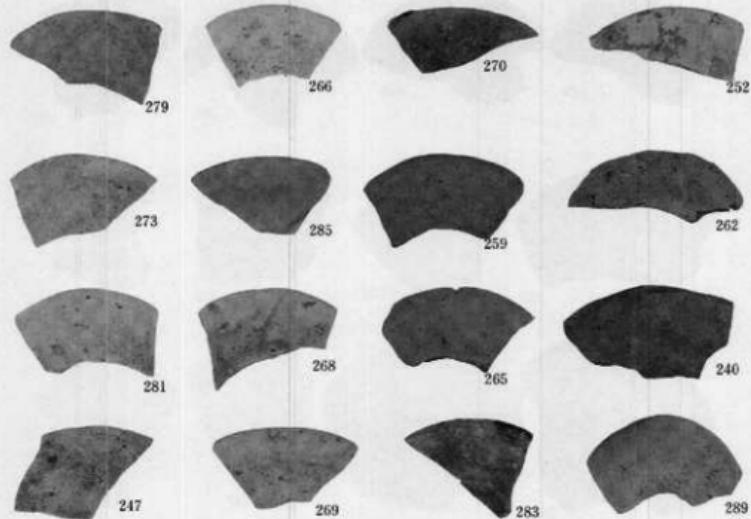


1. 落ち込み1出土土器 土師器皿

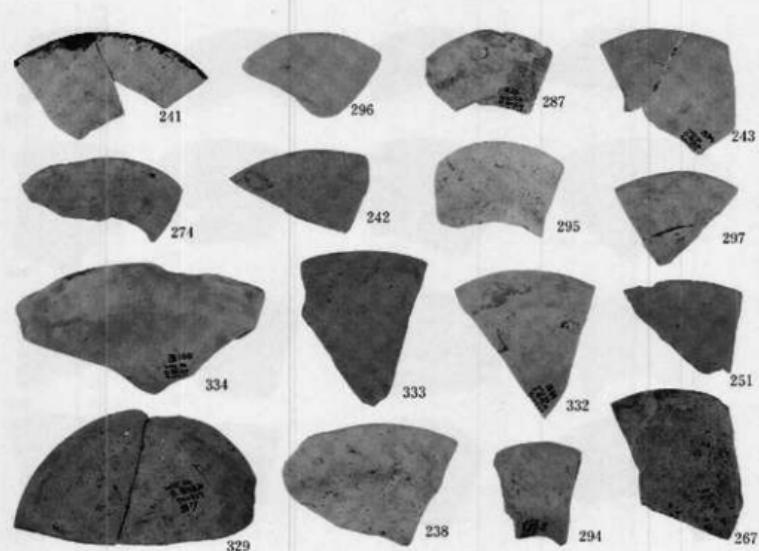


2. 落ち込み1出土土器 土師器皿

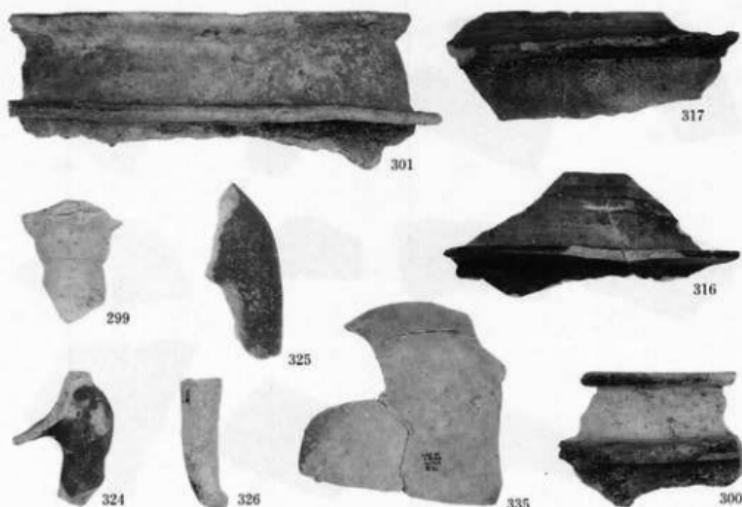
図版
24
遺物



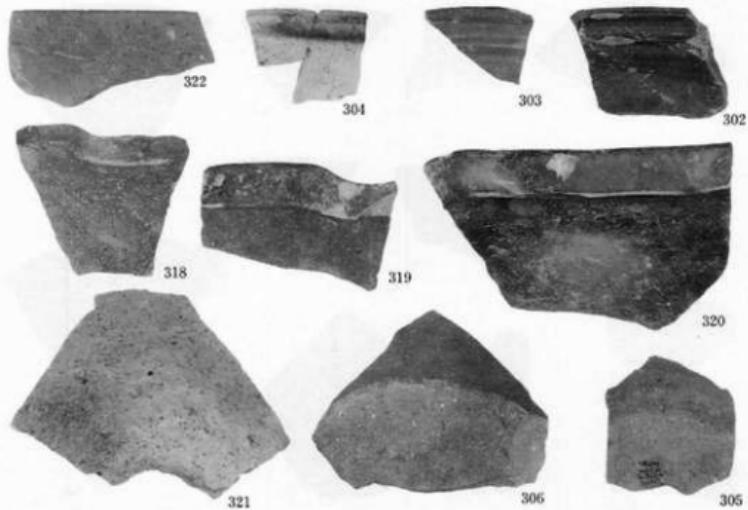
1. 落ち込み1出土土器 土師器皿



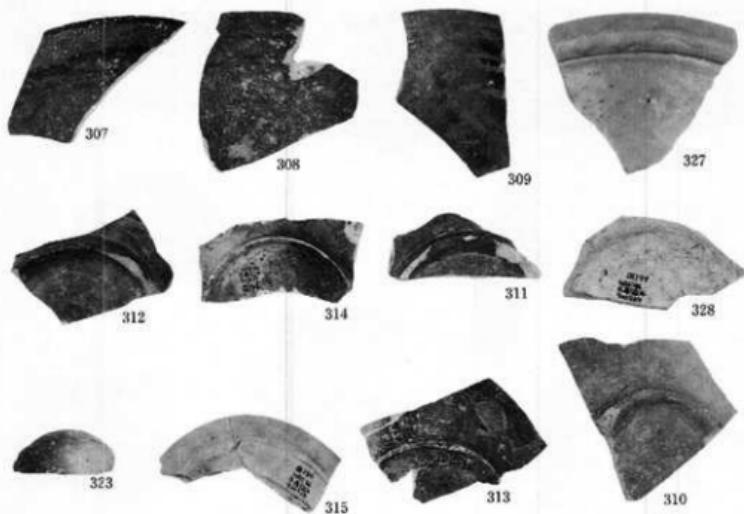
2. 深ち込み1出土土器 土師器皿



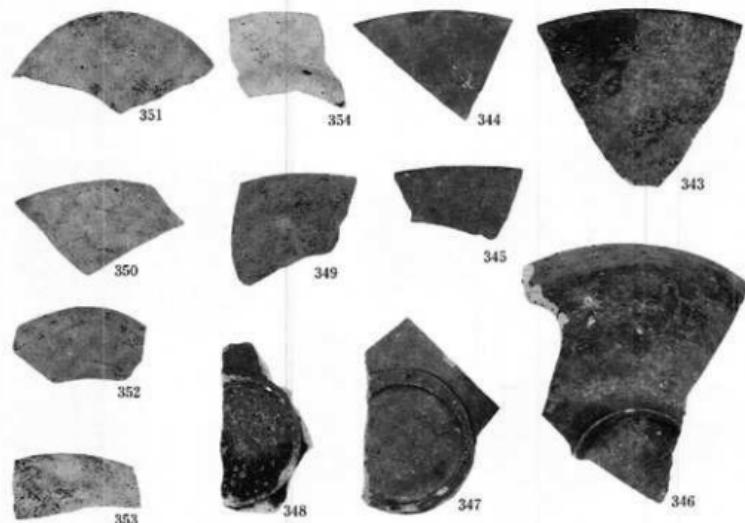
1. 落ち込み1出土土器 土師器皿・羽釜・擂台、瓦器羽釜



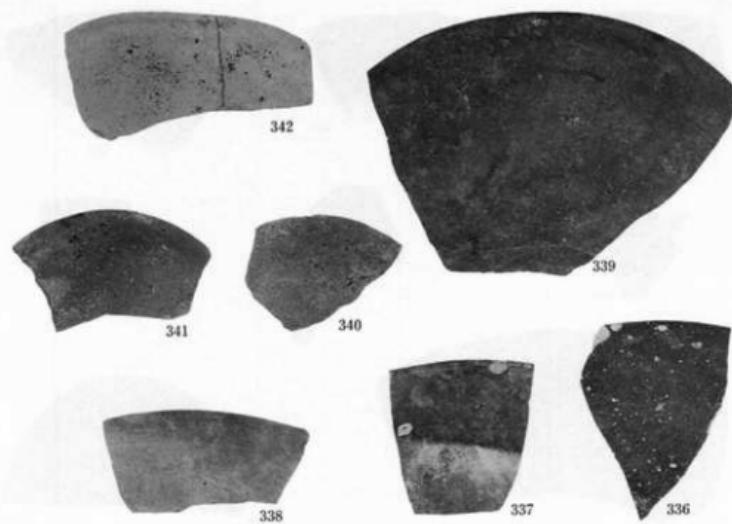
2. 落ち込み1出土土器 須恵器甕・捏鉢、瓦器擂鉢・深鉢



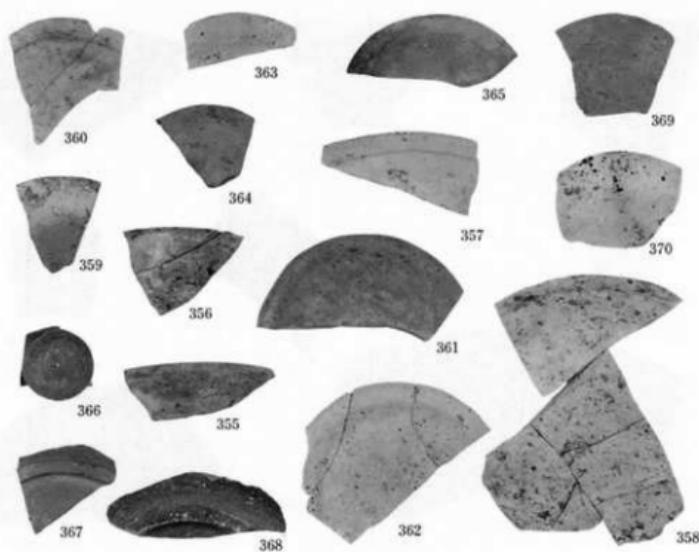
1. 落ち込み 1 出土土器 輸入磁器碗、瓦器碗・皿・壺



2. 落ち込み 3 出土土器 瓦器碗、土師器皿

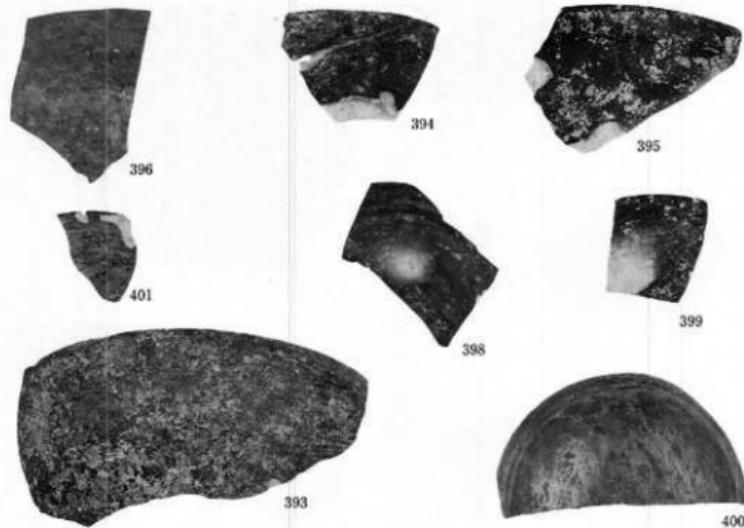


1. 落込み器出土土器 瓦器類、土器類

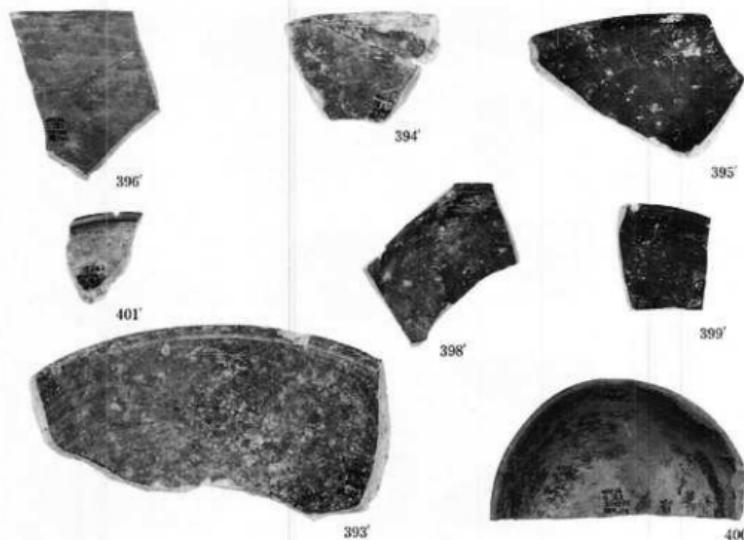


2. 溝1・2出土土器 土器類、須恵器類

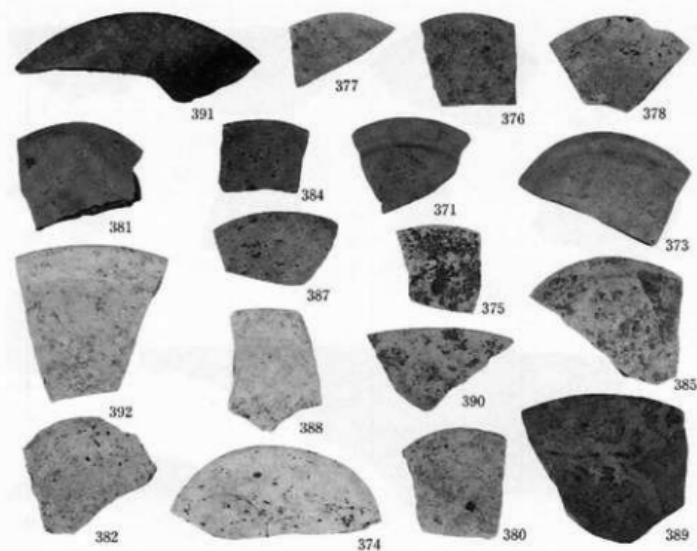
圖版 28
遺物



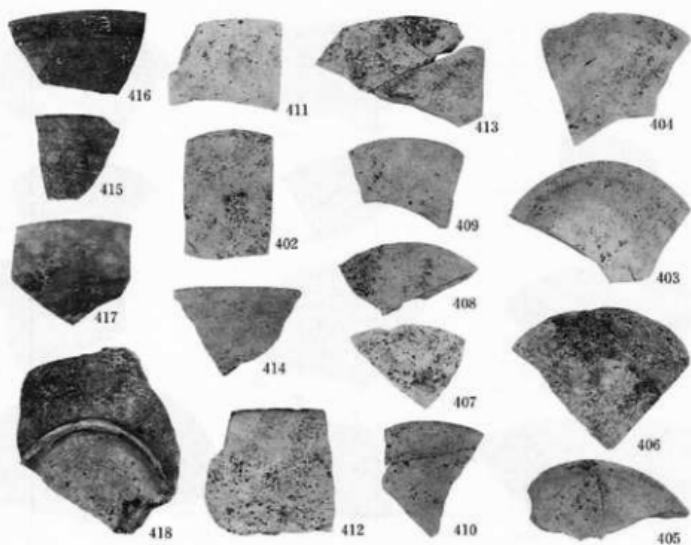
1. 漢 3 出土土器 瓦器 檻・皿 (表)



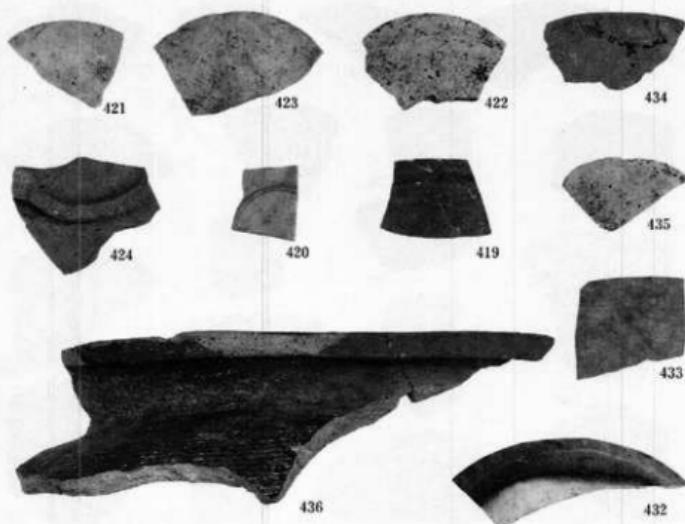
2. 漢 3 出土土器 瓦器 檻・皿 (裏)



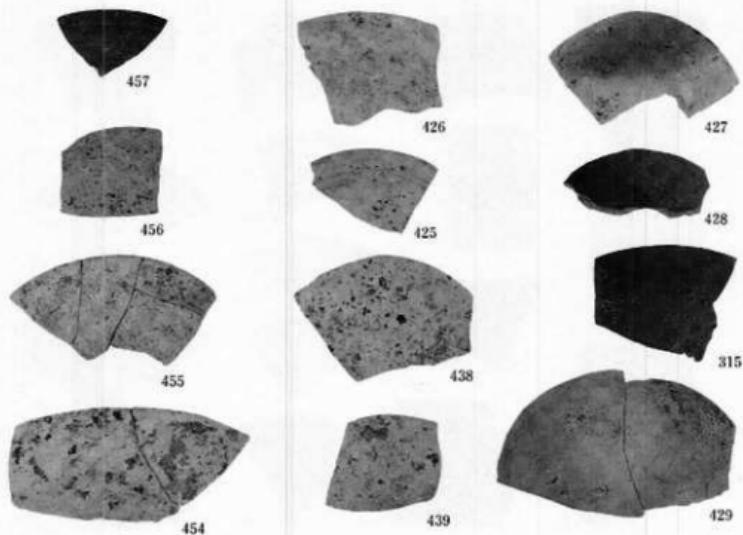
1. 漢 3 出土土器 土師器皿・杯



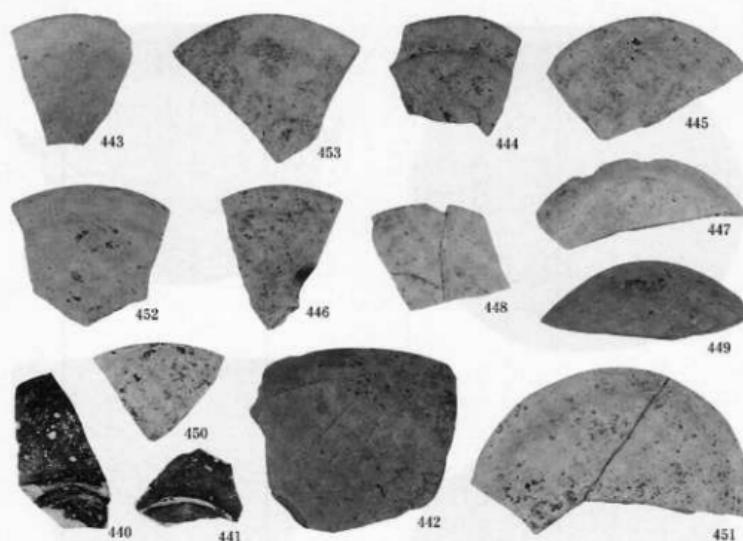
2. 土城 2 出土土器 瓦器碗、土師器皿・杯・盤



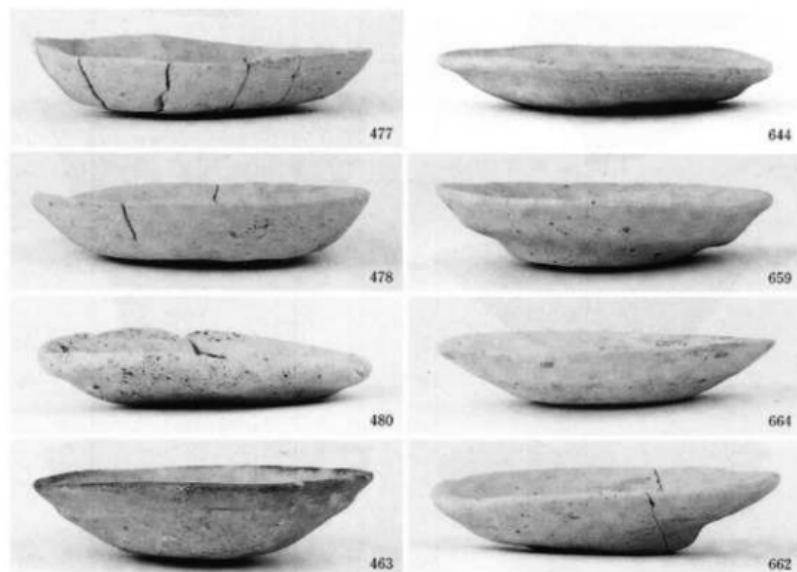
1. 土塙4・5出土土器 瓦器柄・甕、須恵器壺、土師器皿、輸入磁器皿



2. 土塙6・7、ピット5・11出土土器 瓦器皿、土師器皿



1. ピット8出土土器 瓦器類、土師器皿



2. A・B地区包含層出土土器 土師器皿、瓦器類



534



554



539



591



546



592



572



584

B 地區包含層出土土器 庄內式土器甕、土師器甕、高杯、把手付甕、杯、須忠器碗、鉢、杯



587



586



707



696



671'



718



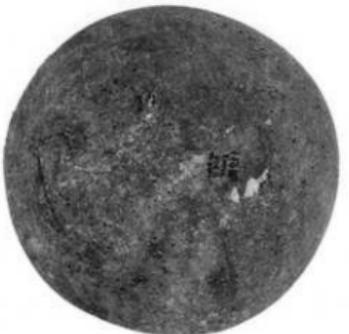
671



712



702



671'



694

B・C地区包含層出土土器 須恵器蓋、土師器皿、瓦器柄



668'



672'



668



672



668'



672'



804



800



745



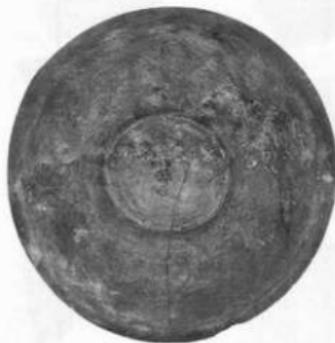
749'



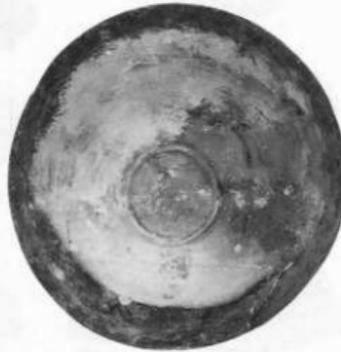
745



749

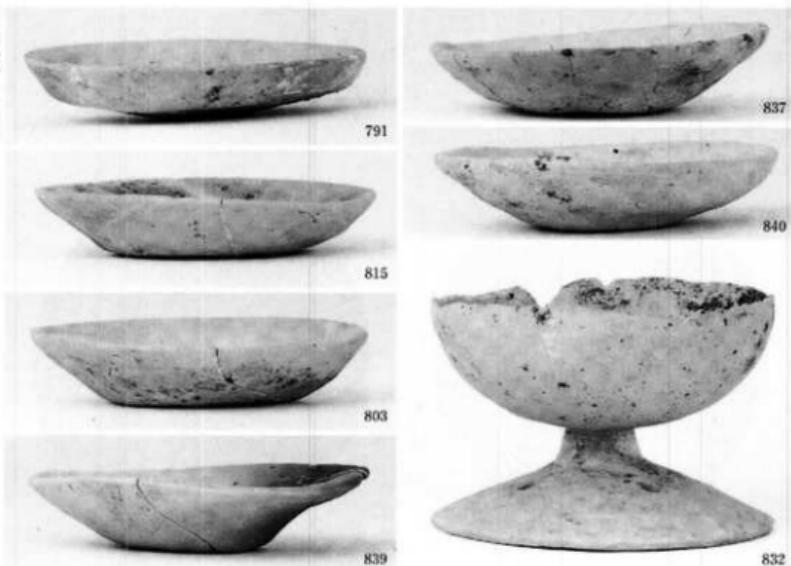


745'

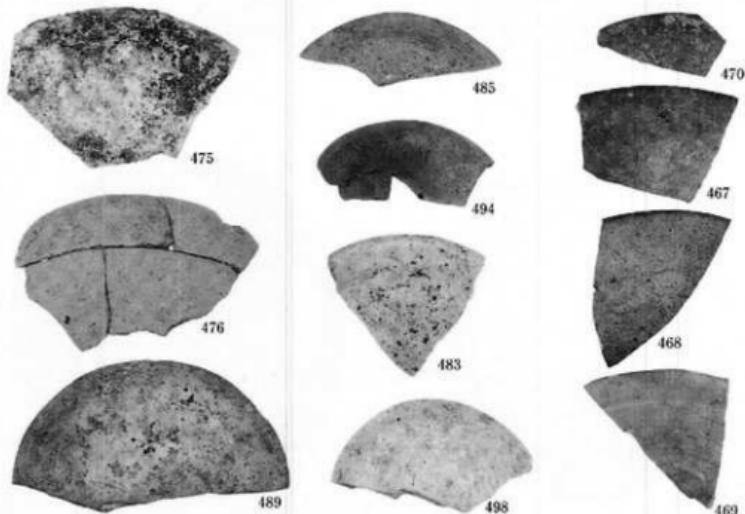


749'

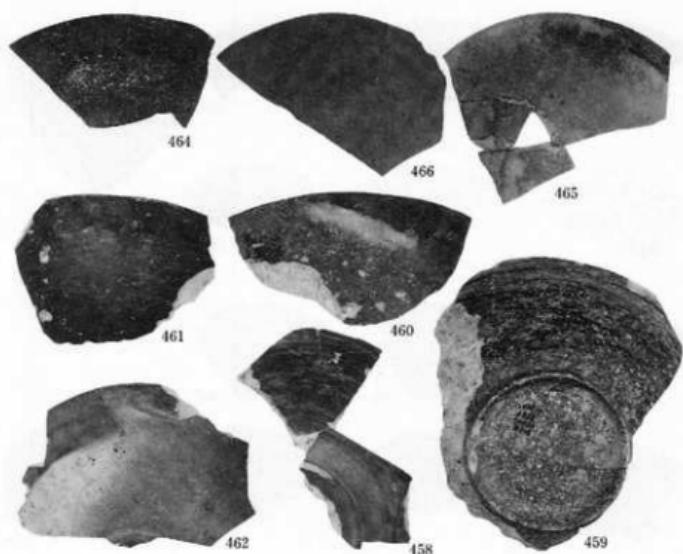
C-1 地區包含層出土土器 土師器皿、瓦器碗



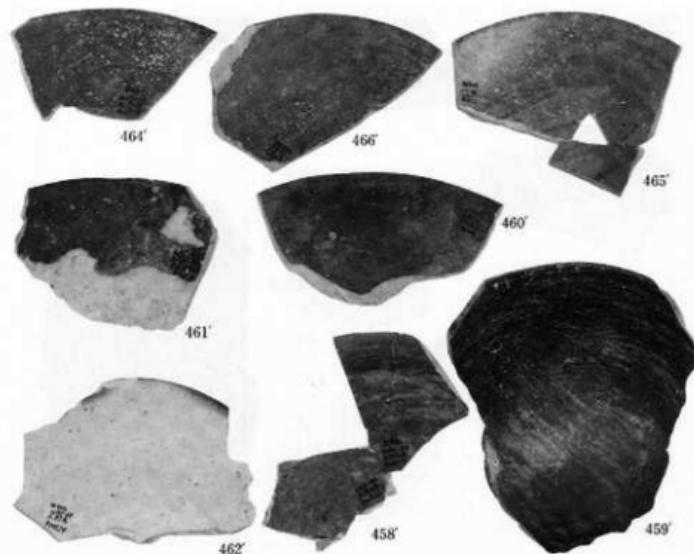
1. C-1-D 地區包含層出土土器 土師器皿・高杯



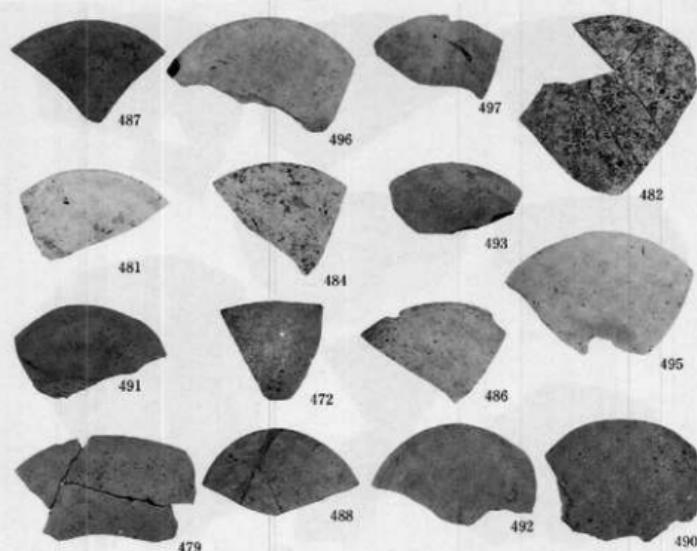
2. A 地區包含層出土土器 瓦器柄・皿・土師器皿



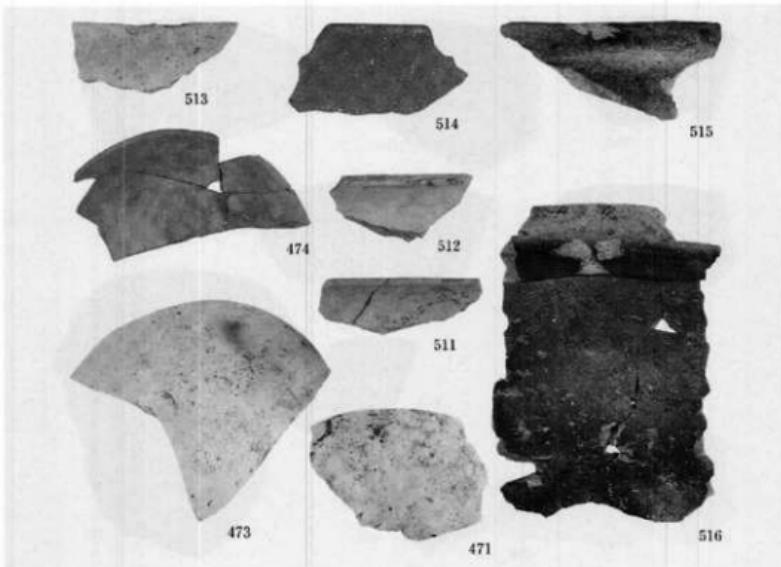
1. A 地區包含層出土土器 瓦器編 (表)



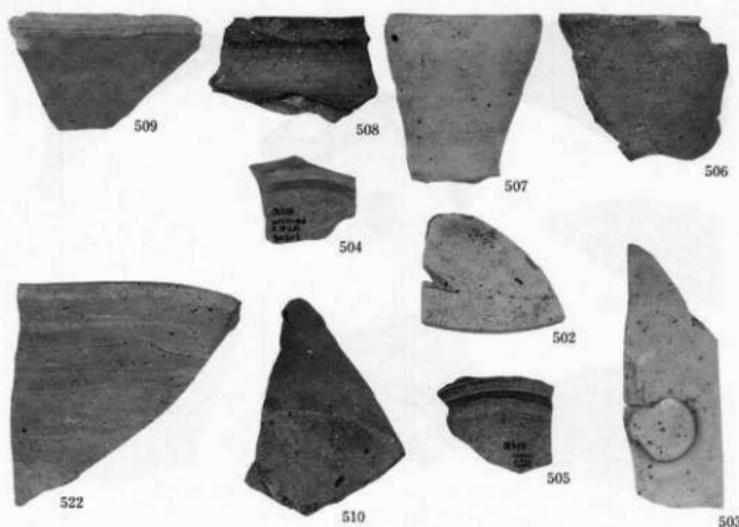
2. A 地區包含層出土土器 瓦器編 (裏)



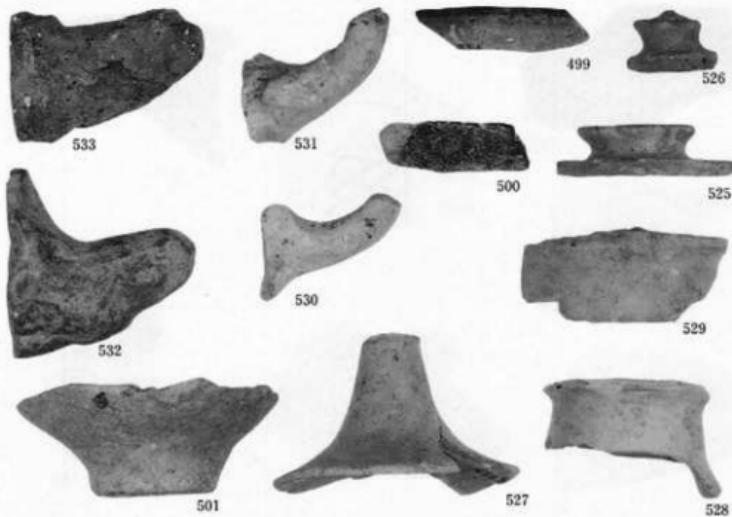
1. A 地區包含層出土土器 土師器皿



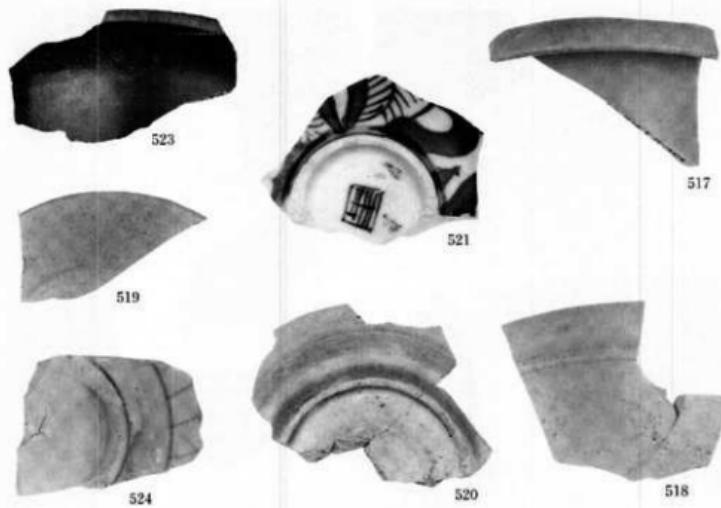
2. A 地區包含層出土土器 土師器皿・杯・盤・羽蓋



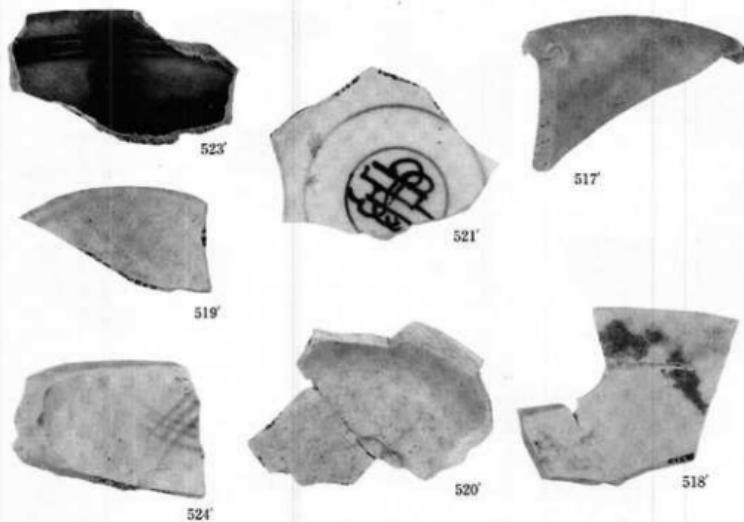
1. A地区包含層出土土器 須恵器提瓶・甕・杯・蓋・壺・鉢・捏鉢、陶磁器擂鉢



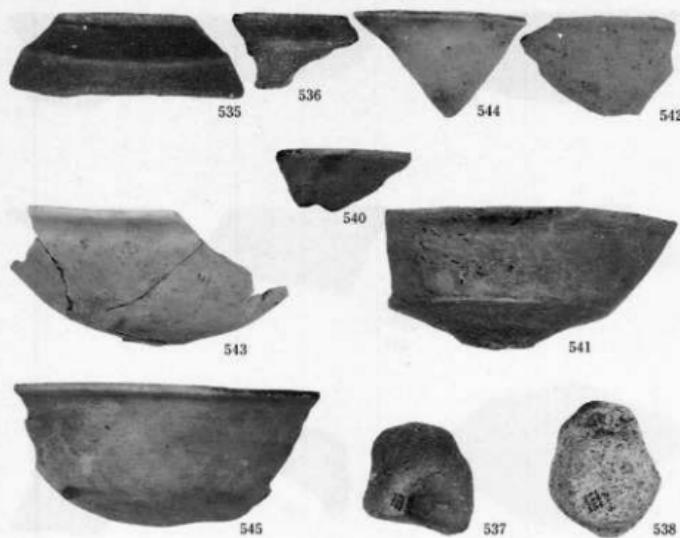
2. A地区包含層出土土器 弥生土器底部、庄内式土器甕、土師器高杯・蓋・高台付皿・把手



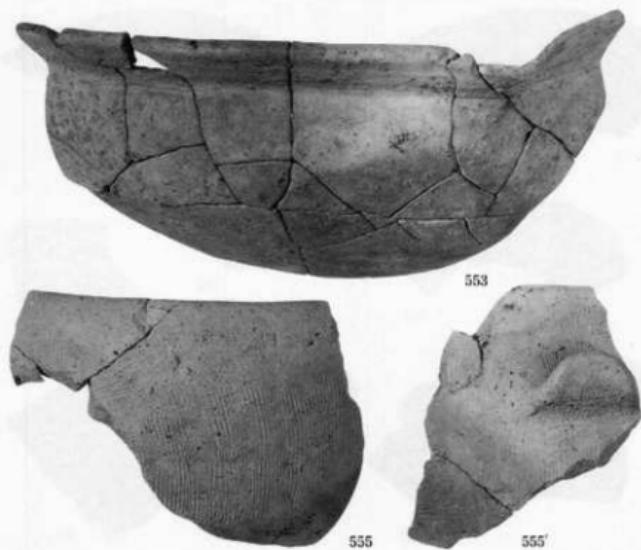
1. A地区包含层出土土器·输入磁器白磁碗·白磁盏·青花碗、陶磁器碗·皿(表)



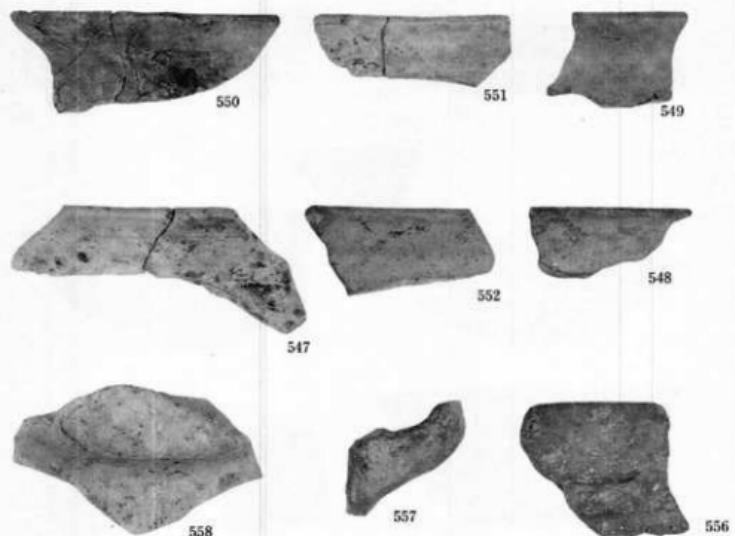
2. A地区包含层出土土器·输入磁器白磁碗·白磁盏·青花碗、陶磁器碗·皿(裏)



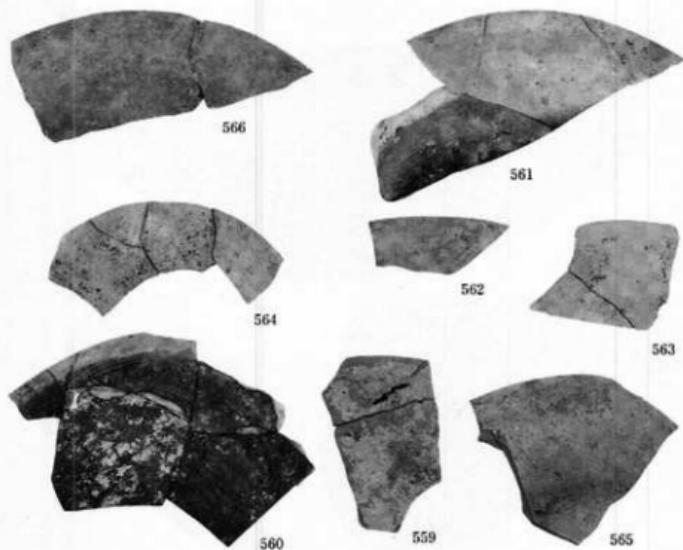
1. B 地区包含層出土土器 弥生土器底部、庄内式土器甕、土師器高杯



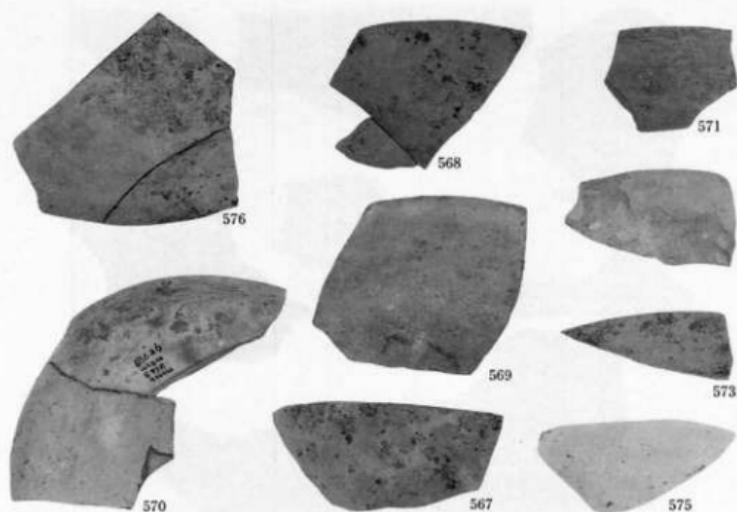
2. B 地区包含層出土土器 土師器鍋・把手付鍋



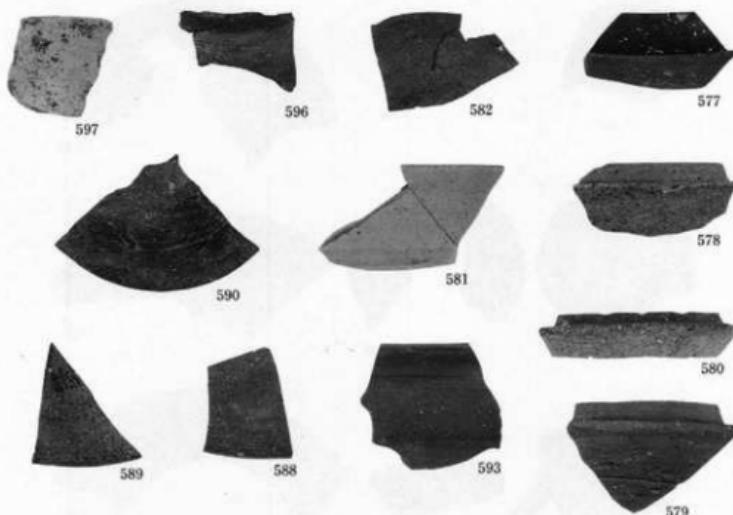
1. A地区包含層出土土器 土師器底、羽釜，把手



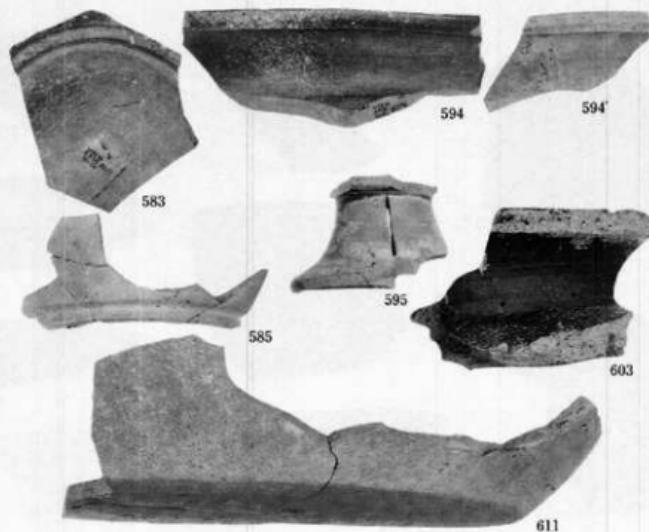
2. B地区包含層出土土器 土師器底



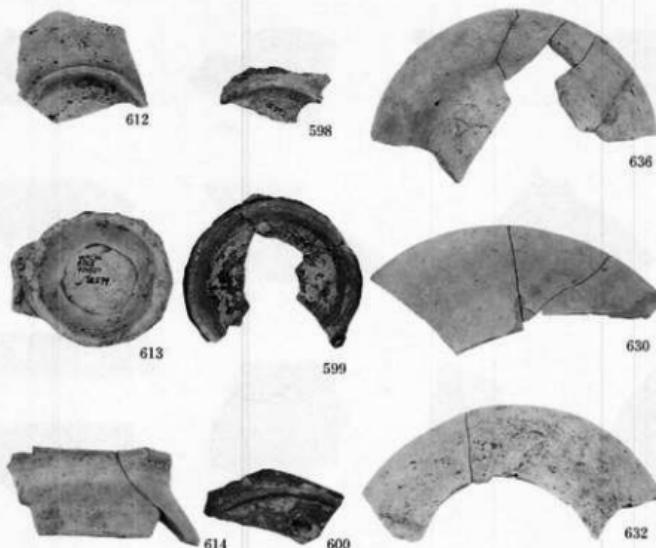
1. B 地區包含層出土土器 土師器杯·蓋



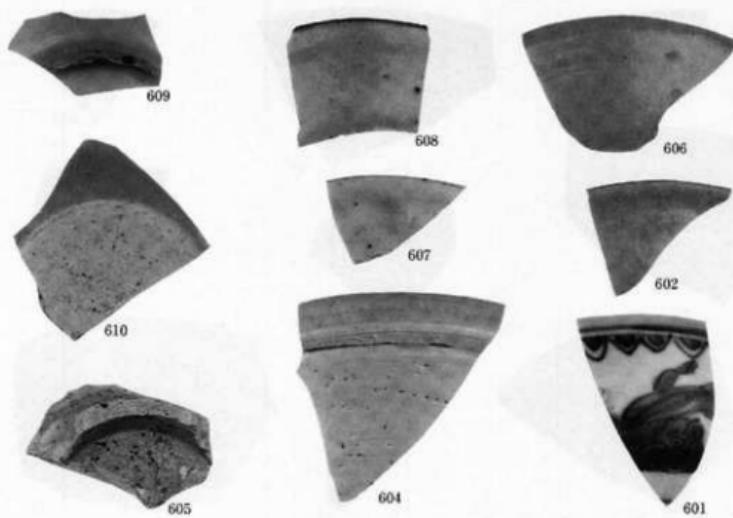
2. B 地區包含層出土土器 須惠器杯·蓋·鉢·壺



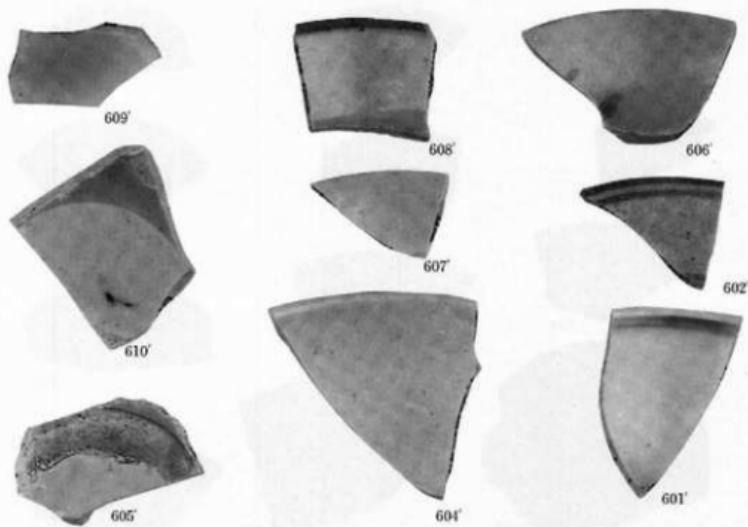
1. B地区包含层出土土器 须惠器杯·高杯·甌、陶磁器甌



2. B地区包含层出土土器 须惠器甌、黑色土器甌、土器皿·高台付皿

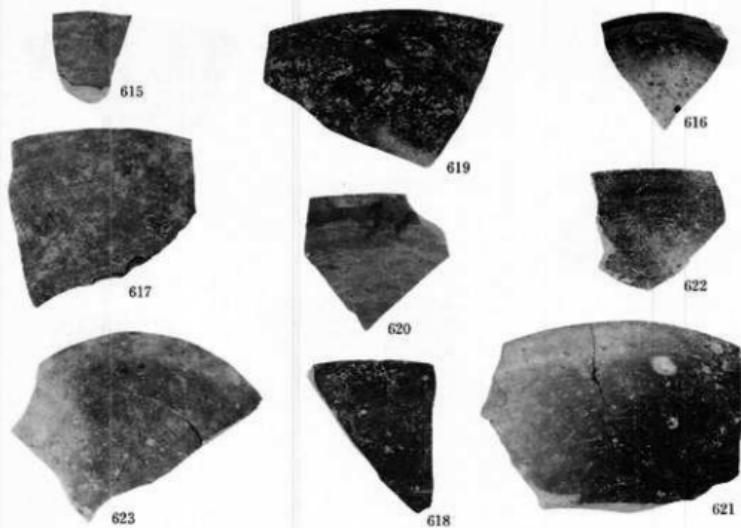


1. B 地區包含層出土土器 陶磁器碗、輸入磁器青磁盤・白磁碗・白磁盤 (表)

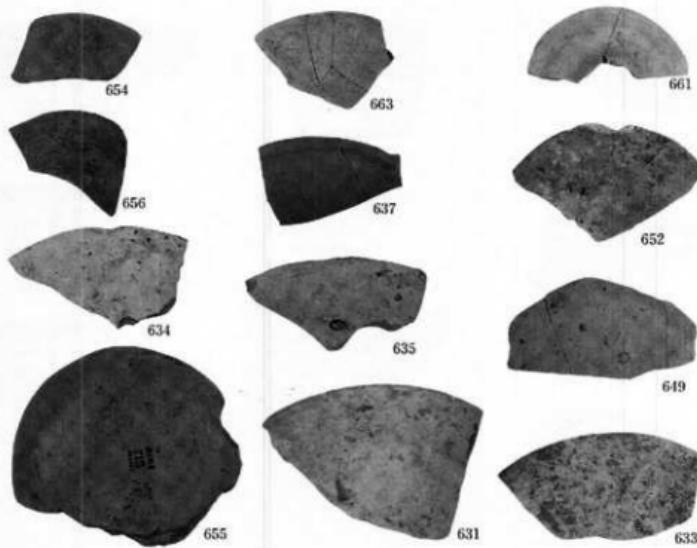


2. B 地區包含層出土土器 陶磁器碗、輸入磁器青磁盤・白磁碗・白磁盤 (裏)

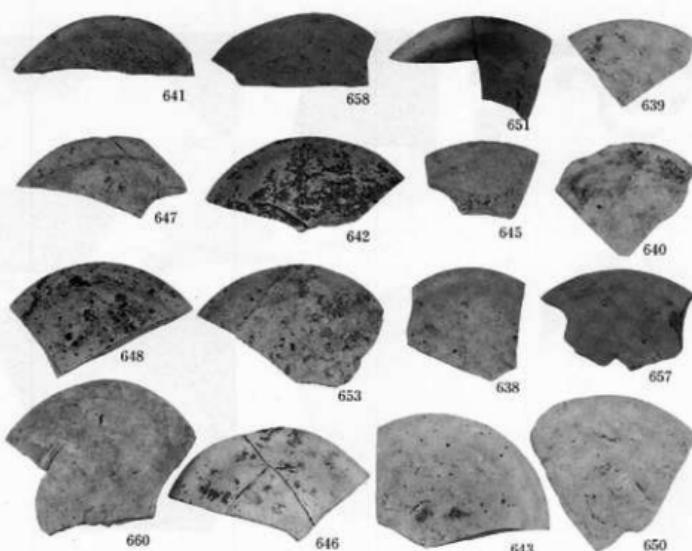
圖版
46
遺物



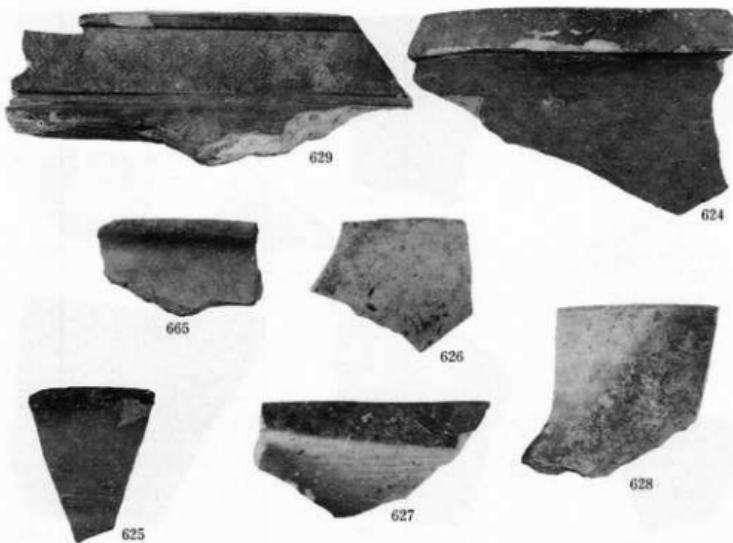
1. B 地區包含層出土土器 瓦器揃・皿



2. B 地區包含層出土土器 土師器皿

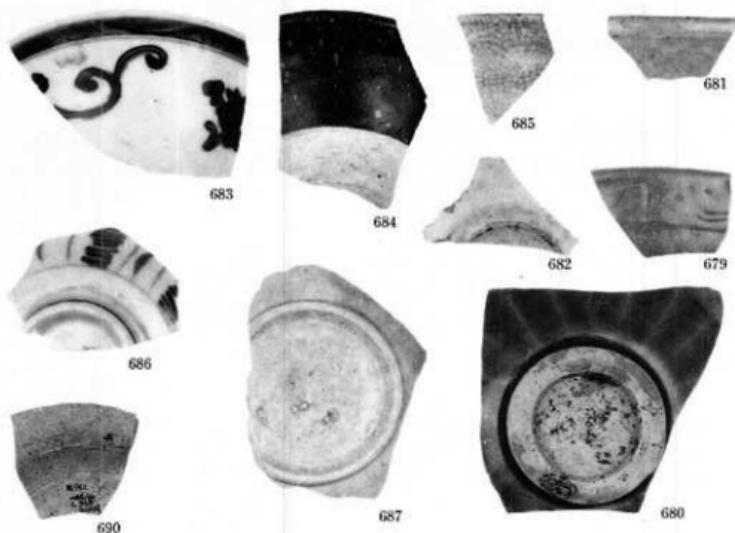


1. B 地區包含層出土土器 土師器皿

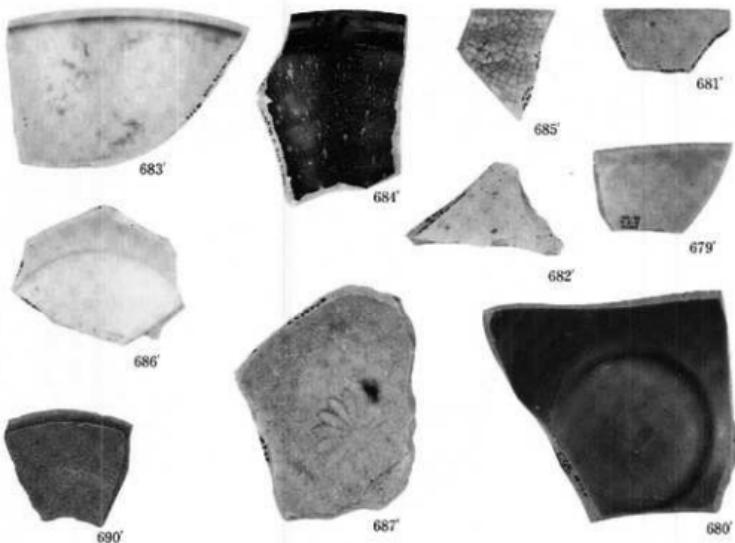


2. B 地區包含層出土土器 土師器羽釜、須惠器捏鉢、瓦器捺鉢・風炉・深鉢・鉢

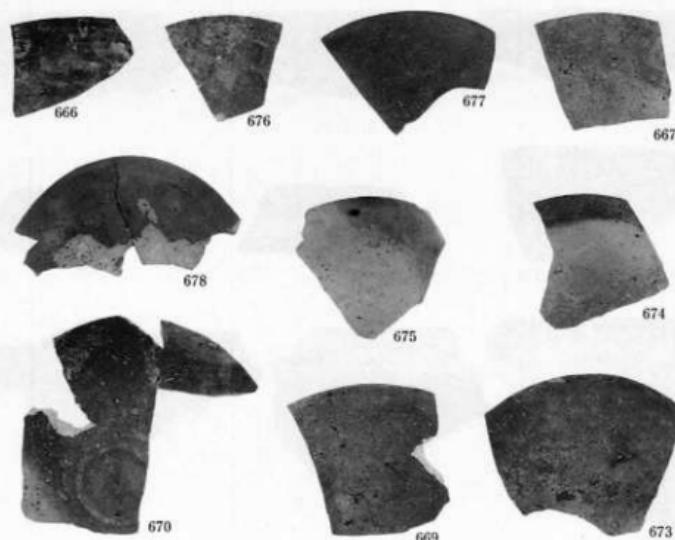
圖版
48
造物



1. C地区包含层出土土器 输入磁器青磁碗·白磁碗·青花碗、陶磁器碗·皿 (表)



2. C地区包含层出土土器 输入磁器青磁碗·白磁碗·青花碗、陶磁器碗·皿 (表)

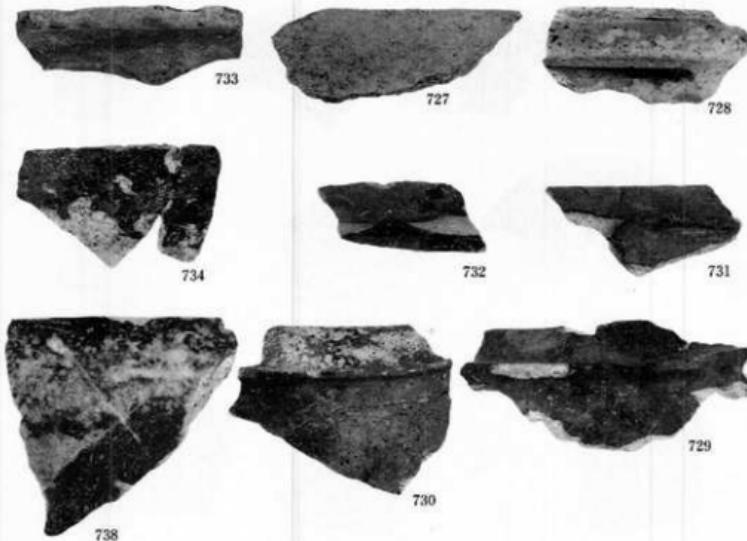


1. C地区包含層出土土器 瓦器類

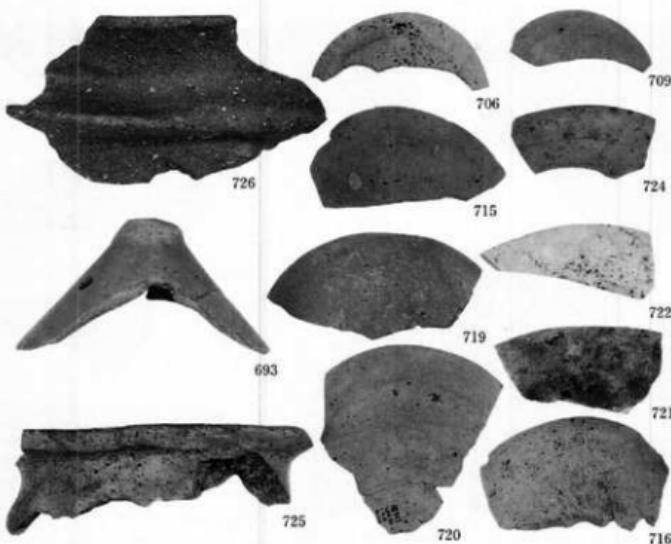


2. C地区包含層出土土器 須恵器蓋・甕・捏鉢、陶磁器蓋・甕

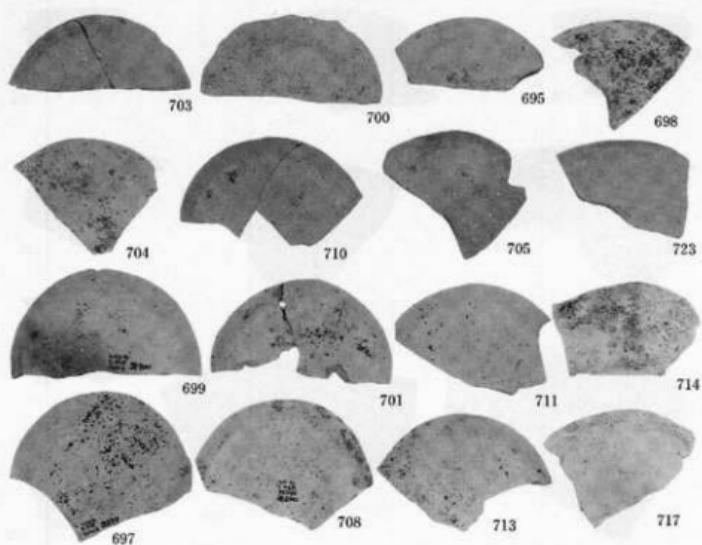
圖版
50
遺物



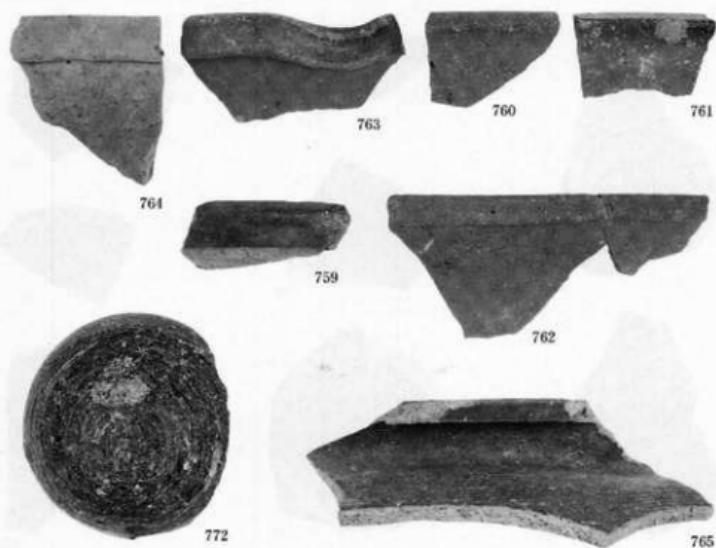
1. C 地區包含層出土土器 瓦器羽釜・甕・火合・砵、土師器羽釜



2. C 地區包含層出土土器 土師器器台・羽釜・皿・高台付皿

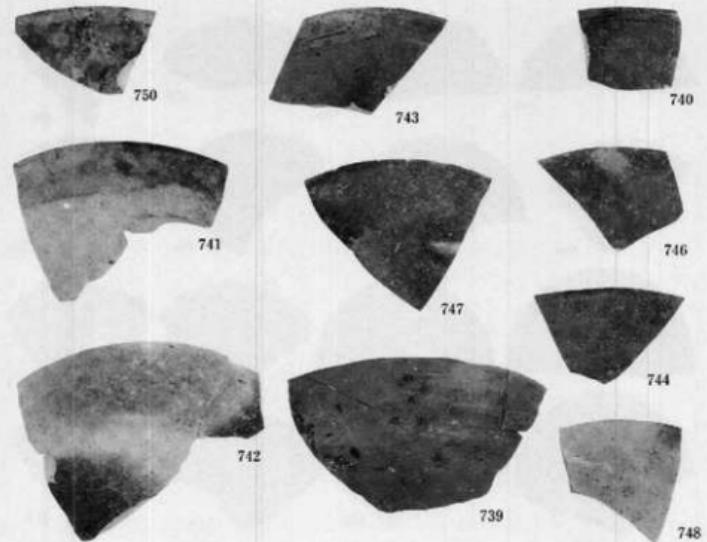


1. C 地区包含層出土土器 土師器皿

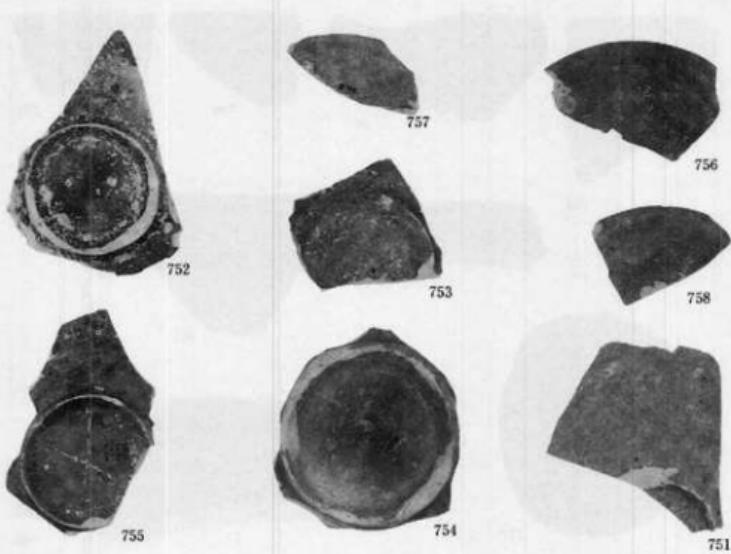


2. C-1 地区包含層出土土器 須恵器皿・甕、瓦器皿・檣林

圖版
52
遺物

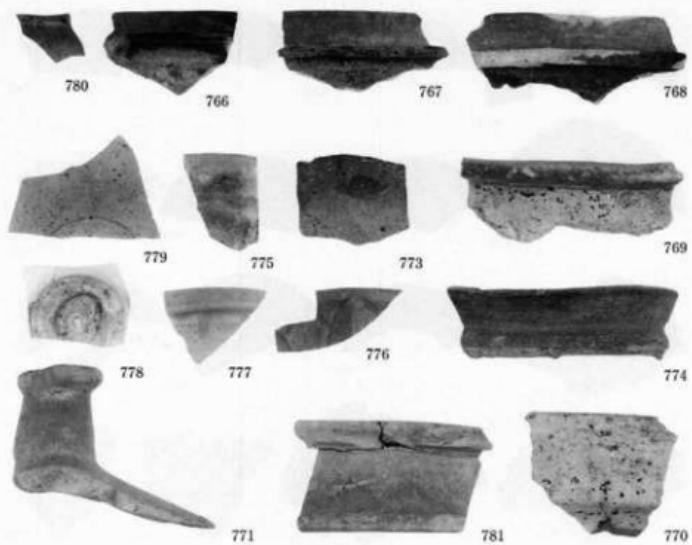


1. C-1 地區包含層出土土器 瓦器碗

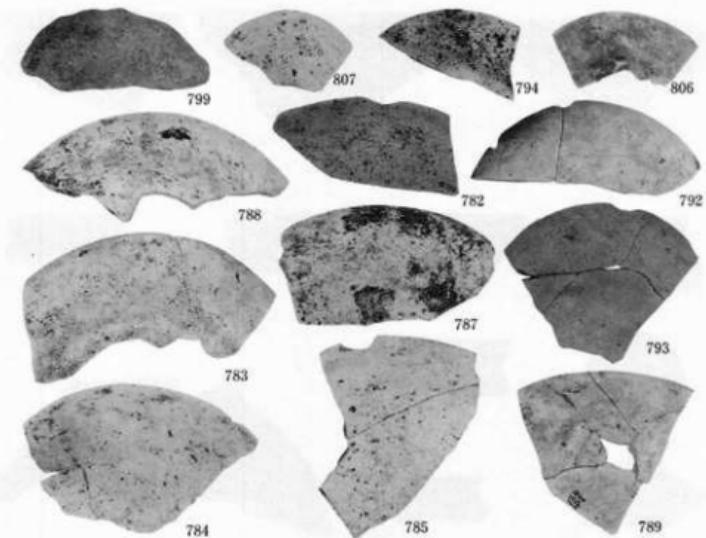


2. C-1 地區包含層出土土器 瓦器碗 · 三

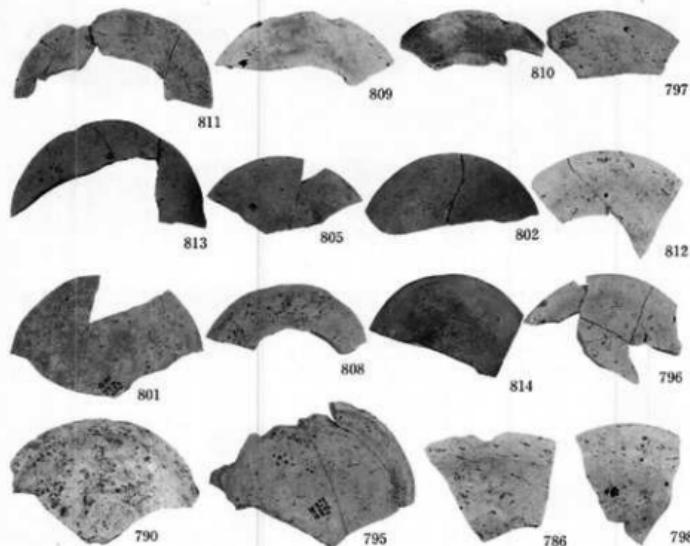
図版 53
遺物



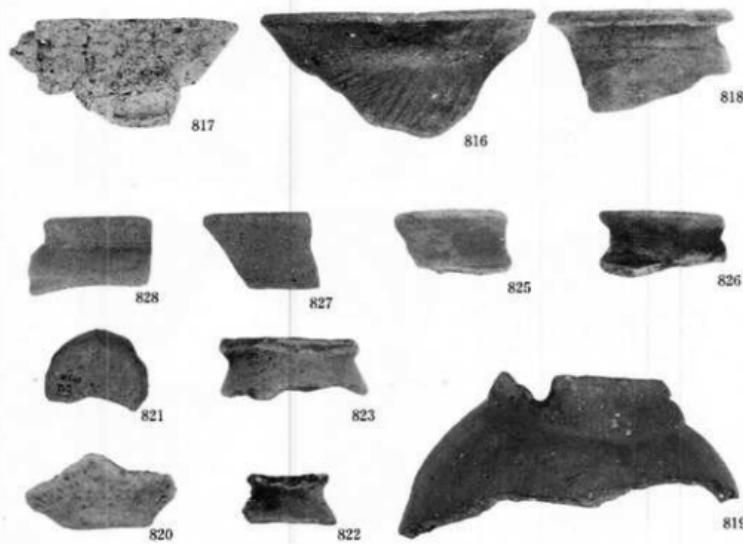
1. C-1 地区包含層出土土器 瓦器羽釜・壺、土師器壺・高杯・羽釜・甕、高台付皿、黑色土器椀、輸入磁器青磁椀、白磁椀・白磁皿、陶磁器椀



2. C-1 地区包含層出土土器 土師器皿

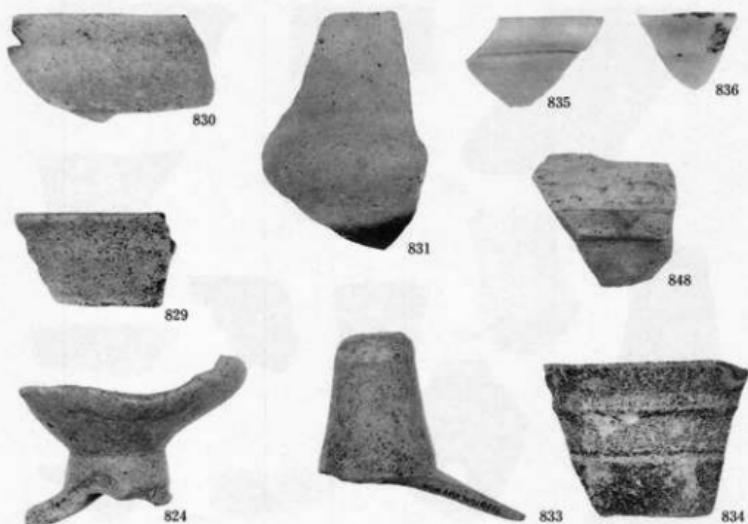


1. C - I 地區包含層出土土器 土師器皿

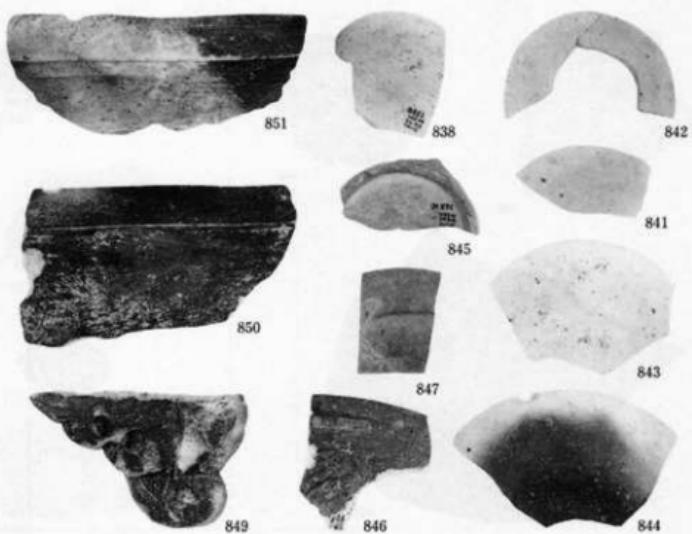


2. D 地區包含層出土土器 弓生土器皿、庄內式土器皿、台付器、製壠土器

図版 55 遺物

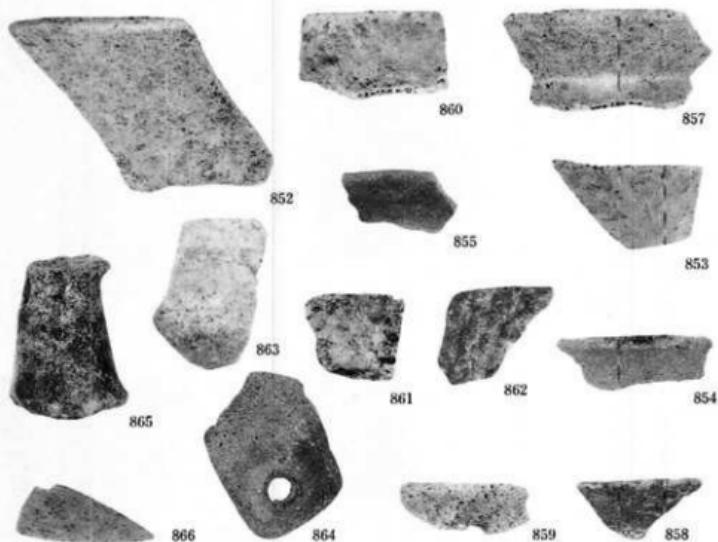


1. D地区包含層出土土器 布留式土器器台・甕・小型丸底壺・高杯、須恵器壺、土師器羽釜、輪入磁器白磁碗・白磁皿

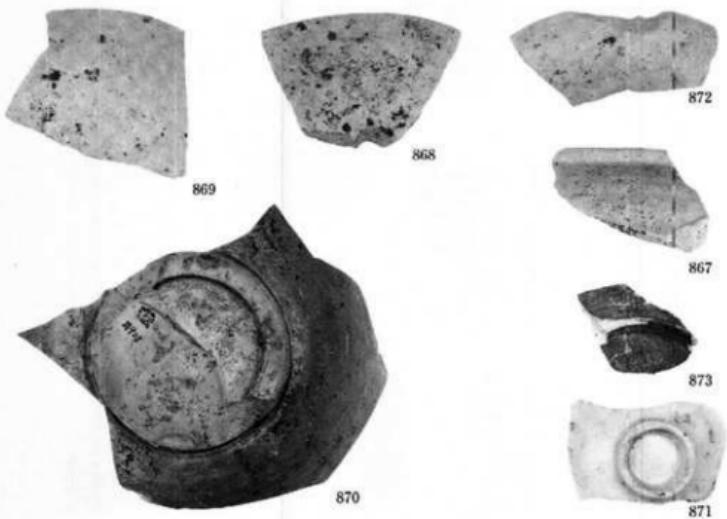


2. D地区包含層出土土器 瓦器碗・擂鉢・火合、土師器碗・皿

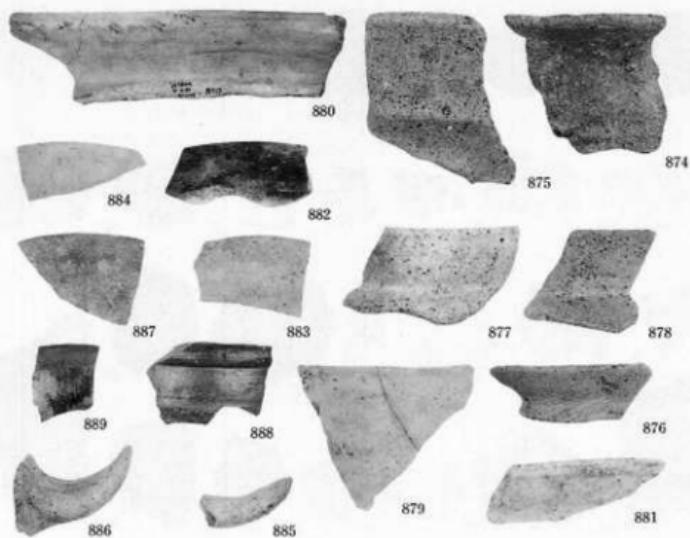
図版 56
遺物



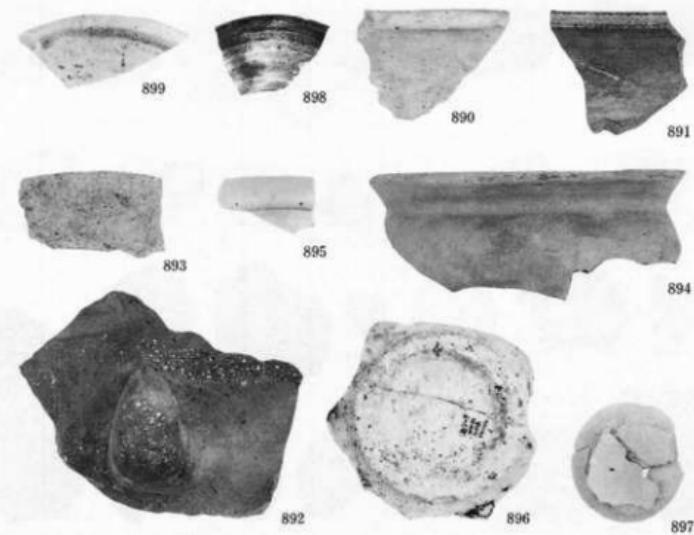
1. E地区包含層出土土器 陶生土器甕・高杯、庄内式土器甕・甕、布留式土器甕・鉢・高杯



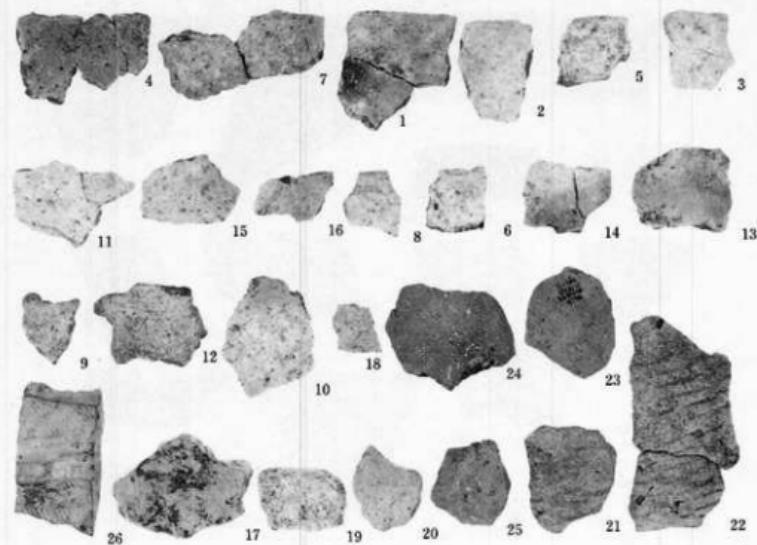
2. E地区包含層出土土器 土師器甕・杯・皿、瓦器碗、輸入器青磁碗・白磁碗



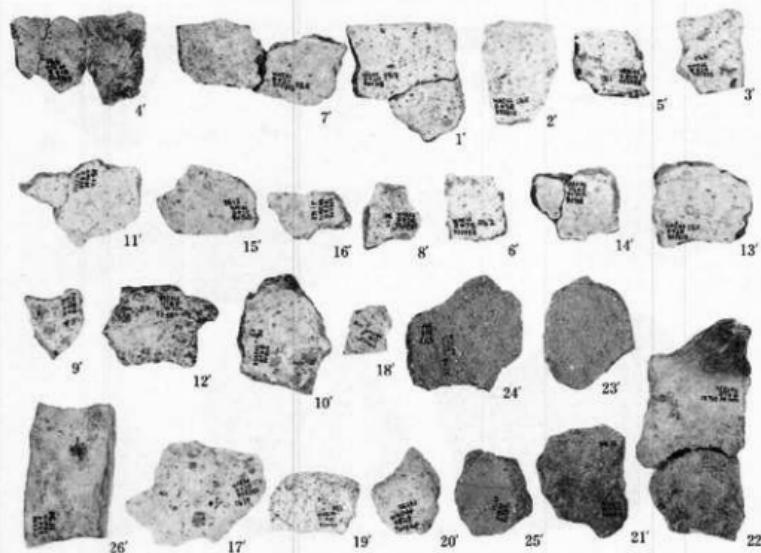
1. F 地区包含層出土土器 弥生土器壺・甕、布留式土器甕、土師器甕・瓶・皿・把手、瓦器甕、陶磁器甕、輸入磁器天目茶碗



2. G 地区包含層出土土器 須恵器甕・把手、土師器甕、高台付皿、輸入磁器白磁碗、陶磁器皿



1. 製塙土器 (表)



2. 製塙土器 (表)



1



2



3



7

瓦 軒平瓦・軒九瓦



8



9



11



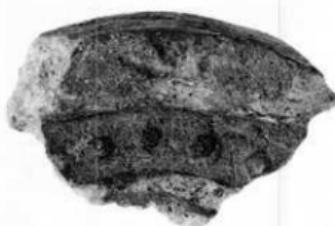
10



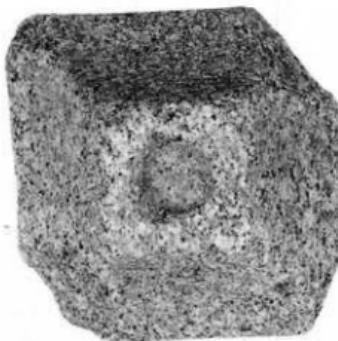
12



12



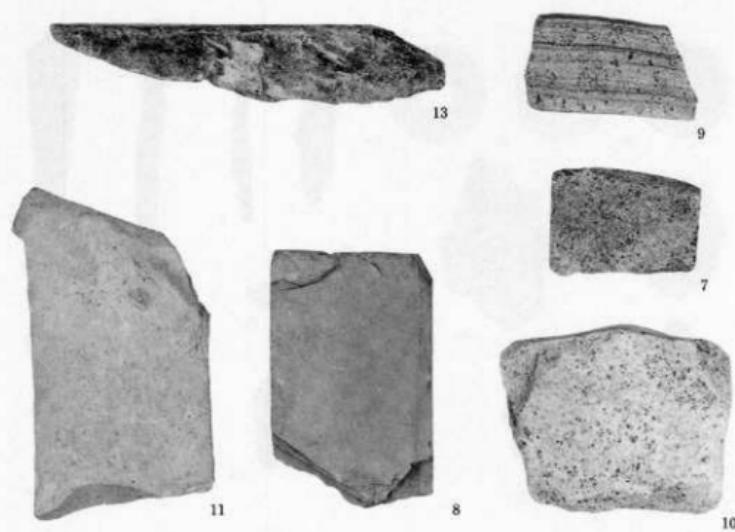
13



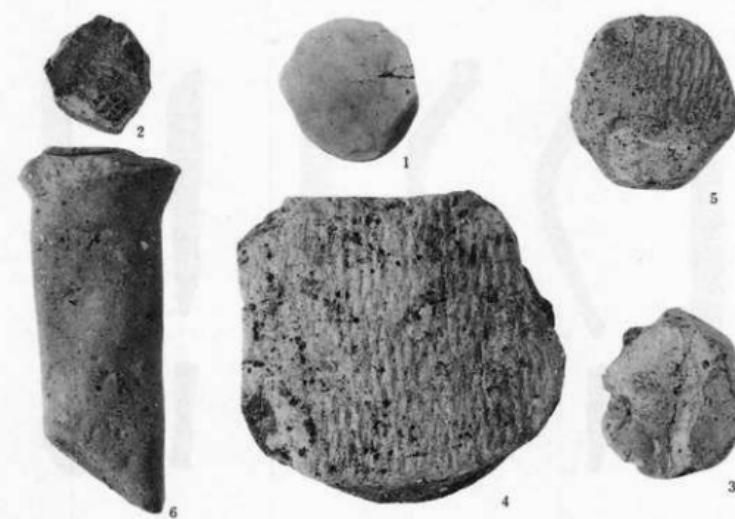
14

瓦・軒丸瓦、石製品 瓦・五輪塔

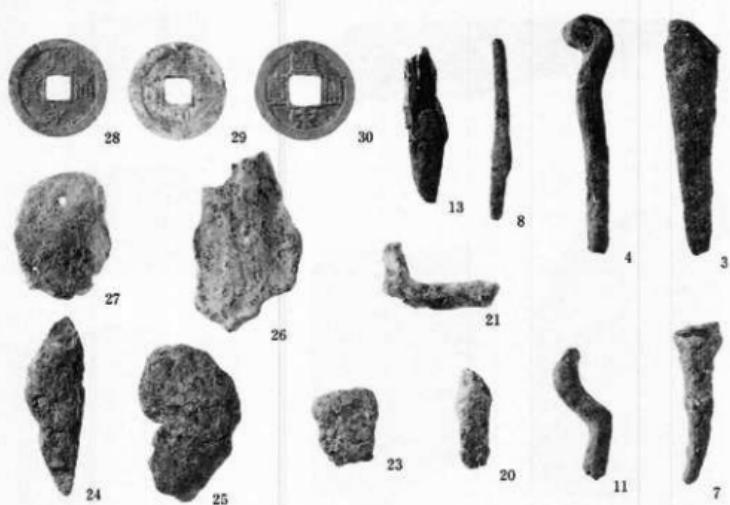
図版 61 遺物



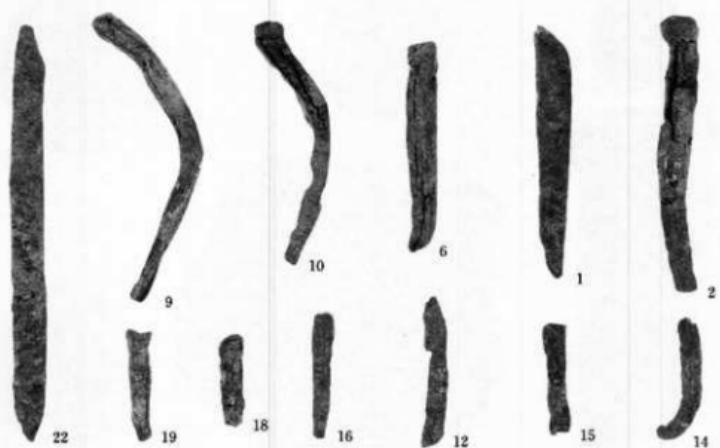
1. 石製品 砕石・錐



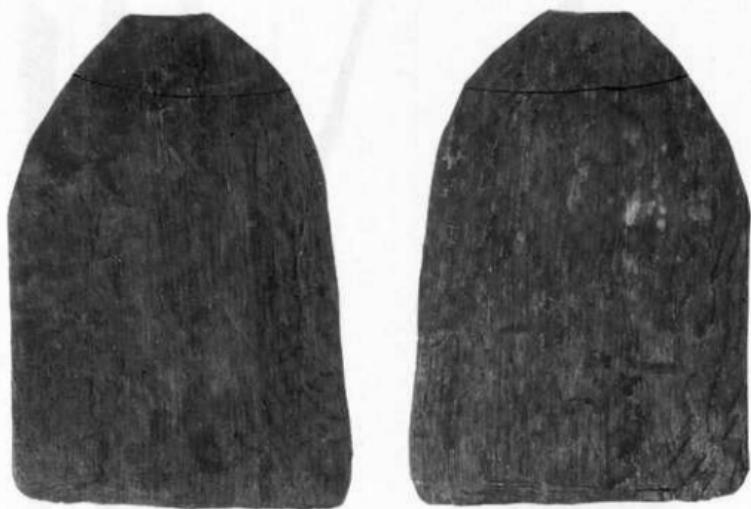
2. 土製品 円板状土製品・板状土製品



1. 金属製品 鉤・用途不明品、錢貨



2. 金属製品 鉤・用途不明品



1



3



木製品 勝・箸・棒材・板材

若江遺跡第44次発掘調査報告

1993年9月30日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会
印刷 ドウミ印刷 広研社